

令和5年度  
野洲市内遺跡発掘調査年報

2024年3月

滋賀県野洲市教育委員会





# 序 文

野洲市は、琵琶湖の東南部に位置し、野洲川と近江富士の三上山に代表される自然豊かなまちです。埋蔵文化財では、大岩山出土の銅鐸 24 個をはじめ、国史跡大岩山古墳群や重要文化財西河原遺跡群出土木簡などが広く知られ、これらを支えた人々の営みが市内各地の遺跡として周知されているところです。

このたびの『野洲市内遺跡発掘調査年報』は、令和 4 年度、5 年度の国庫ならびに県費補助を受けて実施した「市内遺跡発掘調査等事業」の結果を概要報告書として取りまとめたものです。

本書が郷土の歴史、文化財への理解と保護に寄与することができれば幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただきました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

令和 6 年(2024) 3 月

野洲市教育委員会

教育長 西 村 健

# 例 言

1 本書は、令和4年度から令和5年度国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金および滋賀県文化財保存事業費補助金を受けて、野洲市教育委員会が実施した市内遺跡発掘調査等事業の概要報告書である。

2 本事業は、文化庁文化財第二課埋蔵文化財部門、滋賀県文化スポーツ部文化財保護課の指導・助言を得て、野洲市教育委員会が下記の事務局体制で実施した。

令和4年度 教育長 西村 健 教育部長 馬野 明 教育部次長 北脇康久  
教育部次長兼文化財保護課長兼歴史民俗博物館館長 行俊 勉  
課長補佐 河合順之 課長補佐 福永清治 専門員 進藤 武  
技師 芦塚晶太 技師 渡邊貴洋

令和5年度 教育長 西村 健 教育部長 馬野 明 教育部次長 北脇康久  
教育部次長兼文化財保護課長兼歴史民俗博物館館長 行俊 勉  
課長補佐 河合順之 課長補佐 福永清治 専門員 進藤 武  
主任 鈴木 茂 技師 渡邊貴洋

3 本書には、令和4年10月から令和5年9月までに現地調査および整理調査を終了した成果を掲載した。本書の執筆は調査補助員の協力を得て、各調査担当者が行い、各文末に明記した。編集は課員の協力のもと渡邊が行った。

4 現地調査における基準方位は、特に設定しない限り真北を示す。磁北や座標北を用いる場合はその旨を図中に表記する。

5 標高は、野洲市公共下水道台帳図の水準を基準としている。

6 遺構の表示記号は、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の略号を準用した。

7 遺跡名や遺跡範囲については、『平成28年度滋賀県遺跡地図』（滋賀県教育委員会 平成29年3月発行）により、その範囲は随時「野洲市遺跡地図」として改訂している。

8 土色は、「新版標準土色帖」（1993年版）などを参考にした。

9 出土した遺物および記録などは、野洲市教育委員会で保管している。

10 現地発掘調査および整理作業は、下記の方々の参加・協力を得た。（敬称略）

山崎 馨 大黒康弘 松下嘉暢 中川九英 公益社団法人野洲市シルバー人材センター

# 目 次

序 文

例 言

目 次

収載遺跡一覧・調査地位置図

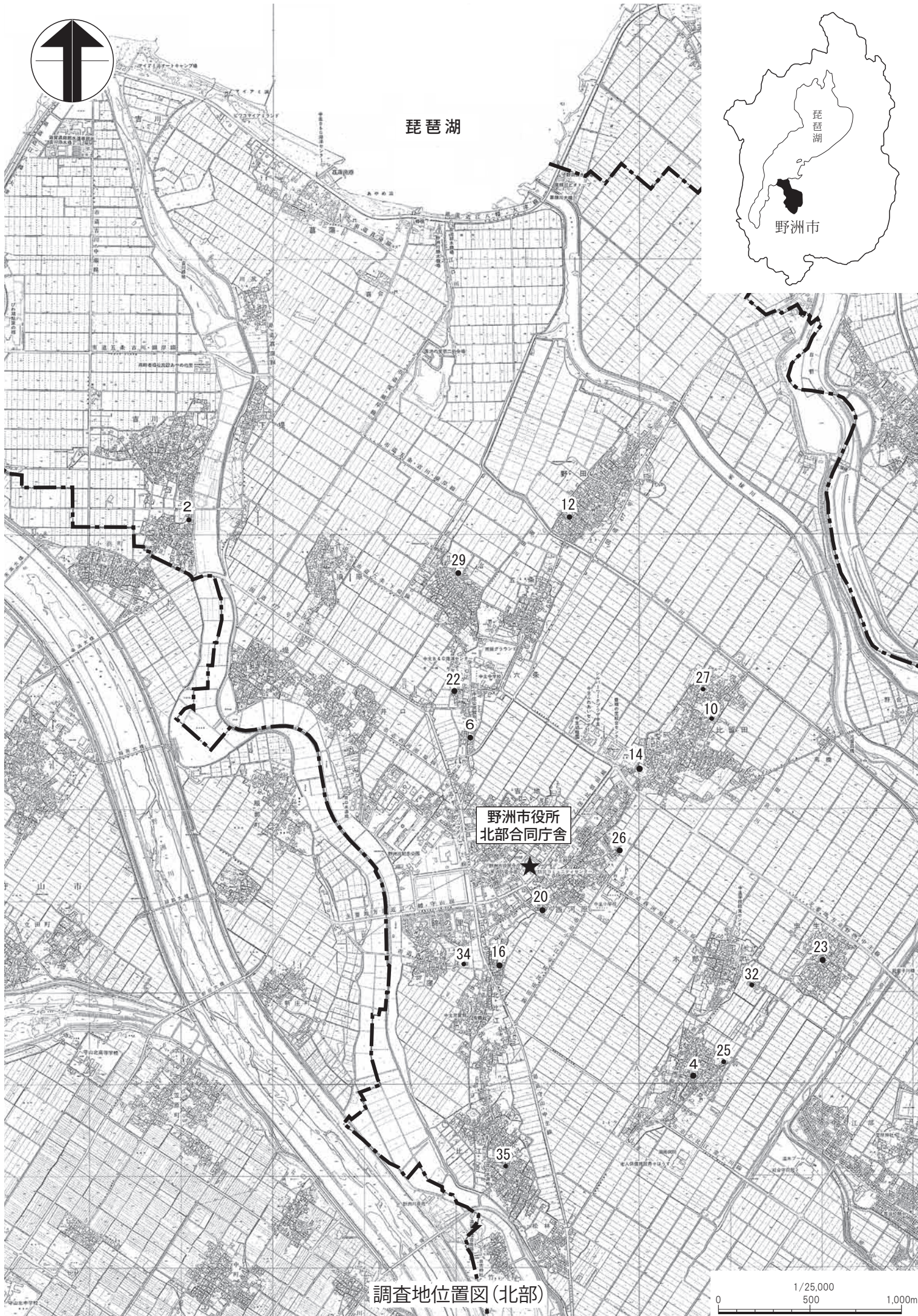
1. 永原御殿跡	永原字馬場ノ内 1031 番地	1
2. 吉川東出遺跡	吉川字里ノ内 1314 番 2	6
3. 小堤遺跡	小堤 500 番 1 外 17 筆	11
4. 八夫遺跡	八夫字里ノ内 1487 番 5 外 2 筆	18
5. 小堤遺跡	小堤字西出 331 番、334 番	20
6. 六条遺跡	六条字川端 322 番	25
7. 小山遺跡	入町字小山 247 番 1 外 3 筆	27
8. 富波東遺跡	富波字山口乙 353 番 4	29
9. 斎ノ神遺跡	妙光寺字西ノ久保 286 番 3、290 番 3	34
10. 比留田遺跡	比留田字中出 992 番 1	36
11. 常楽寺遺跡	富波字町ノ裏甲 1001 番 1 の一部	38
12. 野田遺跡	野田字里ノ内 1950 番	42
13. 高木遺跡	高木字橋ノ内 704 番 1、704 番 4	45
14. 比留田遺跡	比留田字重高 743 番 5	47
15. 富波東遺跡	富波字山口乙 353 番 5	49

16. 光明寺遺跡	西河原 925 番 5, 921 番 6	51
17. 小篠原遺跡	小篠原字朴 2221 番 2	53
18. 富波東遺跡	富波字山口乙 353 番 6	56
19. 富波東遺跡	富波字山口乙 353 番 3	58
20. 西河原遺跡	西河原字六反田 896 番 2	60
21. 富波東遺跡	富波字山口乙 353 番 2	63
22. 五条遺跡	六条字辻堂 561 番 1	65
23. 虫生遺跡	虫生字里ノ内 200 番の一部	71
24. 大篠原西遺跡	大篠原字針目 3191 番 1 外 19 筆	79
25. 八夫遺跡	八夫字里ノ内 1559 番 1	85
26. 西河原遺跡	西河原字里ノ内 85 番 3、86 番 2	90
27. 比留田遺跡	比留田字重高 964 番 1、965 番 1	95
28. 高木遺跡	高木字橋ノ内 656 番 10、656 番 11	99
29. 安治放光寺遺跡	安治字北田 125 番 1 の一部	102
30. 三上遺跡	三上字神守田 491 番 1	105
31. 三上遺跡	三上字神守田 491 番 1	108
32. 木部遺跡	八夫字馬場表 627 番 2	112
33. 小篠原遺跡・林ノ腰古墳	小篠原字林ノ腰 2500 番	114
34. 乙窪遺跡	乙窪字宮前石原 396 番	120
35. 比江遺跡	比江字里ノ内 1160 番 6 の一部	122

令和 4 ・ 5 年 工事立会一覧

報告書抄録





琵琶湖

野洲市

野洲市役所  
北部合同庁舎

調査地位置図 (北部)

0 1/25,000 500 1,000m



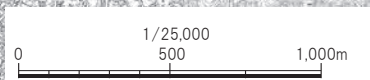


桜生史跡公園 ★

野洲市役所

三上山

調査地位置図(南部)





# なが はら ご てん あと 1. 永原御殿跡

調査地 野洲市永原字馬場ノ内 1031 番地  
調査原因 史跡の内容確認調査  
調査期間 令和4年7月27日～令和5年3月22日

## 1. 調査経過

永原御殿は、江戸時代初期に徳川家康から徳川家光までの3代の将軍が、江戸から京までの行程の中で当地に宿泊した将軍家専用の宿館である。当遺跡については、野洲市による平成29年度からの総合調査を受け、令和2年3月に国史跡の指定を受けた。発掘調査は平成29年度に初めて本丸内において実施し、令和2年度からは史跡整備に向けた発掘調査を再開した。平成29年度の発掘調査は初めて本丸の殿舎本体について実施したものであり、令和2年度調査は主要周辺施設の本丸「南之御門」、続く令和3年度では本丸「東之御門」の基本的な規模・構造を解明するための発掘調査を実施した。そして、令和4年度は「乾角御矢倉」について発掘調査を実施した。

調査区は、大工頭中井家関係資料の「江州永原御茶屋御指図」（以下、「指図」）を現地測量図に投影し、本丸「乾角御矢倉」の位置にあたる範囲に設定した。

本丸「乾角御矢倉」は、本丸に残存する西側土塁の北西隅に存在する。本丸の現状は、その西側半分の外周に土塁が残存しており、東側半分の外周土塁は残存していない。本丸「乾角御矢倉」は、南西の「坤角御矢倉」とともに、本丸に現存する櫓台である。これらの推定地周辺には、地表面から遺構の一部とみられる石材を確認しているほか、「乾角御矢倉」では瓦片が散布していることなどが明らかになっていた。現存する隅櫓の遺構として、その規模・形状とともに、想定される雁木などの周辺施設の状況なども解明すべき点に挙げられた。

調査の進行と必要性に合わせて調査区を拡張していき、最終的には約60㎡の調査区となった。

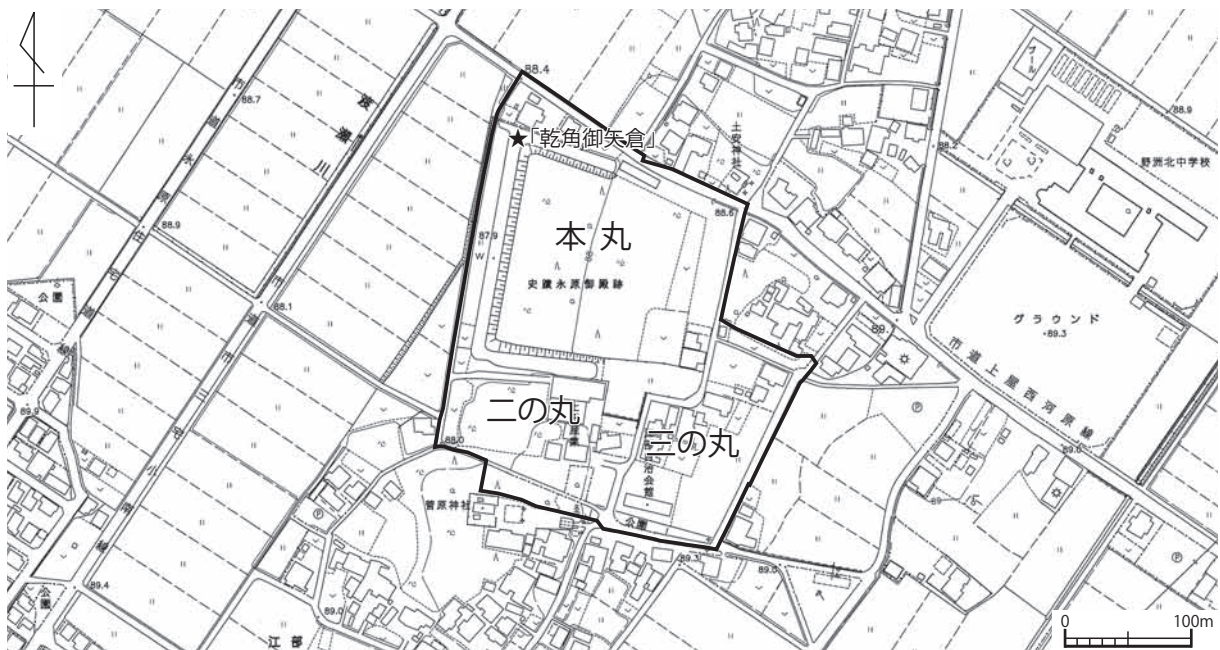


図1 永原御殿跡位置図

## 1. 永原御殿跡

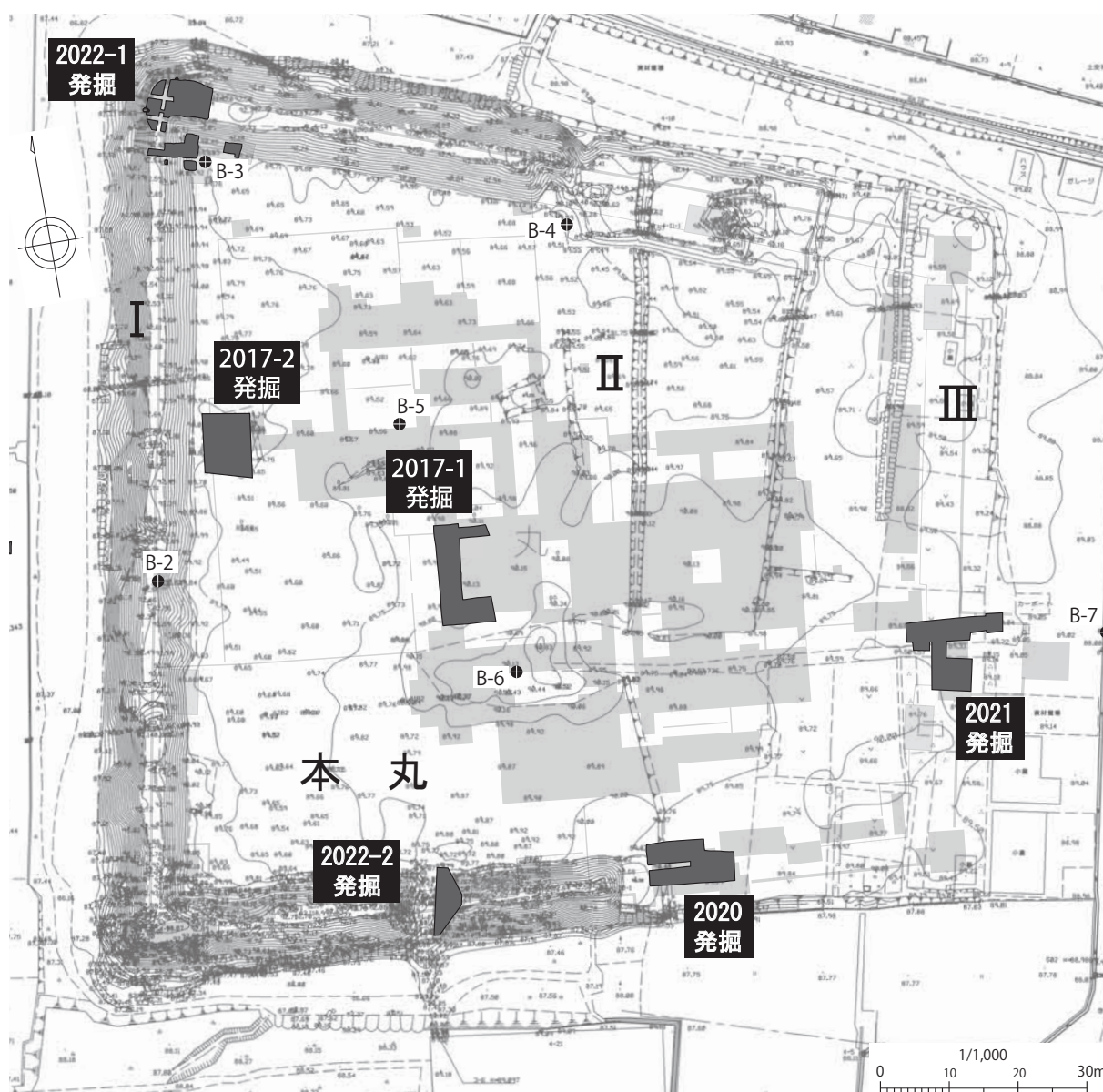


図2 永原御殿跡「本丸」内発掘調査区配置図

## 2. 調査成果

調査区設定個所は本丸土塁の北西端に位置する。本丸は全体として台形に近い四辺形を成しており、北西端は約 85°の鋭角で折れ曲がる形状となる。隅角部付近は他の土塁箇所よりも天端の幅・面積が広がっており、隅櫓の存在が想定されるところであった。天端の外側縁辺部に 2 箇所、内側縁辺部に 1 か所石材が露出しており、隅櫓の遺構の一部であることが予想された。

土塁の天端部分にあたる調査区の基本層序は、現地表面から 0.1 ～ 0.3 m の深さまでは灰黄褐色土の表土の堆積で、竹根を含む腐植土によって構成される。その直下は浅黄色の土あるいは粘質土で固く突き固められた土層が検出できる。これが土塁版築に由来する整地土層であると見られる。

検出できた永原御殿関連の遺構を列举すると、隅櫓の礎石列と隅櫓の東側に附属していた取り付けの柱の根石、そしてかつて土塁の内側斜面に存在していた雁木の石段の一部を検出した。

### (1) 隅櫓

中井家文書の記録では、「乾角御矢倉」は 3 間 × 2.5 間で、東側に 2 間 × 1 間の取り付けが付く平



## 1. 永原御殿跡

櫓とされる。調査の結果、隅櫓の建物東辺と南辺の礎石列を検出した。建物の東辺と南辺で共通する南東端の石材を含めると、東辺では11石で約5.2m、南辺では9石で約4.7mの石列であった。この石列上に土台材を渡し、その上に柱が存在したものと見られる。一方、建物の北辺と西辺は土塁の外側斜面から石垣等で立ち上がることが想定されるが、現状では残存していない。記録の間数から単純計算すると、現状の残存範囲よりも約1m外側に建物の北辺と西辺が存在したことになる。建物の主軸は、N-15°-Eを向く。

また、建物の東側で根石の集石遺構を3基検出して、これが東側の取り付けの柱に該当すると見られる。この柱列は、隅櫓本体の建物主軸とは約10°のズレが存在する。この地点は土塁が鋭角に屈曲しており、隅櫓の出入口をその角度に対応させるためであった可能性がある。

### (2) 雁木

中井家指図においても、隅櫓に近接する土塁内側斜面に雁木の図示がある。本丸の他の隅櫓におい



図3 令和4年度発掘調査区（本丸「乾角御矢倉」）遺構平面図

## 1. 永原御殿跡

ても隅櫓と雁木はセットで存在しているが、北西の隅櫓の雁木は唯一土塁の両辺にわたって鉤状に石段が敷設されている表現になっている。

雁木の存在を確認するために、西辺土塁部分の内側斜面の天端から下端にかけて調査区（T-2）を設定したが、斜面部分には石段の残存は認められなかった。ただし、下端には2段分の石段の残存を確認した。さらに、北辺土塁部分（T-3）においても同様に下端に2段分の石段を検出したことに加え、雁木の両端を区切るために立石状に配置された「耳石」も検出した。T-2では土塁内側斜面に石段は残存していなかったが、土塁本来の土層は段状をなしており、おそらく方柱状の石材が据えられていた痕跡が残存しているものと見られる。また、据え付け時に石材を固定する裏込めの石材もところどころに残存していた。方柱状の石材が石段で残存していた部分を元にとすると、石段の踏面（上面の奥行）は33～35cm、蹴上（高さ）を25～30cmが想定でき、雁木の全体規模としては高さ約3.1m、約40°の勾配で合計10段の石段に復元できる。

### （3）寛文二年（1662）若狭・琵琶湖西岸地震と土塁修復

先述のように、発掘調査で確認できなかった隅櫓の北辺と西辺の基礎は、本来は土塁斜面から櫓台天端まで数段の石垣を構築して建物を建てていたと考えられる。当時の記録では、寛文二年（1662）に起きた若狭・琵琶湖西岸地震により、永原御殿も被災して櫓2ヶ所が倒壊したことが記されており、乾の隅櫓は土塁の外側斜面が崩落して建物が倒壊したようである。発掘調査でも現在の土塁外側斜面の0.8～1.0m内側において本来の土塁の土層が崖状に落ち込んだ状況が確認でき、この部分で土塁斜面の大規模な崩落が発生したと見られる。この崩落斜面の外側は、瓦の小片を多く含んだ土によって固められており、この部分の土塁が応急的に修復された状況がうかがえた。その土層の上で検出した隅櫓礎石列の石材は、明らかに置き直したものであり、これらが寛文十年（1670）に実施された御殿の修復時に隅櫓の再建を企図した痕跡である可能性がある。しかし、最終的にはこの隅櫓は再建されず、宝永二年（1705）の御殿の廃絶（建物の解体）を迎えるに至ったと考えられる。

隅櫓から出土した遺物は瓦片が多く、遺物整理コンテナ10箱程度が出土した。内容は平瓦が中心で、他に丸瓦・唐草紋の軒平瓦・小菊紋の棟飾瓦などが出土している。中井家史料の記録では、乾の隅櫓の屋根は栩葺きであり、この場合の瓦は建物頂部の棟部分のみの使用となる。その他の遺物では、朝鮮陶磁や染付の小片が1点ずつ出土した。

## 3. まとめ

今回の発掘調査により、中井家「指図」から想定できる位置に、実際に隅櫓の施設が存在したことが確認できた。大地震による倒壊で失われた部分もあり、構造に不明な点も残ったが、中井家史料の永原御殿に関する他の記録とも概ね整合する内容であり、「指図」の内容に近い構造の隅櫓が存在していたと考えられる。平成29年度から継続して実施している本丸内の発掘調査により、永原御殿の全容が少しずつ明らかになりつつある。

（福永）





本丸「乾角御矢倉」の礎石列（T-1）



雁木の石段と耳石の検出状況（T-2・3）

## 2. よし かわ ひがし で 吉川東出遺跡

調査地 野洲市吉川字里ノ内 1314 番 2  
調査原因 住宅建設に伴う試掘調査  
調査期間 令和 4 年 10 月 11 日

### 1. 調査経過

遺跡が所在する吉川集落は、旧野洲川北流の河口にほど近い左岸に位置し、集落の北は 2km 余にわたり北流が形成した三角州が突出し琵琶湖に面する。集落中程の矢放神社を挟んで北に吉川遺跡、南に吉川東出遺跡が広がる。北の吉川遺跡では、1991 年（平成 3）矢放神社西の調査などで南北方向の溝を検出しているほか、15 世紀後半から 16 世紀を主体とする遺物が出土している。

吉川東出遺跡では 1983 年（昭和 58）から 9 次に及ぶ部分調査を実施しているがこれまでに明確な遺構は検出されておらず、出土遺物から平安時代から近世にかけての遺跡とみている。また 15 世紀後半の文明・明応年間には複数の史料に吉川の名がみえる。

今回の調査は、遺跡の実態を掴むため遺構検出に主眼を置き、個人住宅建設に伴い建築部分に東西 2.9 m 南北 3.5 m（調査面積約 10.2㎡）の調査区を設定し調査を実施した。

### 2. 調査概要

調査地の基本土層は、上層から約 0.8 m にぶい黄褐色土・橙色土混じり灰褐色砂質土からなる盛土が堆積する。その下層には黄灰色粘砂質土（旧耕作土）、（小礫・土器細片を含む）が堆積し、現地表下 1.05 m（標高約 85.45 m）のにぶい黄褐色粘質土上面で遺構を検出した。にぶい黄褐色粘質土は厚さ 20cm で、その下層は灰色粘土層であった。

遺構は、溝状遺構（SD-1）とピット（P-1）を検出した。溝状遺構は調査区の西壁に沿って検出し、幅 0.8 m 以上、深さ約 15cm を測る。埋土は暗灰黄色粘質土で埋まっていた。

ピットは東西 38cm 南北 56cm の楕円形で、深さは 12cm を測り溝状遺構同様の暗灰黄色粘質土で埋まっており、土師器・黒色土器細片が認められた。

図化する遺物は遺構面上の灰黄色粘砂質土層から土師器小皿と黒色土器碗、瓦質土器鍋の破片が



図 1 吉川東出遺跡調査地位置図

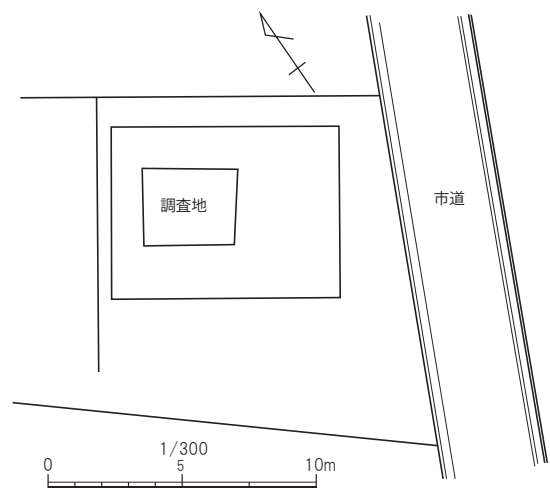


図 2 吉川東出遺跡調査区配置図

## 2. 吉川東出遺跡

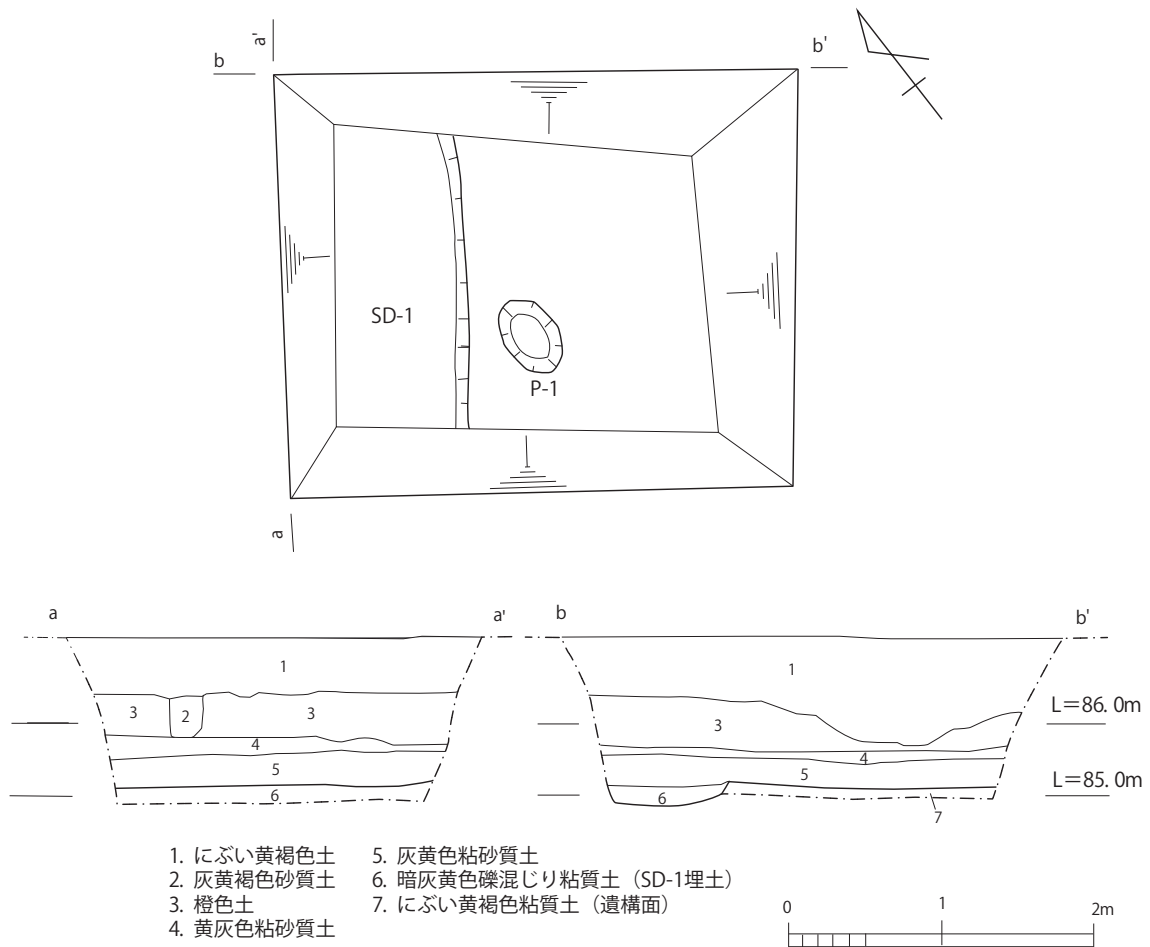


図3 吉川東出遺跡（野洲市吉川字里ノ内 1314 番2）調査区平面・断面図

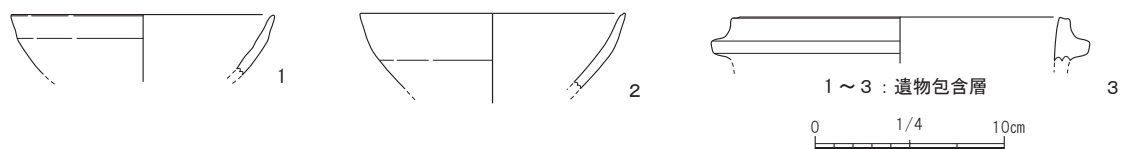


図4 出土遺物実測図

ある。1・2は口径約14cmで、口縁部外面と内面に煤を吸着させる13世紀頃の黒色土器碗。調整痕は不明瞭である。3は、直立した短い口縁部に口縁端部が面をなす14－15世紀頃とみられる小型瓦質土器鍋である。

吉川東出遺跡では、これまで明確な遺構を検出できなかったが、今回の調査によって、溝状遺構とピットを検出することができた。遺構面上から出土した土器片から鎌倉時代から室町時代の集落の一角にあたると考えられる。

（進藤）



## 2. 吉川東出遺跡



周壁（北壁）土層断面



遺構完掘状況（東から）



## 2. 吉川東出遺跡



遺構完掘状況（北西から）



遺構完掘状況（西から）



## 2. 吉川東出遺跡



吉川鎮守「矢放神社」



調査前全景（東から）



### 3. 小 堤 遺 跡

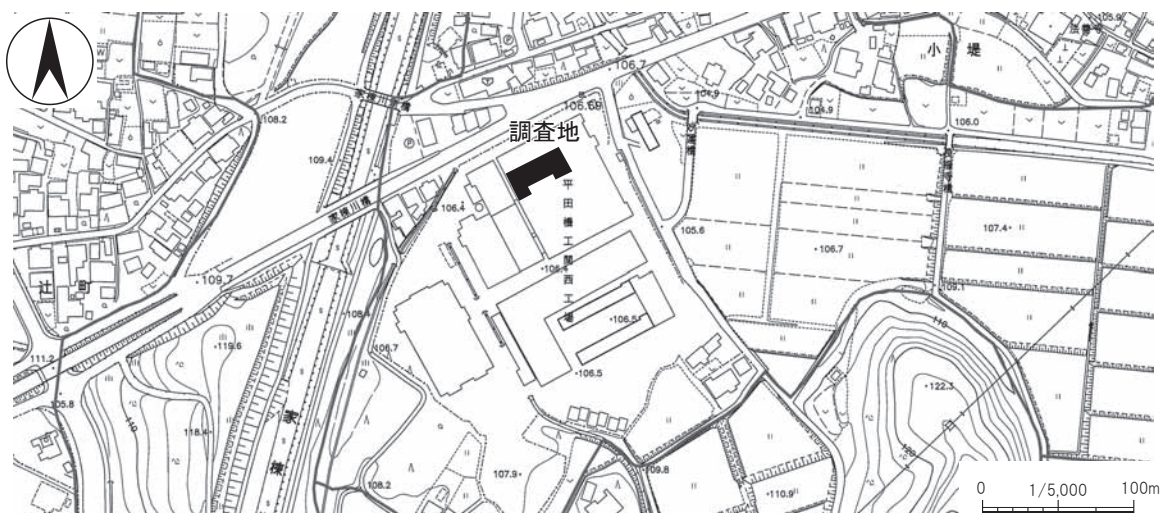
調 査 地 野洲市小堤 500 番 1 外 17 筆  
調査原因 事務所棟建設  
調査期間 令和 4 年 10 月 18 日・19 日

#### 1. 調査概要

小堤遺跡は、家棟川右岸の小堤丘陵下に位置する旧石器時代から江戸時代の集落遺跡である。遺跡の西には希望が丘文化公園から城山・奥山間を流れ出る家棟川が北へ流れる。東には城山・吉祥寺山を水源とする上の市川がある。北域には中山道・国道 8 号が東西に横断し、大篠原西遺跡へ連なる水田地帯となる。南は吉祥寺遺跡と吉祥寺古墳群、天文 17 年（1548）に永原重秀により勧請されたと伝える稲荷神社、背後の城山には永原氏の山城・城山城がある。

南の山塊は花崗岩からなり、享保 8 年（1723）以前の辻町の村絵図や明治 6 年（1873）の小堤村地券取調総絵図でも吉祥寺山一帯は禿山である。このため降雨の度に大量の花崗岩砂が河床・下流へと流出し、家の棟よりも高い天井川家棟川を形成した。家棟川の中山道往来は、辻町・小堤間に大正 6 年（1917）隧道が完成するまで堤を乗り越えていた。このことから調査地の北域（中山道小堤集落）は調査地点より 1 m 以上高くなっている。

埋蔵文化財調査は、調査地の南で昭和 61・62 年度に 90,000㎡を対象とする土地改良事業による耕地区画整理に伴う調査を実施している。調査では、吉祥寺山が北方で複数の舌状に延びる尾根に分かれ、調査地南東の尾根先端にあたる字長福寺で 6 世紀末から 7 世紀前半の掘立柱建物と 17 世紀初頭の集水施設等を検出した。この尾根の東の谷地形（字平子）には、奥平子池と口平子池があり、その東の丘陵（字御屋敷）には稲荷神社が祀られ、東側で 16－17 世紀の溝・土坑とミニチュアの人形や下駄などの木製品が出土。北側（字西山田）で 13 世紀代の溝などを検出している。更にこの尾根の東の谷地形（字中山田）にも新池と影幻堂池がある。谷地形の 4 つの用水池は延宝の小堤村検地帳から、延宝 7 年（1679）以前に設けられたもので、谷地形では自然河川と溜池、耕作痕とみら



### 3. 小堤遺跡

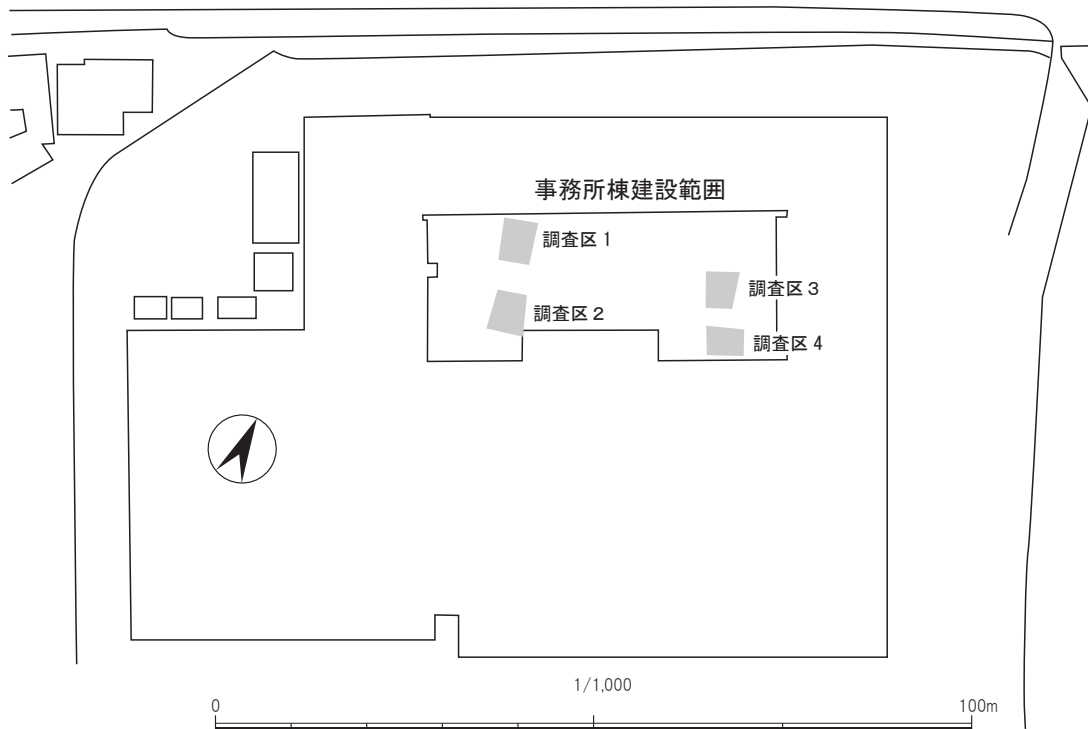


図2 調査区配置図

れる素掘溝が認められたものの明確な遺構・遺物は認められない。

今回の調査は既存の工場建屋を解体後、事務所棟を建設するもので、縦横にコンクリート排水施設が存在していたため、それらを避けて4カ所に調査区を設け、調査を実施した。調査面積は約65㎡である。

基本層序は、上層から深さ約1.1mまで造成盛土（山砂）であった。調査区のうち西南の調査区2では、盛土の下層に褐灰色土（旧水田耕作土・床土）が遺存し、その下ににぶい黄色土と灰褐色砂質土、にぶい黄色土が堆積し、最下層はにぶい黄褐色砂質土であった。最下層のにぶい黄褐色砂質土上面（GL－1.6m、標高約104.6m）で灰黄褐色粘砂質土を埋土とする浅い素掘溝を検出した。出土遺物は認められず、時期は明らかにし得なかった。

東側の調査区3・4は、旧水田層やにぶい黄褐色砂質土が認められず、下層に黒褐色土や灰色シルトが堆積していた。遺構・遺物は認められなかった。

調査の結果、調査地一帯は旧家棟川の厚い砂層で覆われていた。そのうち西南部では砂層下に旧水田層が遺存し、下層で素掘溝を検出したものの出土遺物は認められなかった。当該地は、南の区画整理事業に伴う谷地形の調査結果と同様の様相を呈し、区画整理事業の調査で16－17世紀の集水施設などを検出していること、延宝7年以前に4つの池が設けられていることなどから16－17世紀には水田を形成していたと考えられる。

（進藤）

### 3. 小堤遺跡

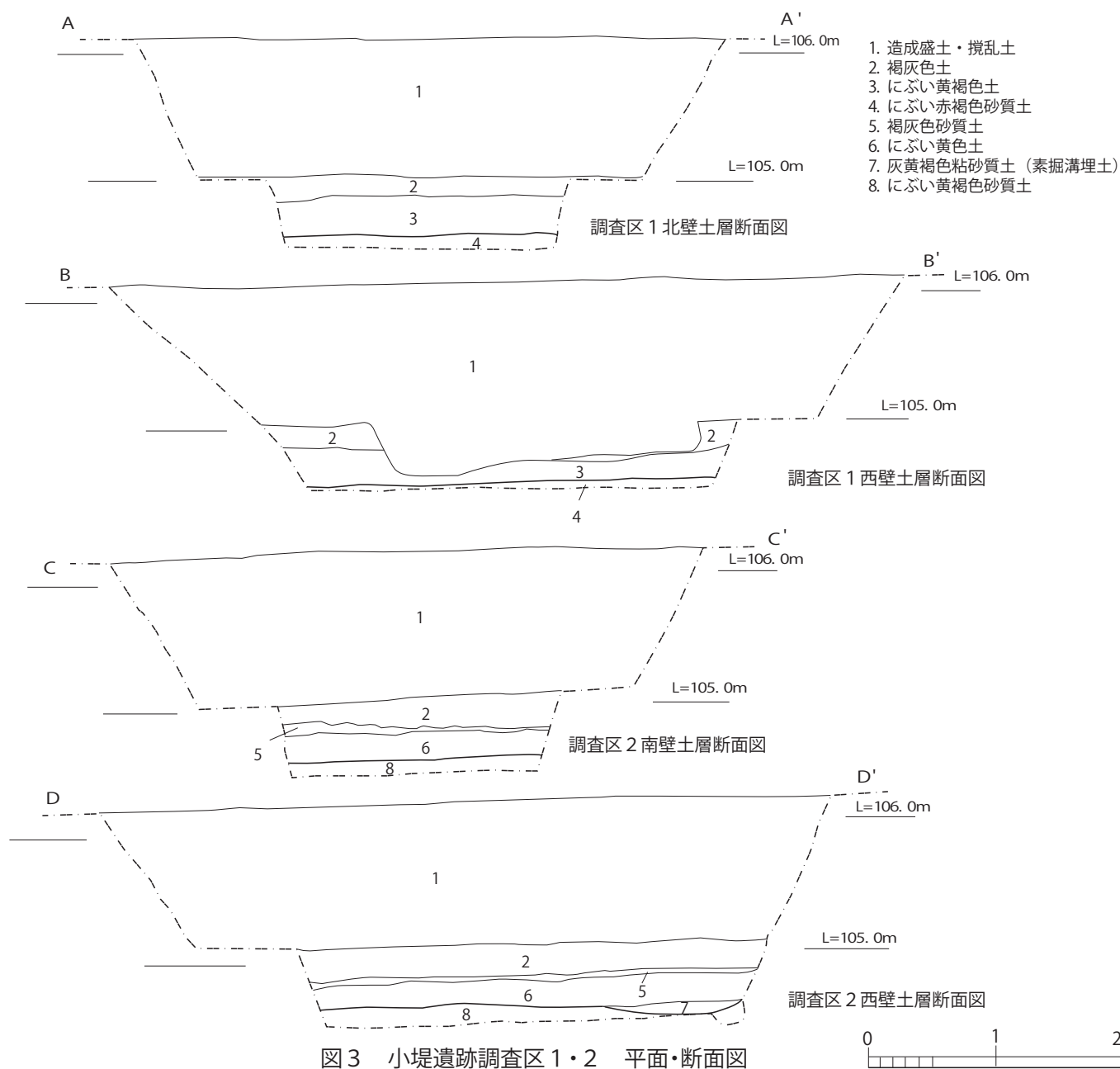
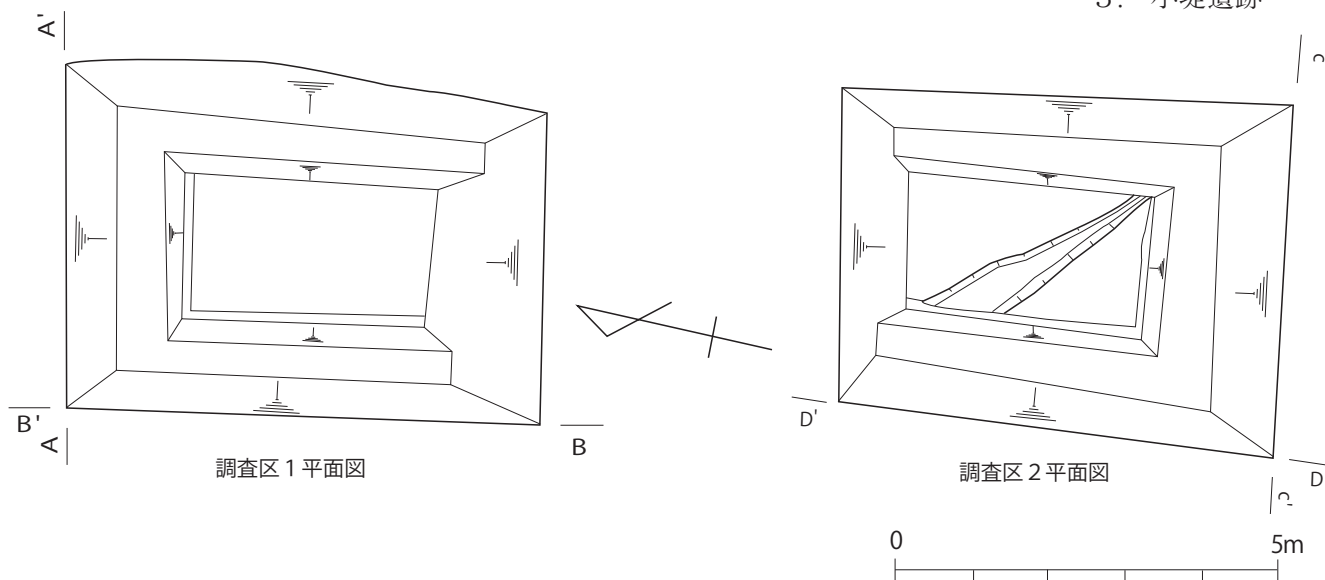


図3 小堤遺跡調査区1・2 平面・断面図

### 3. 小堤遺跡

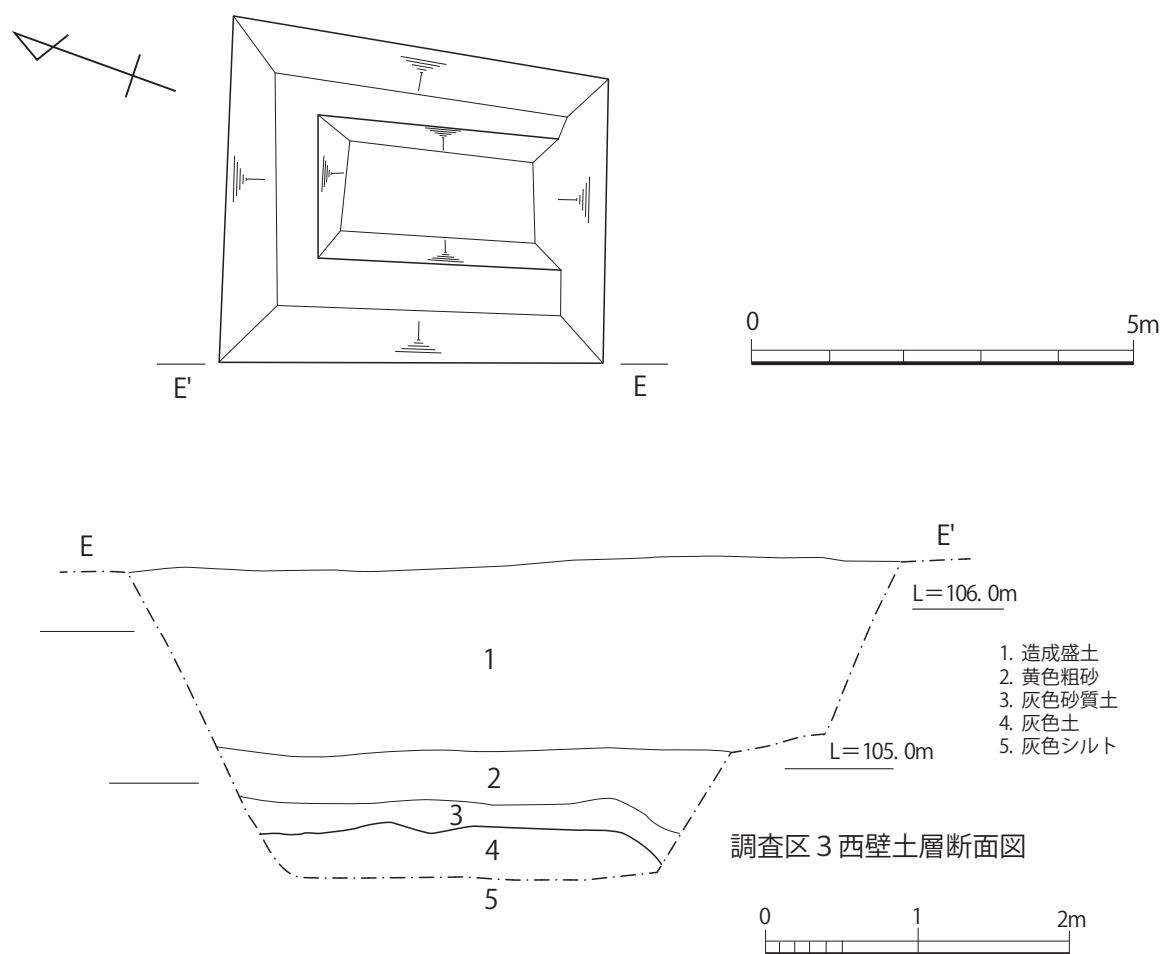


図4 小堤遺跡 調査区3平面・断面図



### 3. 小堤遺跡



調査前全景（東から）



調査区 2 西壁土層断面（東から）



### 3. 小堤遺跡



調査区2 全景（東から）



調査区1 全景（南東から）



### 3. 小堤遺跡



調査区 3 全景（東から）



調査区 4 全景（北西から）

## 4. やぶ 八 夫 遺 跡

調 査 地 野洲市<sup>やぶあざさとうち</sup>八夫字里ノ内 1487 番 5、1487 番 7、1488 番 3  
調査原因 個人住宅  
調査期間 令和 4 年 11 月 4 日

### 1. 調査経過

八夫遺跡は、弥生時代から江戸時代にかけての集落跡と周知されている。

調査地は八夫遺跡の中央部に位置する。調査は個人住宅建設に伴うものである。建物建築範囲に調査区を設定し、試掘調査を実施した。周辺の既往の調査としては、令和元年（2019）に南西側約 60 m地点で調査が行われているが遺構・遺物は確認できていない<sup>(1)</sup>。南東側 90 m地点では平成 17 年（2006）に調査が行われ、ピットや井戸を検出している<sup>(2)</sup>。井戸からは信楽の播鉢や甕等が出土しており、中世集落の存在が指摘されている。

現地での調査は令和 4 年 11 月 4 日に行った。

### 2. 調査成果

調査は、建物建築範囲に約 4.0㎡の調査区を設定した。地表面下約 1.3m まで掘り下げた結果、最上層に耕作土であるにぶい黄褐色極細砂層が約 0.1 m 堆積しており、その下層ににぶい黄褐色極細砂層（2・3 層）、にぶい黄褐色シルト層（5 層）、にぶい黄橙色シルト層（7 層）が堆積していた。この直下で遺構面である浅黄橙色シルト層（8 層）を確認し、遺構面直上で精査を行ったが遺構は確認できなかった。

遺物としては遺構面精査時に中世の土師器片が出土した。

### 3. まとめ

調査区では明確な遺構を確認することができず、本調査地は八夫遺跡の集落の空閑地と考えられる。  
(渡邊)

- (1) 滋賀県野洲市教育委員会 2020 『令和元年度 野洲市内遺跡発掘調査年報』  
(2) 滋賀県野洲市教育委員会 2007 『平成十八年度 野洲市内遺跡発掘調査年報』

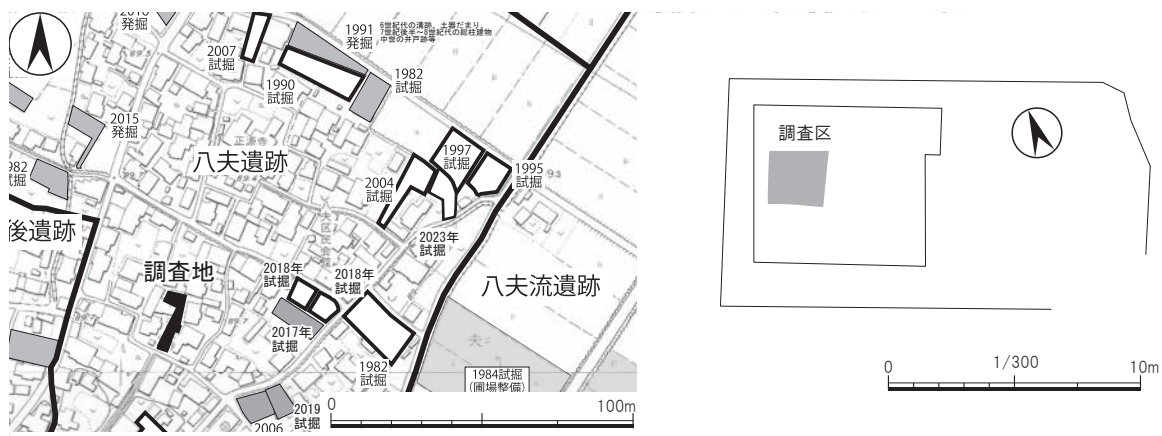


図 1 調査地位置図・調査区配置図



#### 4. 八夫遺跡

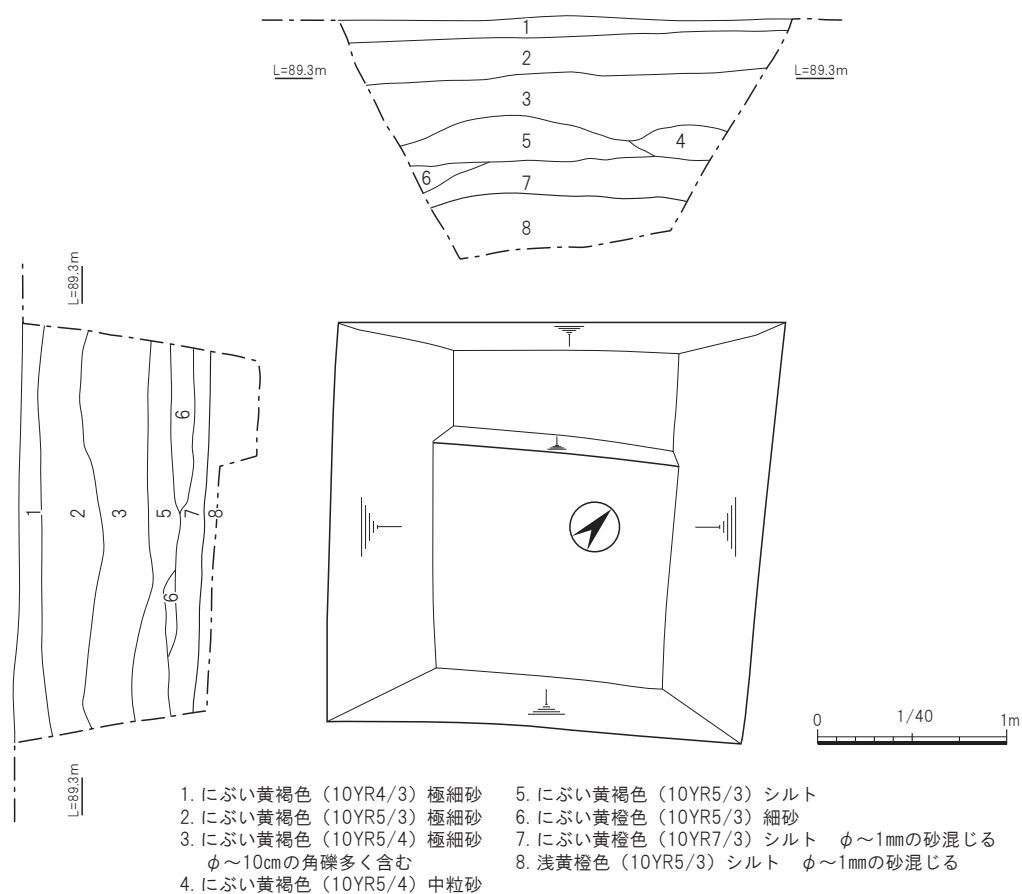


図2 調査区平面図・壁面図



調査区全景（南東から）



西壁土層断面（北東から）

## 5. 小<sup>こ</sup>堤<sup>づつみ</sup>遺跡

調査地 野洲市小<sup>こ</sup>堤<sup>づつみ</sup>字西出 331 番、334 番  
調査原因 個人住宅  
調査期間 令和 4 年 11 月 29 日

### 1. 調査経過

小堤遺跡は、家棟川の東、城山から北へ延びる丘陵直下に位置する旧石器時代から江戸時代の遺跡である。遺跡の西には天井川家棟川が北に流れ、東北には大篠原西遺跡が広がり、南の丘陵部には吉祥寺遺跡・吉祥寺古墳群がある。

遺跡の北域を東西に中山道が通り、街道に面して小堤集落が形成されている。集落は、大きく西出と東出に分かれ、永原氏の家宰源良の創建と伝える正蓮寺、薬師堂に室町時代の薬師如来坐像を祀る法善寺がある。江戸時代初期は幕領、元禄 11 年（1698）から延享 4 年（1747）まで旗本板倉領、その後幕領を経て幕末武蔵川越藩領であった。文化 2 年（1804）の『木曾路名所図会』には「やのむね川には火打を作て売る」と記され、小堤には家棟川火打所があり、中山道の旅人の土産として販売されていた。

今回の調査は、国道 8 号（旧中山道）に面した対象地での住宅建設に伴う調査である。このため中山道に関する遺構・遺物の広がり掴むことを主眼とし、住宅建築部分に東西 3 m 南北 3 m（調査面積約 9㎡）の調査区を設定し調査を実施した。

### 2. 調査概要

基本土層は上層から濁にぶい黄色砂質土（2.5 Y 6/4）、明黄褐色砂質土（2.5Y6/8）、明黄褐色粘土（2.5Y7/6）、黄橙色粘土（10YR8/8）の順に堆積していた。

このうち上層の明黄褐色砂質土から切り込む東西溝を検出した。溝は東南の取り井戸から竹管を枕木で接続しながら西北方向に引水するもので、一帯にはこのような暗渠引水が多くみられる。埋土中



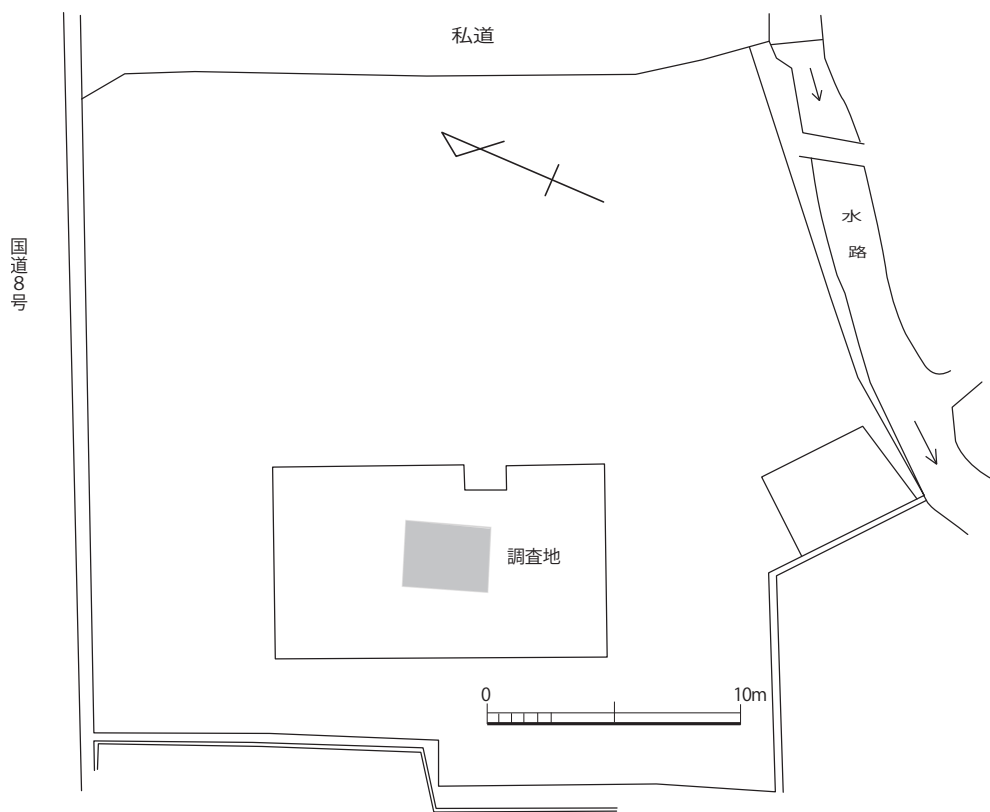


図2 小堤遺跡調査地位置図

から陶磁器碗・瓦質土器香炉片が認められたが、枕木にビニール素材が巻かれており昭和時代の暗渠溝である。

今回の調査では中山道に伴う遺構は検出できなかったが、現地表下 0.6 m（標高約 104.1m）の黄橙色粘土層面が瓦質土器や陶磁器片から室町時代から江戸時代の遺構面に相当すると考えられる。

（進藤）

## 5. 小堤遺跡

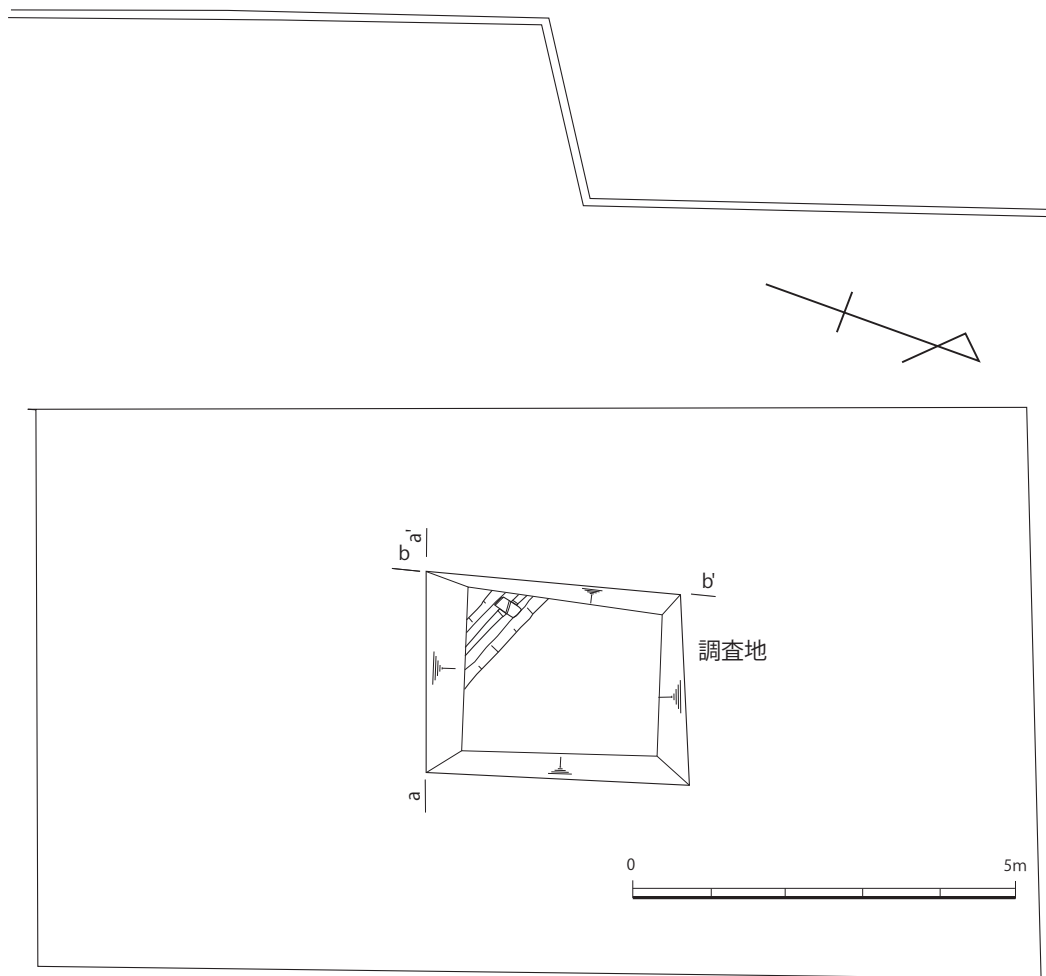


図3 小堤遺跡調査区平面図

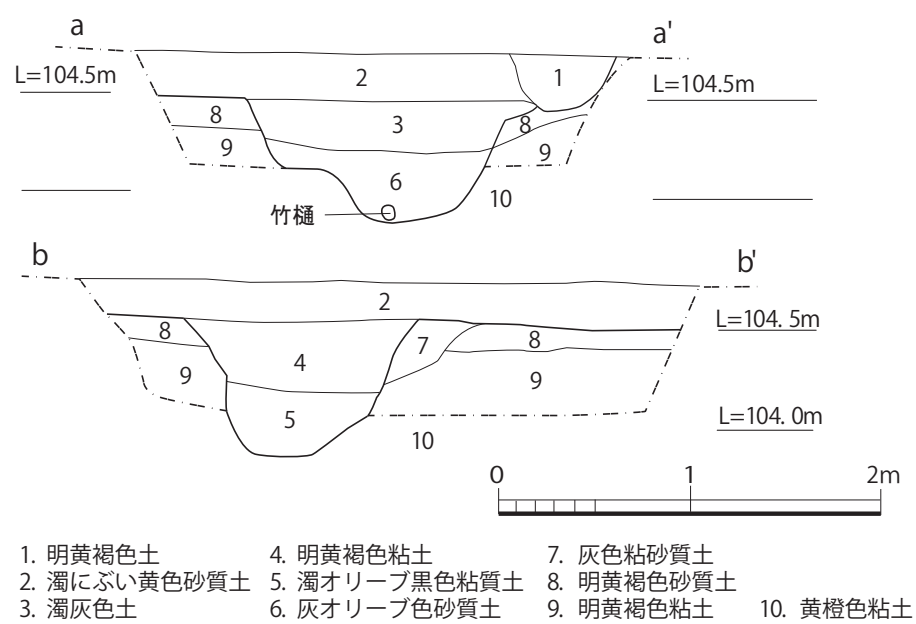


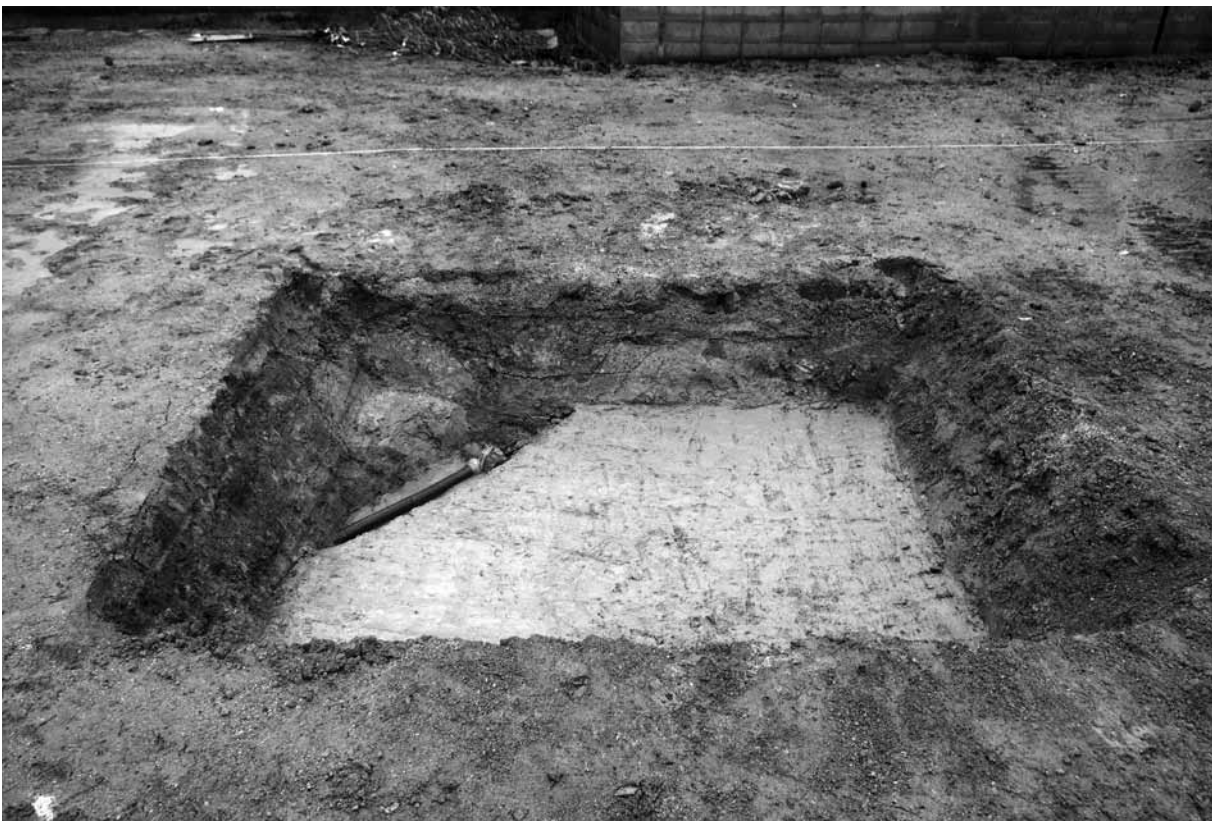
図4 小堤遺跡周壁土層断面図



5. 小堤遺跡



西壁土層断面



調査区全景（東から）



## 5. 小堤遺跡



調査区全景（南から）



調査地全景（埋戻後、東から）

## 6. 六条遺跡

調査地 野洲市六条字川端 322 番  
調査原因 個人住宅  
調査期間 令和 4 年 11 月 30 日

### 1. 調査経過

六条遺跡は古墳時代から江戸時代にかけての集落跡と周知されているが、調査次数が少なく、その実態は未解明な部分の多い遺跡である。遺跡の規模は東西約 900 m、南北 500 m にわたり、東は御明田古墳群・吉地大寺遺跡、西は井口遺跡、北は五条遺跡・六条薬師堂遺跡、南は吉地薬師堂遺跡に隣接する。調査地は遺跡のほぼ中央部に位置する。

調査は個人住宅の建設に伴う試掘調査で、建物建築範囲に約 6.6㎡の調査区を設定し、遺構・遺物の有無の確認に努めた。

### 2. 調査成果

地表面下約 1.5 m まで掘削を行った結果、第 1 層造成土、第 2 層にぶい黄褐色細粒砂層、第 3 層にぶい黄褐色極細粒砂層、第 4 層にぶい黄褐色細粒砂層、第 5 層灰オリーブ色中粒砂層、第 6 層灰黄褐色極細粒砂層、第 7 層灰オリーブ色シルト混砂層、第 8 層緑灰色粘土層、第 9 層緑黒色砂層の堆積を確認した。第 1 層～第 6 層はブロック土を含んでおり、盛土と判断される。第 8 層上面で精査を行ったが、遺構は確認されなかった。

遺物は重機掘削中及び平面精査中に中世の土師器・陶器等が数点出土した。

### 3. まとめ

明確な遺構は確認されなかったものの中世の土器が出土していることから、本調査地周辺は中世の段階で集落として機能していたとみられる。

(芦塚)

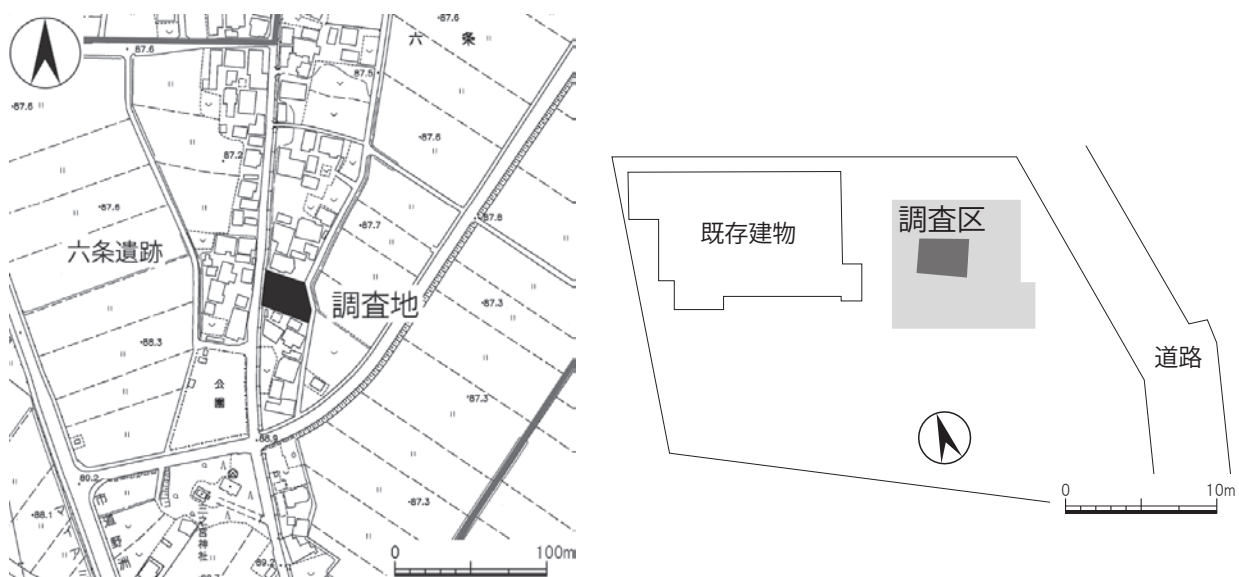


図 1 調査地位置図・調査区配置図

## 6. 六条遺跡

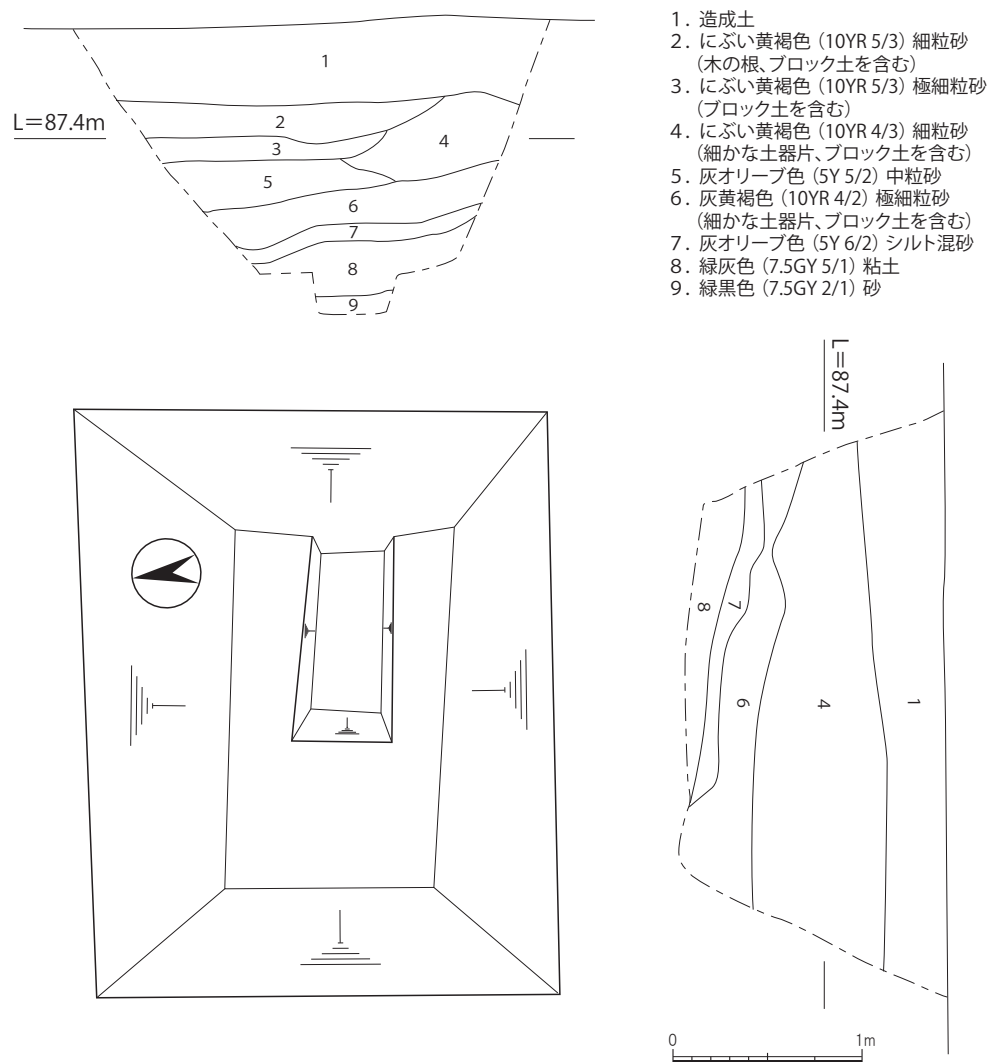


図2 調査区平面図・土層断面図



全景（西から）



南壁土層断面



## 7. 小山遺跡

調査地 野洲市入町字小山 247 番 1 外 3 筆  
調査原因 個人住宅  
調査期間 令和 4 年 12 月 6 日

### 1. 調査経過

小山遺跡は古墳時代から奈良時代にかけての生産遺跡と周知されている。平成 6 年度に実施された発掘調査<sup>(1)</sup>では、古墳時代後期の須恵器窯に伴う灰原を確認し、コンテナ箱 60 箱以上の須恵器が出土しているが、遺跡の調査次数自体は少なく、その実態は未解明な部分も多い遺跡である。

調査は個人住宅の建設に伴う試掘調査で、建物建築範囲に約 6.0m<sup>2</sup>の調査区を設定し、遺構・遺物の有無の確認に努めた。

### 2. 調査成果

調査は建物建築範囲に約 6.0 m の調査区を設定し、試掘調査を実施した。

地表面下約 1.4 m まで掘削を行った結果、第 1 層表土、第 2 層、暗灰黄色中粒砂層、第 3 層暗灰黄色粗粒砂層、第 4 層灰色粗粒層、第 5 層オリブ黒色粗粒砂混中粒砂層、第 6 層灰色中粒砂層、第 7 層黄褐色粗粒砂層、第 8 層黄褐色粘土層、第 9 層黄褐色中粒砂混細粒砂層、第 10 層灰色細粒砂層、第 11 層暗オリブ灰色シルト層、第 12 層灰オリブ色粗粒砂層が堆積していた。第 6 層から現代遺物が出土したことから第 1 層～第 6 層は現代の堆積土であり、第 7 層～第 11 層も近現代の人為的な堆積土とみられる。第 12 層が遺構面と判断されるが、遺構・遺物は確認されなかった。

### 3. まとめ

本調査地周辺は小山遺跡の空閑地と考えられる。

(芦塚)

(1) 角建一 1995 「第 6 章 小山遺跡」『平成 6 年度 野洲町内遺跡発掘調査概要』

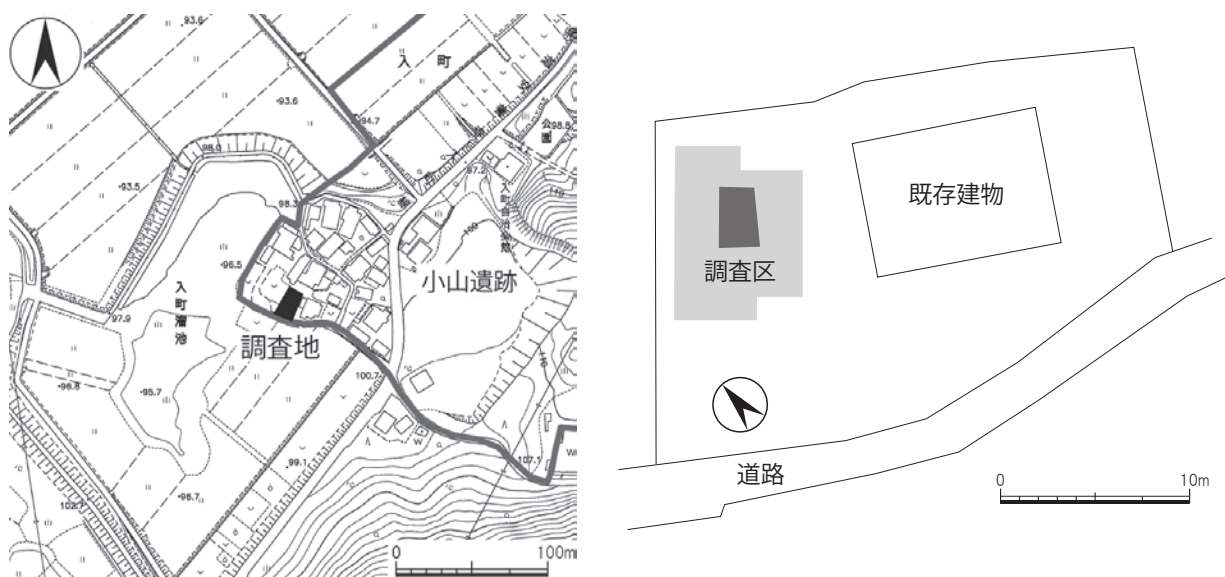


図 1 調査地位置図・調査区配置図

## 7. 小山遺跡

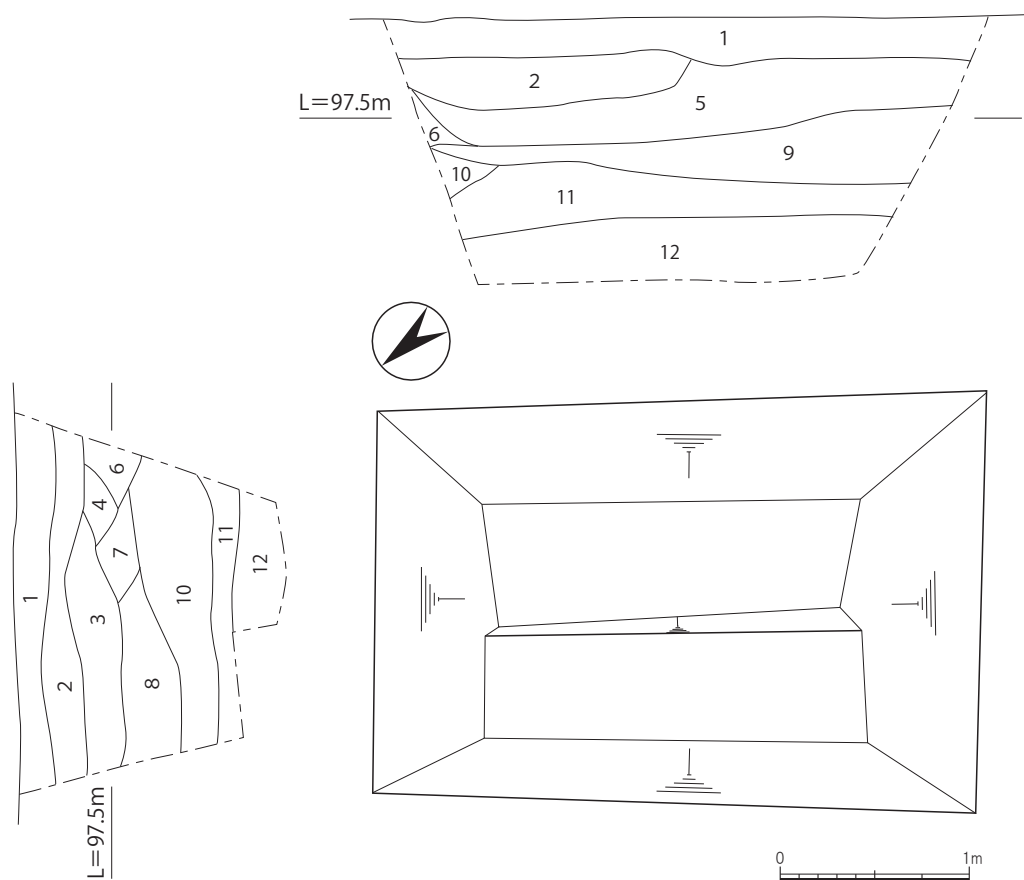


図2 調査区平面図・土層断面図



全景 (西から)



東壁土層断面

## 8. と ば ひがし 富波東遺跡

調査地 野洲市<sup>と ば あざやまぐちおつ</sup>富波字山口乙 353 番 4  
調査原因 分譲住宅建設  
調査期間 令和 4 年 12 月 8 日

### 1. 調査経過

富波東遺跡は、北は大岩山丘陵下から南は旧朝鮮人街道（下街道）にかけて広がる弥生時代から室町時代の集落跡・古墳跡である。遺跡の北東は野々宮遺跡、北は常楽寺遺跡、西は史跡古富波山古墳・富波古墳・亀塚古墳を含む富波遺跡、東は史跡大塚山古墳を含む辻町遺跡と接し、南は史跡円山古墳・甲山古墳・天王山古墳が立地する大岩山丘陵である。

南東の大岩山丘陵から JR 琵琶湖線（電車基地）までは水田地帯が広がり、JR 琵琶湖線を境として北西は市街地となっている。このためこれまで遺跡北西部の市街地を中心に発掘調査を実施している。

既往の調査では、今回の調査地の東約 100 m の富波字野々宮甲 400 番外で、集合住宅建設に伴い約 14,000㎡を発掘調査し、南北方向の旧河道、弥生時代終末から古墳時代の方形周溝墓群、飛鳥時代から鎌倉時代にかけての集落跡を検出している。また市道を隔てた東北の野々宮遺跡においても大規模な宅地造成に伴う発掘調査で、弥生時代後期の竪穴住居群や古墳時代中期の方墳、飛鳥時代の竪穴住居群、平安時代末から鎌倉時代の集落を検出している。

今回の調査地に近接する調査では、北東の富波字山口乙 348 番外で古墳時代初頭の方形周溝墓と中世の掘立柱建物を検出している。調査地東に近接する富波字山口乙 352 番外の調査では、西で明確な遺構が検出されなかったが東北で室町時代の掘立柱建物を検出した。このことから今回の調査地においても中世後期を主体とする遺構の検出が想定された。

調査は、建物建築部分に 4.0 m × 2.0 m の調査区を設定し調査を実施した。



図 1 調査地位置図



## 8. 富波東遺跡

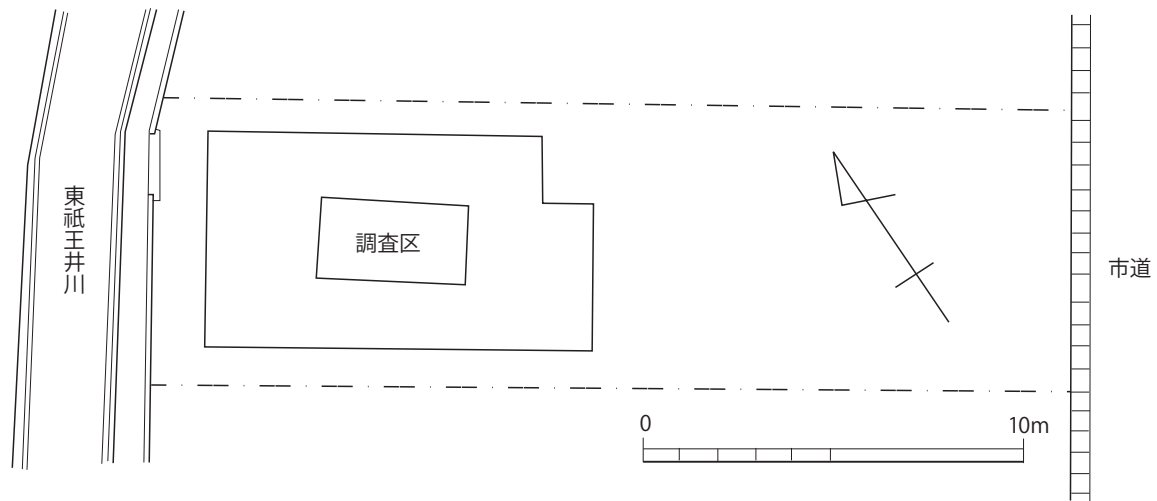


図2 富波東遺跡調査区配置図

### 2. 調査概要

基本層序は上層から、表土（硬化剤混入）、濁暗灰黄色砂質土（攪乱土、2.5Y5/2）、濁にぶい黄色粗砂質土（2.5Y6/4）で、下層は明黄褐色砂（10YR6/6）であった。表下約 0.8m（標高約 92.7m）の明黄褐色砂上面で遺構を検出した。遺構から遺物は認められず、遺構面の直上まで近現代の磁器片や瓦・レンガ片が混入していた。

遺構には、西の東祇王井川に平行する 2 条の溝と、円形の落込み、小ピットがある。西側の溝は幅 30cm 深さ 14cm で、東側の溝は幅 50cm 以上、深さ 22cm を測り、埋土はともに濁灰オリーブ砂質土であった。調査区の中央で検出した落込みは径約 90cm の円形で深さ約 20cm を測る。埋土は下層が明黄褐色粘質土（2.5Y6/6）、上層が濁黄灰色砂質土（2.5Y6/1）であった。また調査区の西で径 20cm ほどの小ピットを検出した。

明治初期の「富波村地券取調総絵図」では、東祇王井川の南東に位置する当該地は田地と表記されている。北に接する東祇王井川は、昭和 40 年代に改修されるまで両側に堤が存在していた。調査地は、堆積土が砂層を地盤とし上部まで砂質土で覆われていたことから東祇王井川の堤部分と、田地に跨る範囲にあたると思われる。検出した溝と落込みは時期を特定できないが、東祇王井川築堤が形成される中世以前の可能性がある。（進藤）

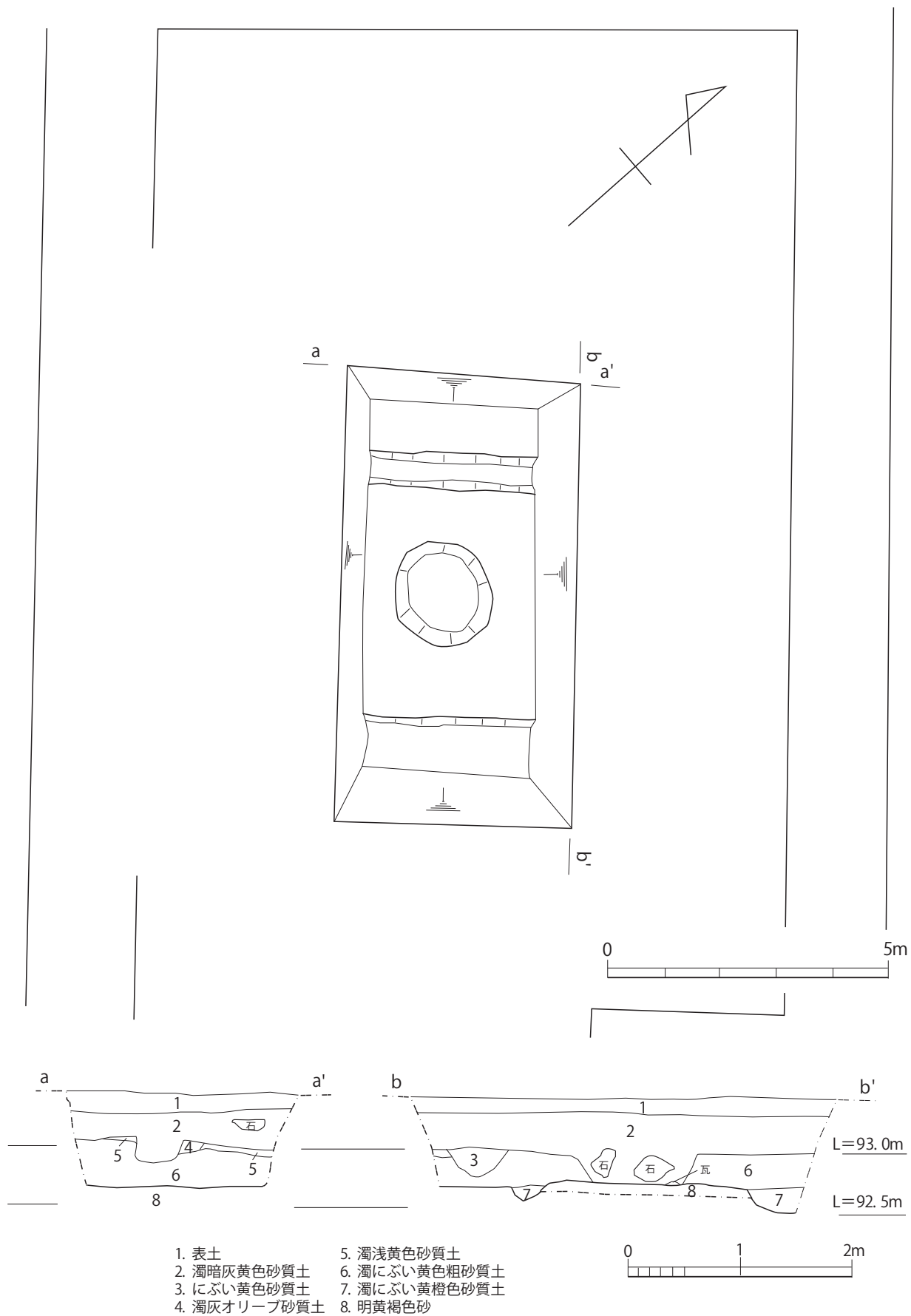


図3 富波東遺跡調査区平面・断面図

## 8. 富波東遺跡



調査前全景（南西から）



周壁土層断面（南西から）



8. 富波東遺跡



調査区完掘全景（北東から）



調査区完掘全景（東から）

## 9. さいノ神遺跡

調査地 野洲市<sup>みょうこうじ あざにし くぼ</sup>妙光寺字西ノ久保 286 番 3、290 番 3  
調査原因 集合住宅  
調査期間 令和 4 年 12 月 14 日

### 1. 調査経過

斎ノ神遺跡は、弥生時代の墓跡と周知されている。

調査地は斎ノ神遺跡の北東隅に位置する。調査は集合住宅建設に伴うものである。建物建築範囲に調査区を設定し、試掘調査を実施した。周辺の既往の調査としては、平成 16 年（2004）に南東側約 80 m 地点で調査が行われ、弥生中期の土器（壺）棺墓と思われる遺構が検出されている<sup>(1)</sup>。

現地での調査は令和 4 年 12 月 14 日に行った。

### 2. 調査成果

地表面下 1.7 m まで掘り下げたところ、地表面下 1.5 m までは褐灰色極細砂層、にぶい褐色粗粒砂層が堆積していた。その下の層には旧耕作土である褐灰色極細砂層（5 層）が堆積しており、旧耕作土を確認した段階で図面等の作成を行った。その後 1.9 m まで土層の確認を行ったが遺構面は確認できなかった。それ以上の掘り下げは工事の計画掘削深度を越えてしまうため行わず、そのまま埋戻しを行った。遺構面は工事の計画掘削深度の下層に存在すると考えられる。

### 3. まとめ

今回の調査では遺構面まで到達できなかったことから、当調査地周辺は盛土し造成していることが明らかとなった。

（渡邊）

（1）野洲市教育委員会 2004 『2004 年 埋蔵文化財調査年報』



図 1 調査地位置図・調査区配置図



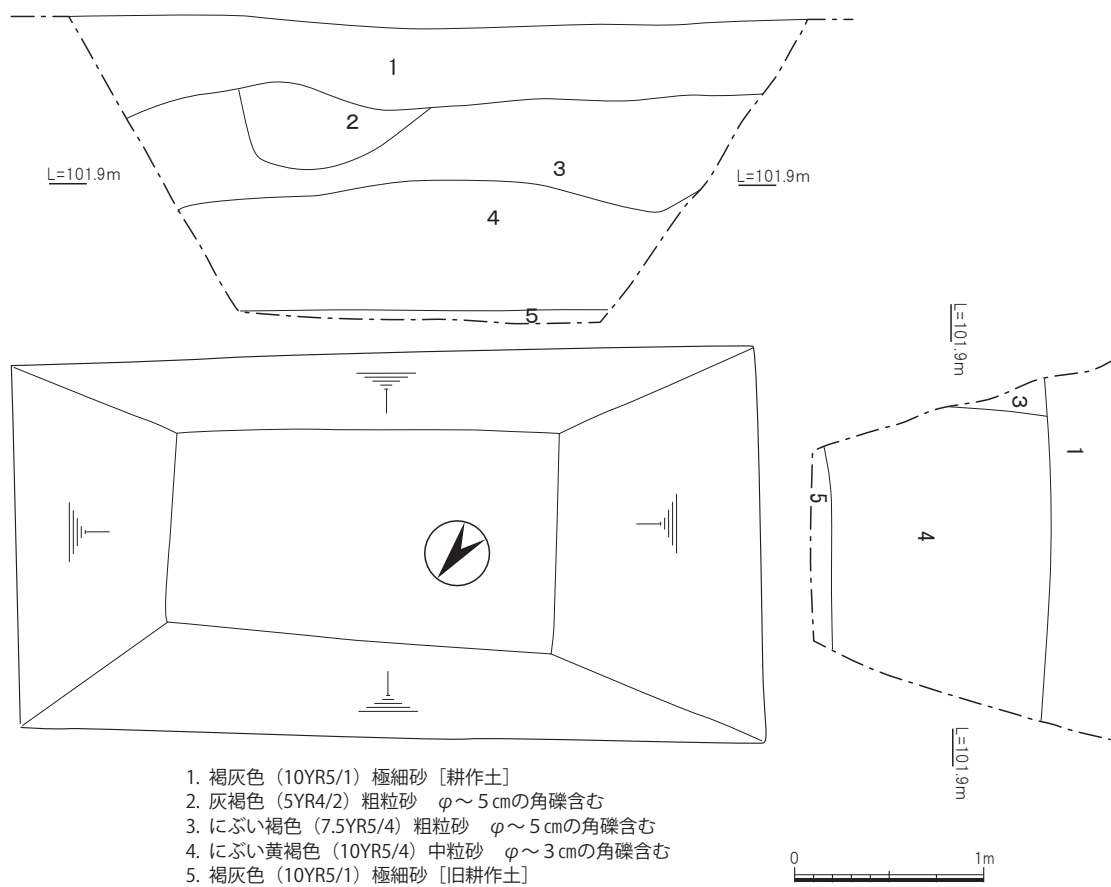


図2 調査区平面図・土層断面図



東壁土層断面（西から）



調査区（西から）

## 10. ひ る た 比 留 田 遺 跡

調 査 地 野洲市<sup>ひ る た あ ざ な か で</sup>比留田字中出 922 番 1  
調査原因 個人住宅  
調査期間 令和 4 年 12 月 16 日

### 1. 調査経過

比留田遺跡は、家棟川の氾濫原の微高地である自然堤防上に位置する弥生時代から江戸時代にかけての集落跡と周知されている。遺跡の規模は東西 500 m、南北 750 m にわたり、北は焼矢遺跡、東は木部遺跡、南は比留田法田遺跡、西河原森ノ内遺跡、西は西河原薄窪遺跡と隣接する。

調査は個人住宅の建設に伴う試掘調査で、建物建築範囲に約 6.0m<sup>2</sup>の調査区を設定し、遺構・遺物の有無の確認に努めた。

### 2. 調査成果

地表面下約 1.3 m まで掘削を行った結果、地表面下約 1.2 m までは盛土及び後世の影響を大きく受けていると判断される土が堆積していた。それらの下層で確認した灰色砂質シルト層上面（13 層）で精査を行ったが、遺構は確認されなかった。遺物は重機掘削中に、中世の信楽焼が 1 点出土した。

### 3. まとめ

本調査では、明確な遺構は確認されず中世の土器が 1 点出土したのみであるが、周辺の調査事例も考慮すると、本調査地周辺は古代から中世にかけての集落跡と考えられる。

(芦塚)

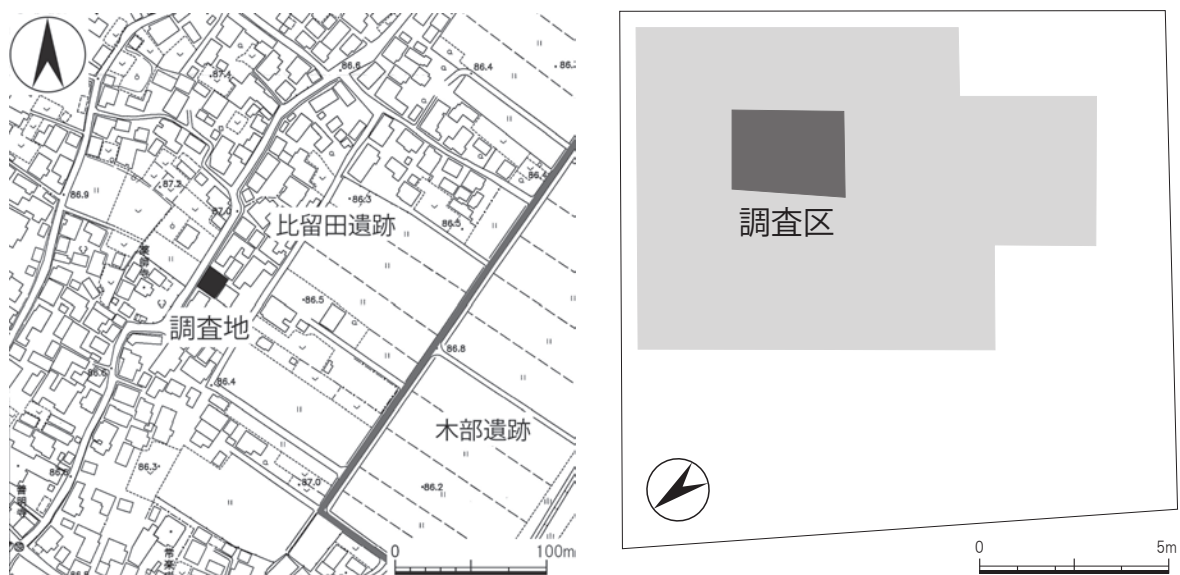
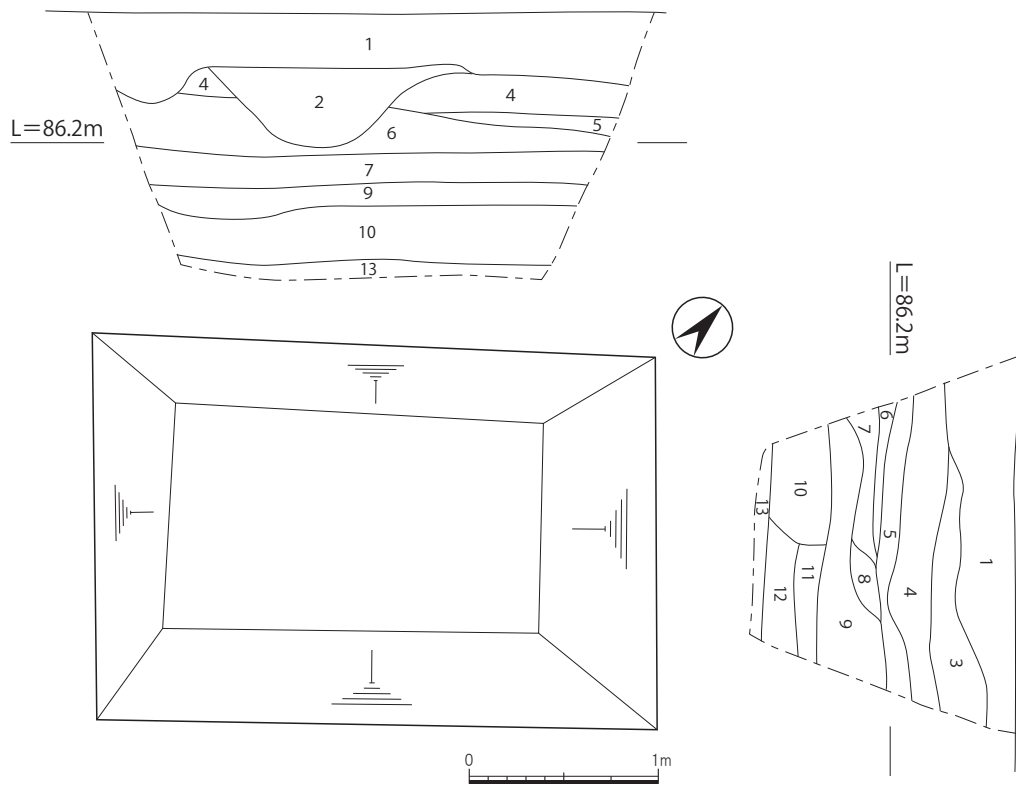


図 1 調査地位置図・調査区配置図





1. 灰色 (5Y 5/1) 粘土 (径 10 ～ 60mm 程の礫を含む) 2. 山砂 3. オリーブ黒色 (5Y 3/2) シルト (径 5 ～ 10mm 程の礫、炭化物を含む)  
 4. にぶい黄褐色 (10YR 5/3) 極細粒砂 5. 山砂 6. にぶい黄褐色 (10YR 6/3) 粘土 7. 山砂  
 8. 灰オリーブ色 (5Y 6/2) 粘土 9. 灰色 (7.5Y 6/1) 粘土 10. 灰色 (7.5Y 5/1) 粘土 (径 10 ～ 40mm 程の礫、炭化物を含む)  
 11. 灰色 (10Y 5/1) 砂 12. 灰色 (10Y 5/1) 粘土 (径 5 ～ 10mm 程の礫を含む) 13. 灰色 (10Y 5/1) 砂質シルト

図2 調査区平面図・土層断面図



全景 (南西から)



北壁土層断面

# 11. 常楽寺遺跡

調査地 野洲市<sup>とばあざまち</sup>富波字<sup>うらく</sup>町ノ裏甲 1001 番 1 の一部  
調査原因 個人住宅  
調査期間 令和 4 年 12 月 23 日

## 1. 調査経過

常楽寺遺跡は、弥生～鎌倉時代の集落跡・社寺跡と周知されている。

調査地は常楽寺遺跡の北東隅に位置する。調査は個人住宅建設に伴うものである。建物建築範囲に調査区を設定し、試掘調査を実施した。周辺の既往の調査としては、平成 3 年（1992）に南東側約 30 m 地点で調査が行われ井戸や土坑、溝等を検出している<sup>(1)</sup>。井戸からは古墳時代前期の土器が出土しており、溝や土坑からは平安時代～中世の土器が出土している。このことから、古来より当地域が人々の生活の場として営まれていることがわかる。なお令和 2 年（2020）には北東側約 20 m 地点で調査が行われているが、遺構・遺物とともに確認できていない<sup>(2)</sup>。

現地での調査は令和 4 年 12 月 23 日に行った。

## 2. 調査成果

地表面下 0.8 m まで掘り下げたところ、地表面下 0.4 m までは耕作土で、その下層に明黄褐色土層、灰黄褐色土層、にぶい黄橙色土層が堆積していた。遺構としてはピットを検出した。SP01 には径 0.4 m ほどの扁平な石が据えられており、建物に伴う礎石の可能性はある。

ピットからは少量の遺物が出土した。1 は焙烙で SP02 から出土した。外面は体部から口縁部にかけてケズリ調整を施し、煤が付着する。内面は摩耗のため調整は定らかでない。口縁部は肥大化し、やや内傾する。15 世紀後半のものと思われる。

今回の調査は建物建築範囲の南隅での調査であった。調査ではピットを確認したが同時に建築範囲の中央は粗粒砂が堆積しており、西側にいくにつれ遺構の存在が希薄であると判断されたため図面等の記録を作成したのち調査を終了した。



図 1 調査地位置図・調査区配置図



## 3. まとめ

本調査地は土層の堆積状況から本調査地は2回ほど河川の氾濫・沖積作用を受けていることが判明した。本調査地の南側には中ノ池川が流れており、粗粒砂土は中ノ池川に起因するものと思われる。

本調査地は中世常楽寺遺跡の集落の一角と判断される。

(渡邊)

(1) 野洲町教育委員会 1992 『平成3年度 野洲町内遺跡発掘調査概要』

(2) 滋賀県野洲市教育委員会 2022 『令和3年度 野洲市内遺跡発掘調査年報』

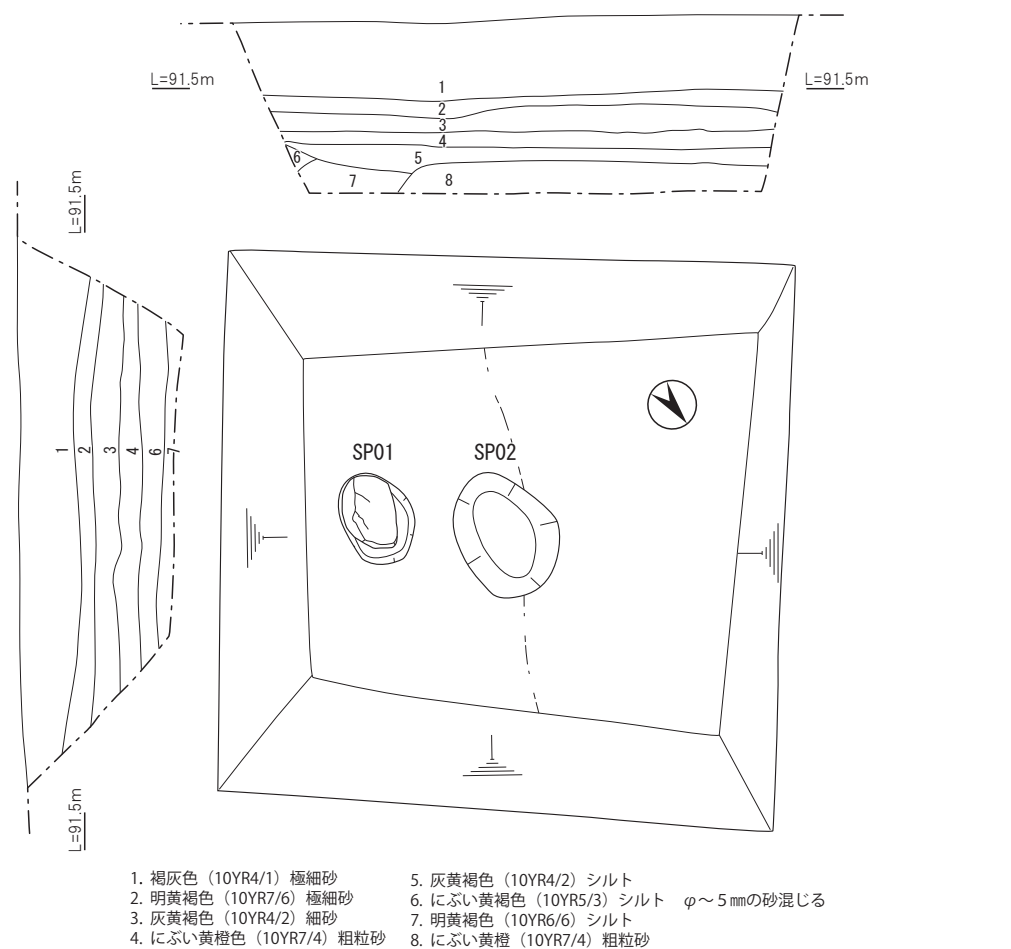


図2 遺構平面図・土層断面図

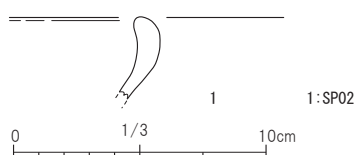


図3 出土遺物

## 11. 常楽寺遺跡



図4 既往の調査



遺構検出状況（西から）



11. 常楽寺遺跡



遺構完掘後（西から）



南壁土層断面（北東から）



東壁土層断面（西から）

## 12. のだ 野田遺跡

調査地 野洲市野田字里ノ内 1950 番  
調査原因 個人住宅  
調査期間 令和 5 年 1 月 19 日

### 1. 調査経過

野田遺跡は古墳時代から江戸時代にかけての集落跡と周知されている。遺跡の規模は東西 700 m、南北 800 m にわたり、東は彼岸地遺跡、西は安治口戸遺跡、南は五条今屋遺跡・五条遺跡に隣接する。

調査は個人住宅の建設に伴う試掘調査で、建物建築範囲に約 6.0m<sup>2</sup>の調査区を設定し、遺構・遺物の有無の確認に努めた。

### 2. 調査成果

基本層序は第 1 層（1 ～ 3 層）が近現代の盛土、第 2 層（4 ～ 8 層）が径 5 ～ 20mm 程の礫、炭化物、土器片を含む灰オリーブ色粘質土層、第 3 層（9 層）が灰オリーブ色シルト層である。

遺構面は第 3 層上面で、標高 85.5 m を測る。遺構は 5 基のピットを検出した。遺構埋土からは中世の土器が出土した。

### 3. まとめ

本調査地は中世の集落跡と考えられる。

(芦塚)

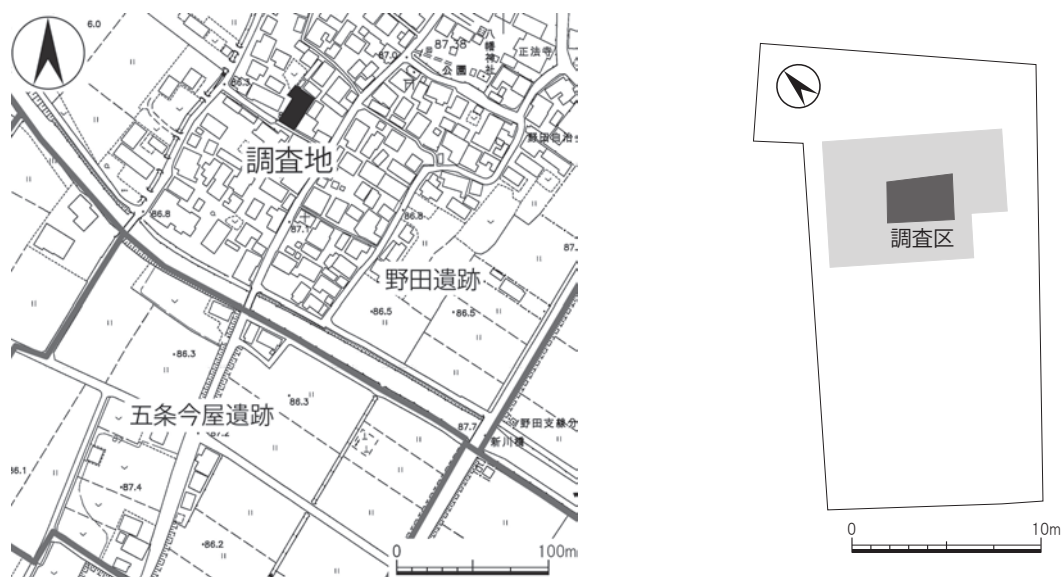
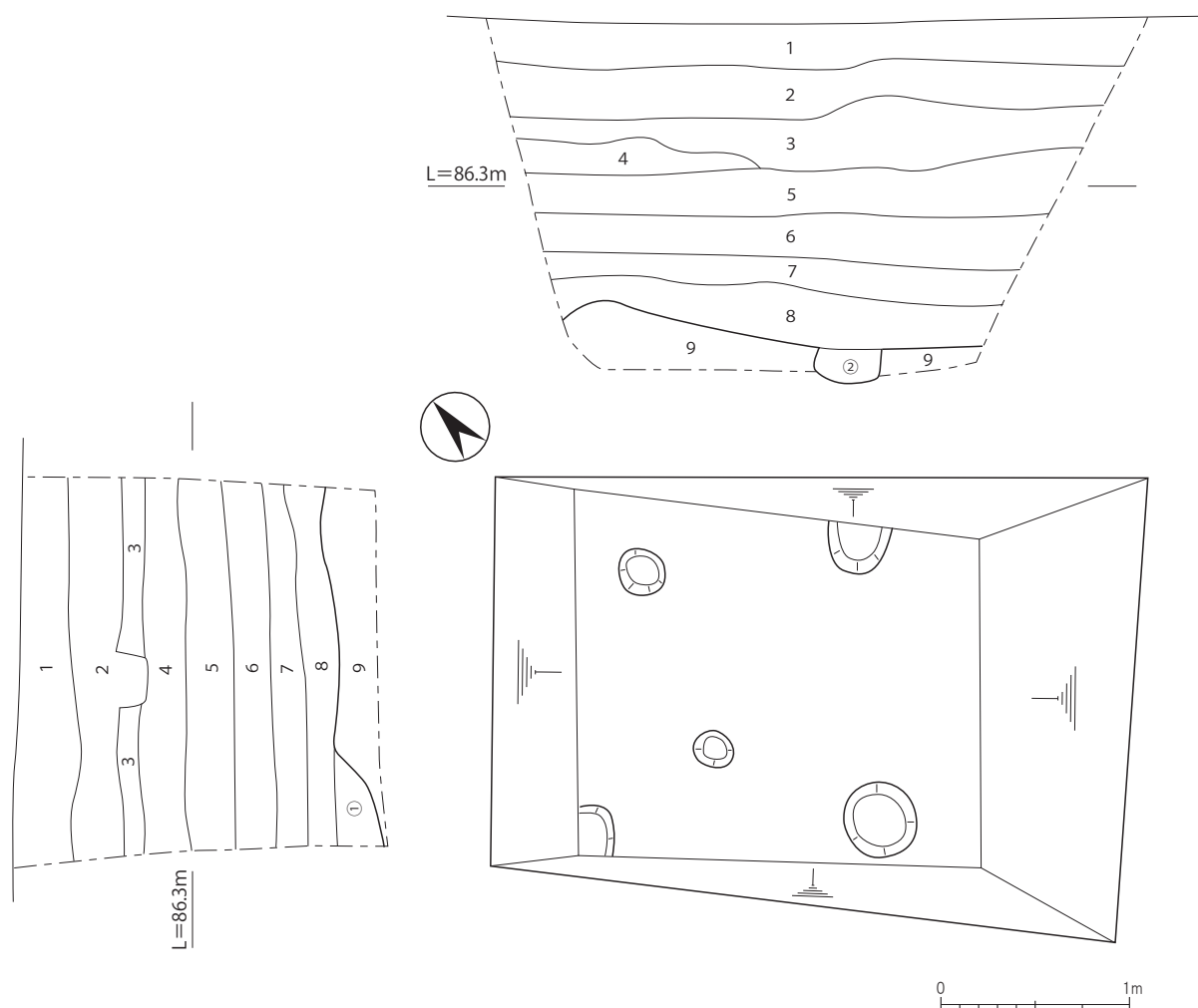


図 1 調査地位置図・調査区配置図

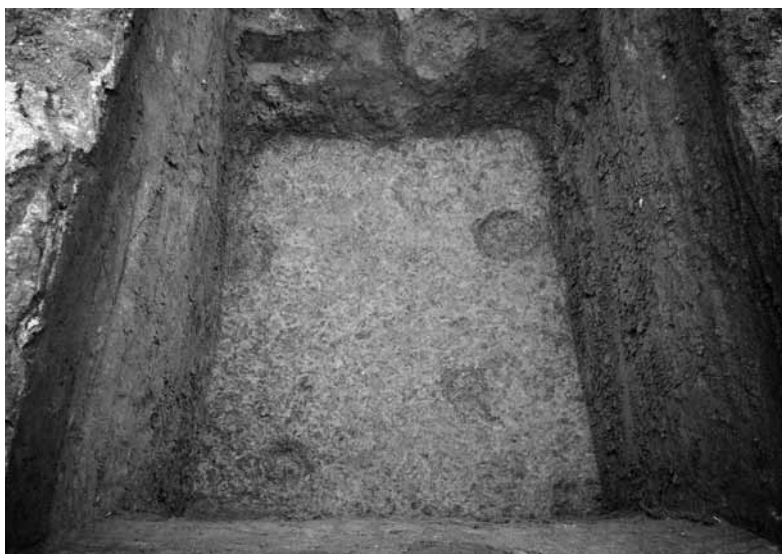


1. 山砂 2. オリーブ黒色 (5Y 3/2) 粗砂 3. オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 粗砂 4. オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 砂 (炭化物、土器片を含む)  
 5. 暗灰黄色 (2.5Y 4/3) 中粒砂 (径 20mm 程の礫、細かい土器片を含む) 6. 灰オリーブ色 (7.5Y 5/1) 粘質土 (径 5 ~ 10mm 程の礫、炭化物を含む)  
 7. 灰オリーブ色 (5Y 5/2) 粘質土 (炭化物、土器片を含む) 8. 灰オリーブ色 (5Y 4/2) 砂質シルト (炭化物、土器片を含む)  
 9. 灰オリーブ色 (5Y 5/3) シルト [遺構面] (しまりあり)  
 ① 灰オリーブ色 (5Y 4/2) 粘土 [遺構埋土] (土器片を含む) ② 暗オリーブ色 (5Y 4/3) シルト [遺構埋土]

図2 調査区平面図・土層断面図



## 12. 野田遺跡



完掘状況（北東から）



北壁土層断面



西壁土層断面

## 13. <sup>たか</sup> <sup>ぎ</sup> 高木遺跡

調査地 野洲市<sup>たか</sup>高木<sup>ぎ</sup>字<sup>あざはし</sup>橋ノ内<sup>うち</sup> 704 番 1、704 番 4  
調査原因 個人住宅  
調査期間 令和 5 年 1 月 20 日

### 1. 調査経過

高木遺跡は古墳時代から室町時代にかけての集落跡・城館跡と周知されている。調査地は高木の集落の西端に位置し、付近には春日神社が鎮座する。

調査は個人住宅の建設に伴う試掘調査で、建物建築範囲に約 6.0m<sup>2</sup>の調査区を設定し、遺構・遺物の有無の確認に努めた。

### 2. 調査成果

地表面下約 0.9 m（標高約 88.6 m）で確認したオリーブ色粘土層上面が遺構面である。遺構は溝を 1 条検出した。

溝は幅 2.0 m 以上、深さ 0.8 m を測る。春日神社の濠もしくは高木の集落の配水用の溝といった性格が想定される。

### 3. まとめ

調査の結果、溝を 1 条検出した。溝の年代については、遺物が出土していないため不明であるが、明治 6 年の村絵図に本調査で検出した溝は描かれていないため、明治 6 年の時点で埋没していたと考えられる。

(芦塚)

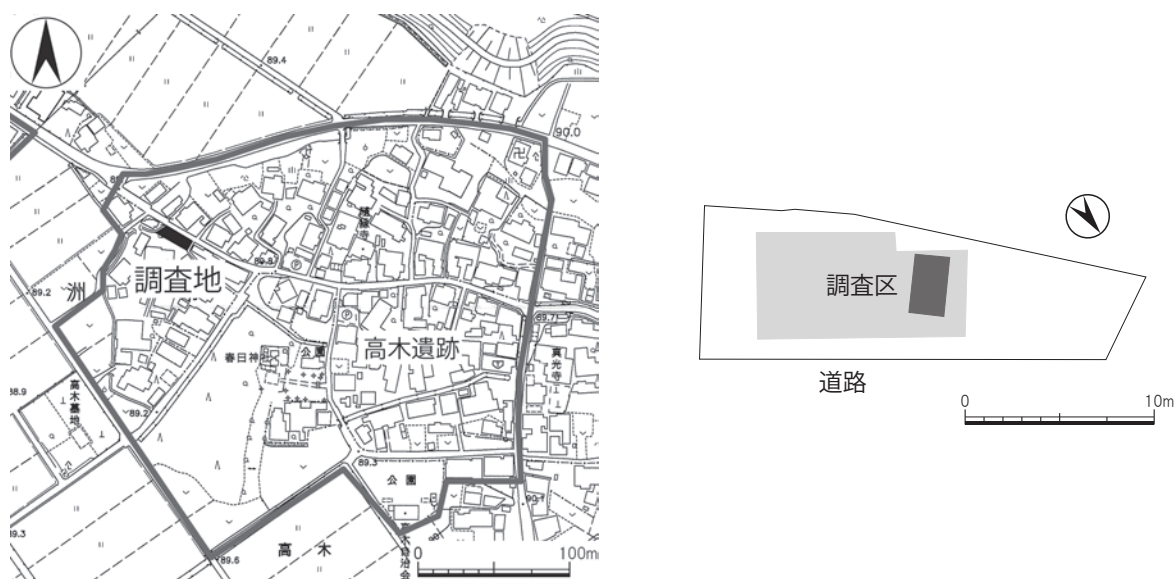
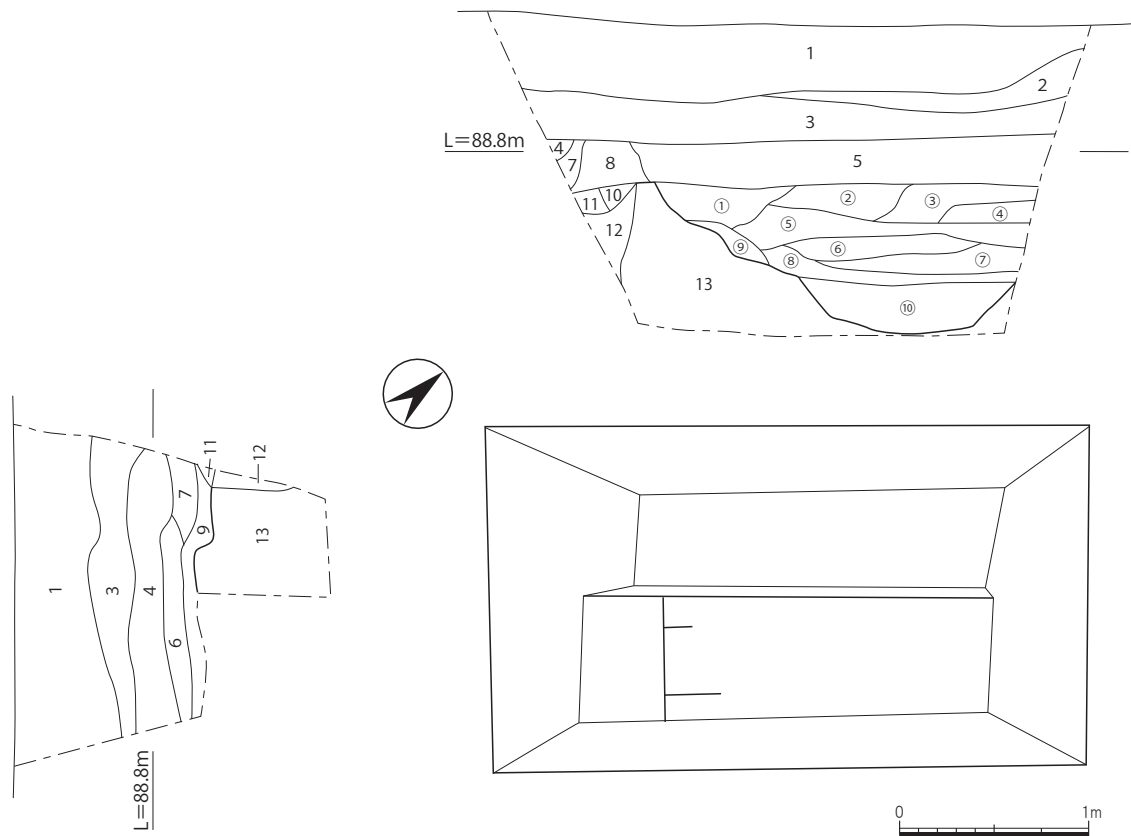


図 1 調査地位置図・調査区配置図

### 13. 高木遺跡



1. 明褐色 (7.5YR 5/6) 細粒砂 [造成土] 2. 灰色 (10Y 5/1) シルト 3. 灰色 (10Y 4/1) 極細粒砂 4. 灰色 (7.5Y 6/1) 砂 (ブロック土を含む)  
 5. 灰色 (10Y 5/1) シルト (径 50mm 程の礫、炭化物、ブロック土を含む) 6. 灰色 (10Y 6/1) 粗砂 7. 灰オリーブ色 (7.5Y 6/2) 極細粒砂  
 8. 暗オリーブ灰色 (5GY 4/1) 粗砂 9. 灰色 (7.5Y 5/1) シルト 10. 灰色 (10Y 6/1) 砂 11. 灰オリーブ色 (5Y 4/2) 粘土  
 12. 灰オリーブ色 (5Y 4/2) 粘土 13. オリーブ色 (5Y 5/4) 粘土 (地山) [遺構面]  
 ①灰色 (7.5Y 5/1) 中粒砂混シルト (炭化物、ブロック土を含む) ②灰色 (10Y 5/1) 中粒砂混シルト (ブロック土を含む)  
 ③灰色 (7.5Y 4/1) 粗粒砂混極細粒砂 (炭化物を含む) ④オリーブ灰色 (10Y 6/2) 粘土 ⑤灰色 (7.5Y 5/1) シルト ⑥灰色 (10Y 4/1) 砂質シルト  
 ⑦灰色 (7.5Y 5/1) 粘土 ⑧灰色 (7.5Y 4/1) 粘土 ⑨灰色 (10Y 5/1) シルト ⑩明オリーブ灰色 (2.5GY 7/1) 砂

図2 調査区平面図・土層断面図



西壁土層断面



## 14. 比留田遺跡

調査地 野洲市比留田字重高 743 番 5  
調査原因 個人住宅  
調査期間 令和 5 年 1 月 31 日

### 1. 調査経過

比留田遺跡は、家棟川の氾濫原の微高地である自然堤防上に位置する弥生時代から江戸時代にかけての集落跡と周知されている。遺跡の規模は東西 500 m、南北 750 m にわたり、北は焼矢遺跡、東は木部遺跡、南は比留田法田遺跡、西河原森ノ内遺跡、西は西河原薄窪遺跡と隣接する。

調査は個人住宅の建設に伴う試掘調査で、建物建築範囲に約 6.0m<sup>2</sup>の調査区を設定し、遺構・遺物の有無の確認に努めた。

### 2. 調査成果

基本層序は第 1 層が盛土、第 2 層が改良土、第 3 層が灰色粗砂層である。第 3 層上面（地表面下約 1.3 m・標高約 85.7 m）で、まとまった量の湧水があったため、これ以上の掘削を断念した。

### 3. まとめ

本調査地周辺では、洪水堆積層が確認されており、本調査で確認した灰色粗砂層も洪水堆積層と判断される。

(芦塚)

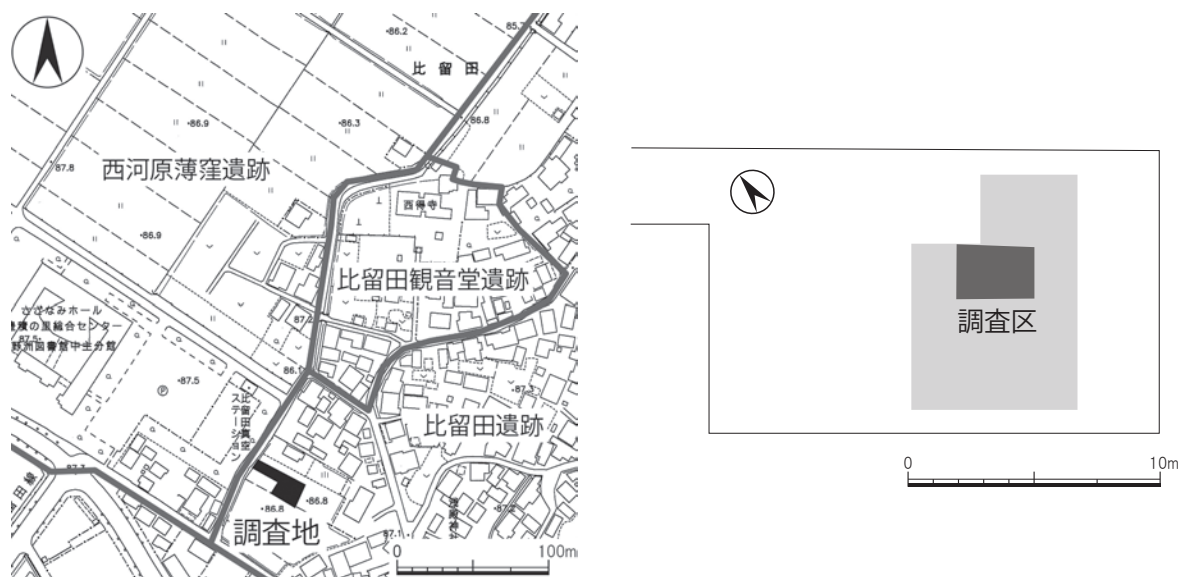


図 1 調査地位置図・調査区配置図

# 14. 比留田遺跡

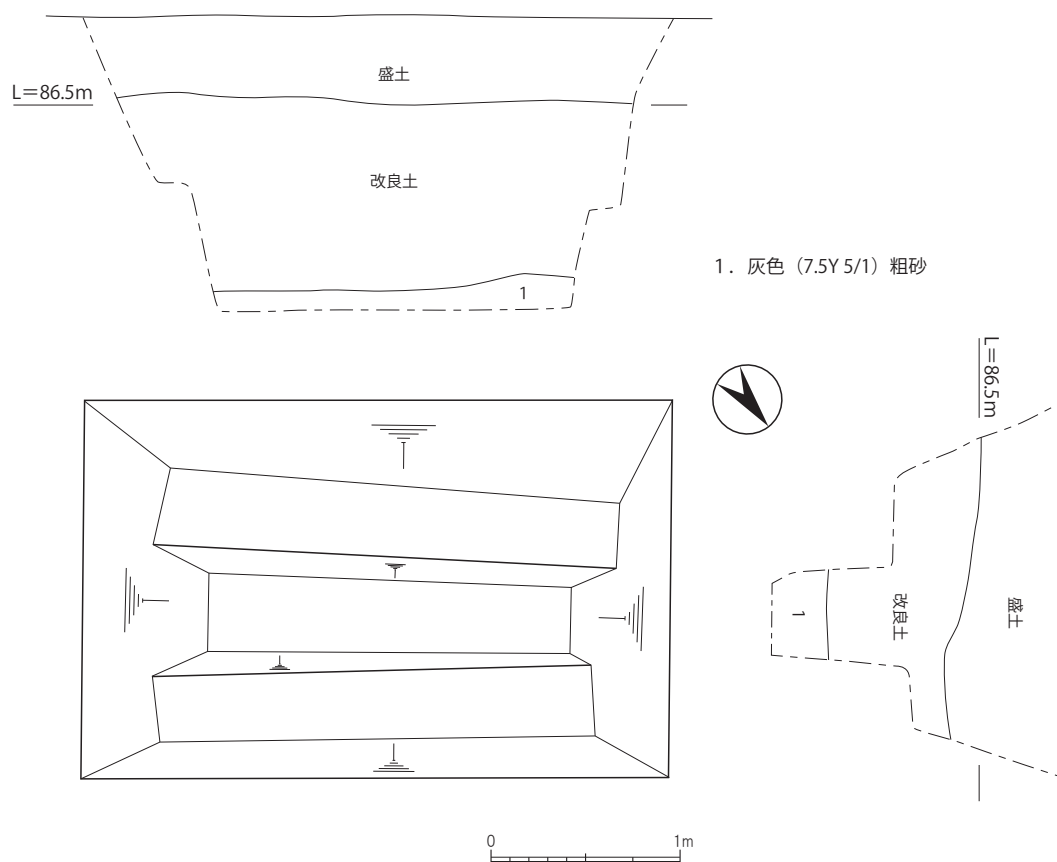


図2 調査区平面図・土層断面図



全景（南東から）

## 15. と ば ひがし 富 波 東 遺 跡

調 査 地 野洲市<sup>と ば あざやまぐちおつ</sup>富波字山口乙 353 番 5  
調査原因 個人住宅  
調査期間 令和 5 年 2 月 15 日

### 1. 調査経過

富波東遺跡は弥生時代から室町時代にかけての集落跡と周知され、野洲市のほぼ中央に位置している。遺跡の規模は東西 600 m、南北 900 m にわたり、東は辻町遺跡、西は富波遺跡、北は常楽寺遺跡・野々宮遺跡に隣接する。調査地の北西には、祇王井川が流れる。

調査は個人住宅の建設に伴う試掘調査で、建物建築範囲に約 6.0m<sup>2</sup>の調査区を設定し、遺構・遺物の有無の確認に努めた。

### 2. 調査成果

地表面下約 0.8 m（標高 92.8 m）で確認した黄褐色粗砂層上面で溝を 1 条検出した。溝の埋土からは近現代の瓦が出土した。

また、調査区の北東半は攪乱を受けていた。

### 3. まとめ

調査地は砂層を基盤とし、北西に接する祇王井川が昭和 40 年代頃に改修されるまで、両側に堤が形成されていたことから、旧祇王井川堤にあたると考えられる。

（芦塚）

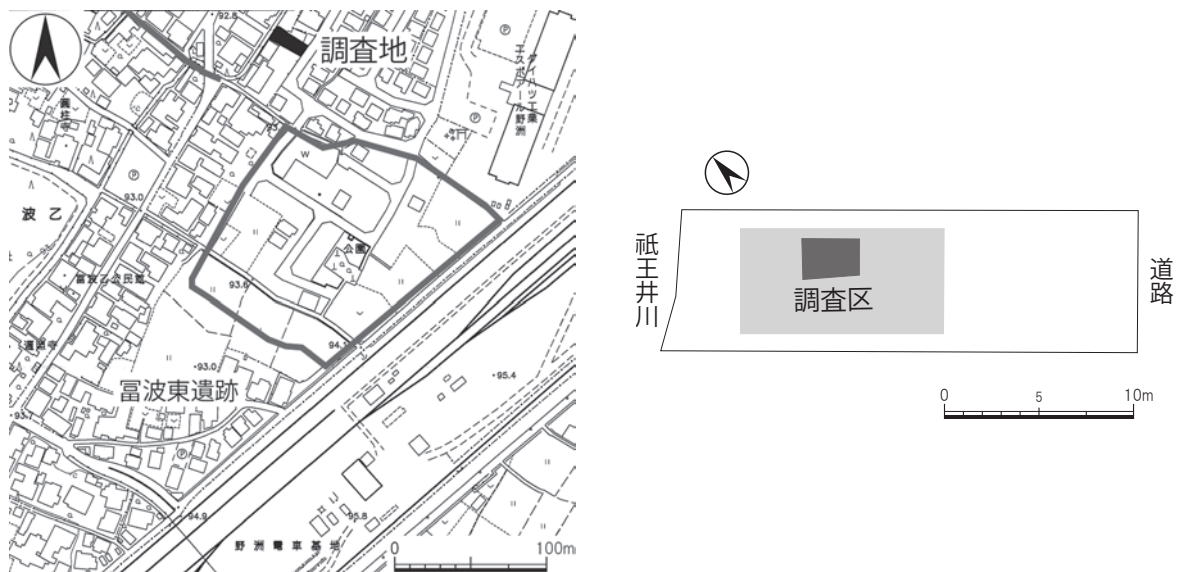
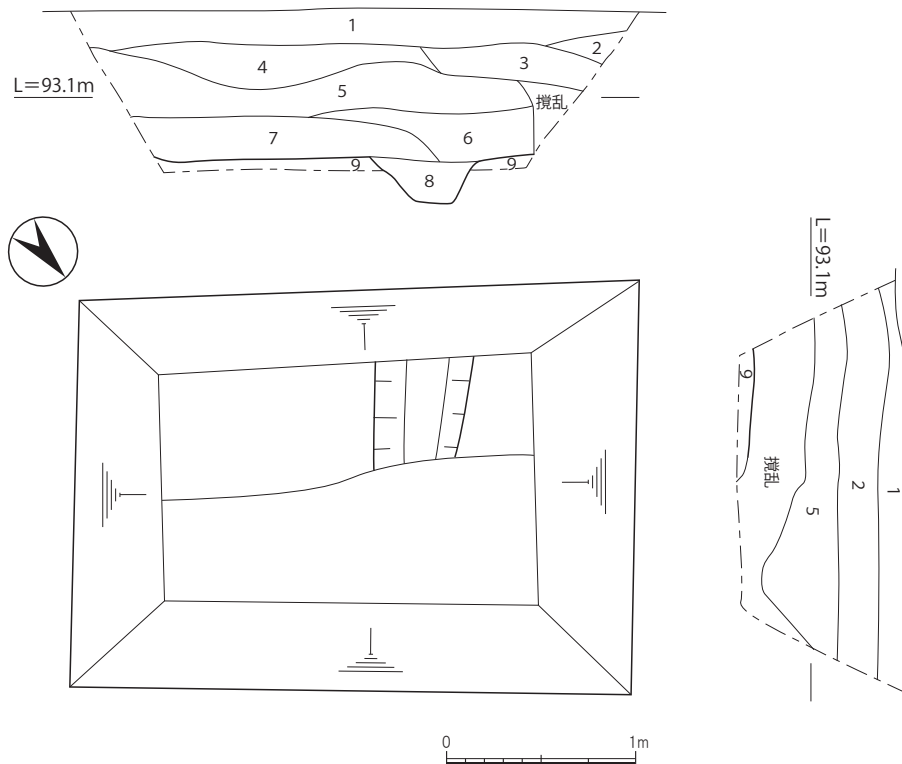


図 1 調査地位置図・調査区配置図



## 15. 富波東遺跡



1. 表土 2. 造成土（瓦礫を含む） 3. 造成土（瓦礫を含む） 4. 造成土 5. 造成土（山砂）  
 6. 黒色（10YR 2/1）粘質土（径5～10mm程の礫を含む） 7. 暗灰黄色（2.5Y 5/2）粗砂  
 8. 灰色（5Y 4/1）粗砂〔遺構埋土〕 9. 黄褐色（2.5Y 5/3）粗砂

図2 調査区平面図・土層断面図



全景（南東から）

## 16. 光明寺遺跡

調査地 野洲市西河原<sup>にしがわら</sup> 925 番 5、921 番 6  
調査原因 個人住宅  
調査期間 令和 5 年 2 月 22 日

### 1. 調査経過

光明寺遺跡は奈良時代から江戸時代にかけての集落跡と周知され、野洲市の北西部に位置している。遺跡の規模は東西 600 m、南北 1,000 m にわたり、東は西河原遺跡・西河原森ノ内遺跡、西は乙窠遺跡、南は太田遺跡・小比江遺跡、北は光相寺遺跡・吉地大寺遺跡に隣接する。

調査は個人住宅の建設に伴う試掘調査で、建物建築範囲に約 6.0m<sup>2</sup>の調査区を設定し、遺構・遺物の有無の確認に努めた。

### 2. 調査成果

地表面下約 1.4 m（標高 88.6 m）で確認したオリーブ色砂積層上面で精査を行ったが、遺構・遺物は確認されなかった。

### 3. まとめ

本調査地に隣接する地点の字名は川ケ中であり、河川が存在をうかがうことができる。これを踏まえると、本調査で確認した砂礫層も旧河川の可能性がある。

（芦塚）

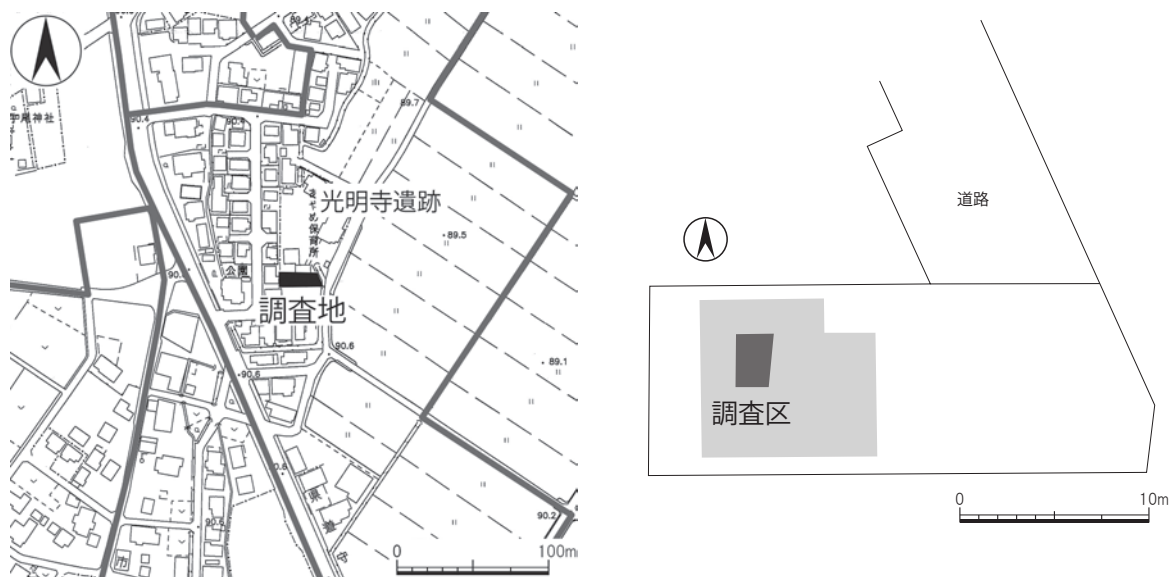
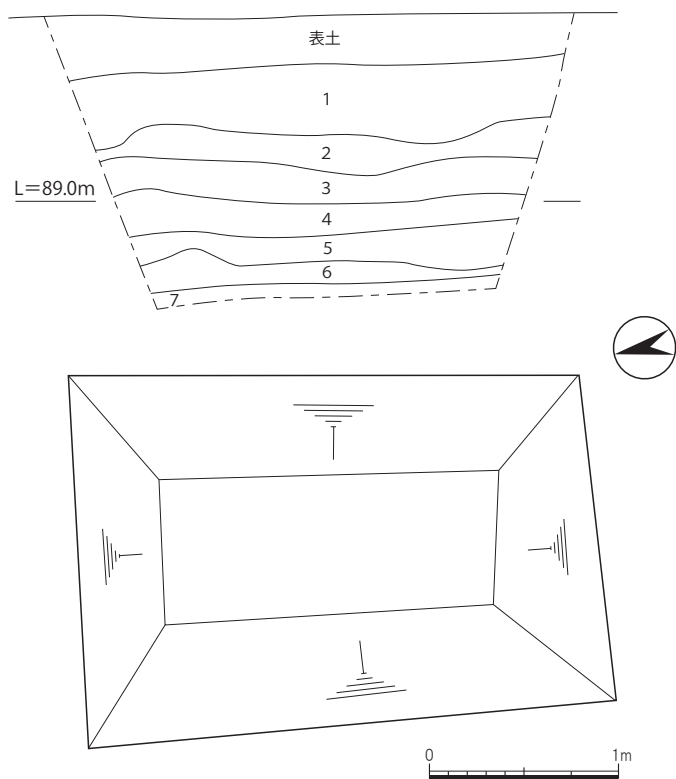


図1 調査地位置図・調査区配置図

## 16. 光明寺遺跡



1. 明褐色 (7.5YR 5/6) 礫 [盛土] 2. 灰色 (10Y 5/1) 細粒砂 [盛土] (径 5 ~ 20mm の礫を含む) 3. 黒色 (10Y 2/1) 粘質土 (炭化物を含む)  
4. 灰色 (10Y 4/1) 細砂 5. オリーブ灰色 (2.5GY 6/1) 細砂 6. 暗緑灰色 (5G 4/1) シルト 7. オリーブ灰色 (5GY 6/1) 砂礫

図2 調査区平面図・土層断面図



全景（南東から）



## 17. 小篠原遺跡

調査地 野洲市小篠原字朴 2221 番 2  
調査原因 個人住宅  
調査期間 令和 5 年 3 月 7 日～3 月 8 日

### 1. 調査経過

小篠原遺跡は、JR 野洲駅の東北部に広がる縄文時代晩期から近世まで続く複合遺跡である。これまでの調査では、遺跡の東側で林ノ腰古墳をはじめとする埋没古墳を数基発見しており、遺跡の中心部では古代の掘立柱建物を重複して検出している。遺跡の中心部は野洲郡衙の有力な候補地とされている。

調査地は遺跡の南西側に位置する。令和 4 年度に本調査地に隣接する地点の調査を実施しており、8～9 世紀代の井戸や溝、掘立柱建物が検出されている(1)。

調査は個人住宅の建設に伴う本発掘調査で、建物建築範囲に約 13.5㎡の調査区を設定し、遺構・遺物の有無の確認に努めた。

### 2. 調査成果

基本層序は第 1 層が表土（1 層）、第 2 層が造成土（2～4 層）、第 3 層にぶい黄褐色砂礫層（5 層）、第 4 層遺物包含層（6 層）、第 5 層褐色粘土層（7 層）である。遺構面は第 5 層褐色粘土層上面で、標高 86.6 m を測る。

遺構はピットを 7 基検出した。調査面積が狭いこともあり、建物の復元には至らなかった。

SP01 長軸約 50cm、短軸約 40cm、深さ約 30cm を測る。埋土は 2 層に分かれており、上層は炭化物を含む黒褐色粘土層、下層は灰色粘土層である。埋土からは土師器片が数点出土した。

SP02 長軸約 50cm、短軸約 30cm、深さ約 20cm を測る。埋土は 3 層に分かれており、1 層がオリーブ黒色粘土層、2 層が炭化物を含む黒褐色粘土層、3 層が黒褐色粘土層である。埋土から土師器片が 1 点出土した。

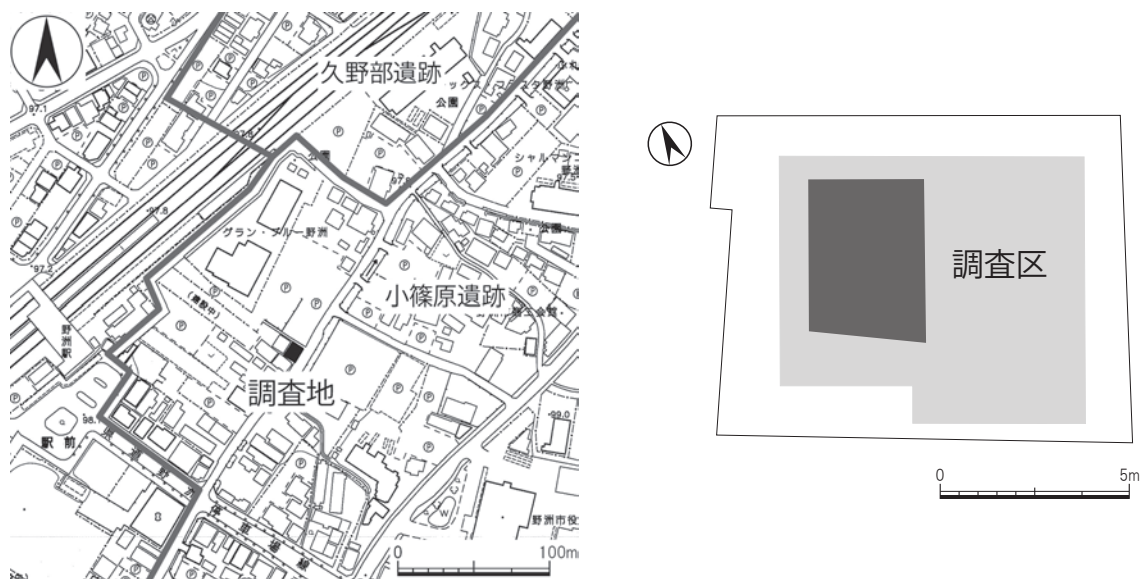
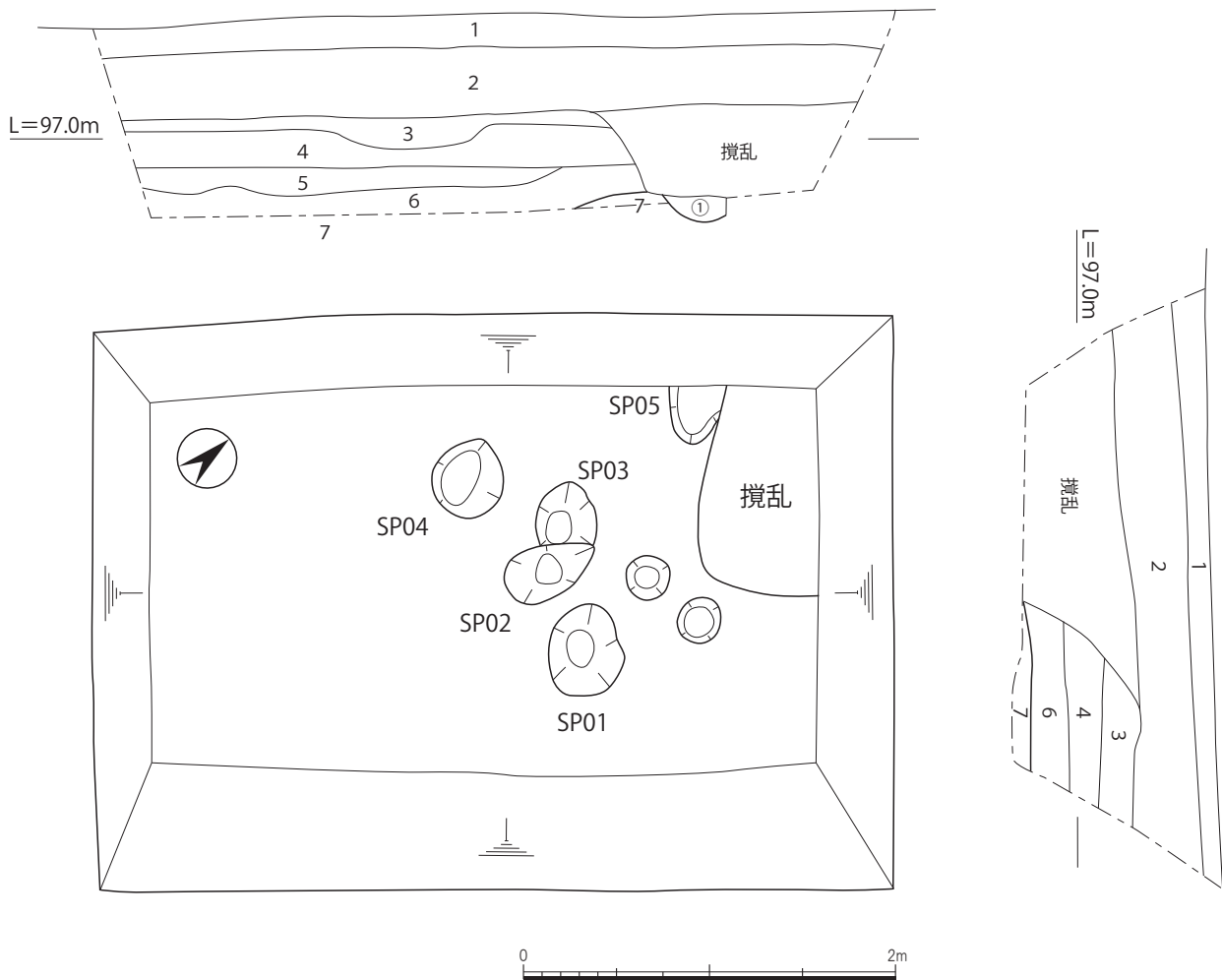


図 1 調査地位置図・調査区配置図

## 17. 小篠原遺跡



1. 表土 2. 灰色 (5Y 4/1) 砂礫 (径 10 ～ 140mm 程の礫を含む) 3. 灰色 (5Y 4/1) 極細粒砂 (径 5 ～ 10mm 程の礫を含む、やや粘性アリ)  
 4. 灰オリーブ色 (5Y 4/2) 砂質シルト (径 5 ～ 30mm 程の礫、炭化物を含む) 5. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 砂礫 (径 5 ～ 30mm 程の礫を含む)  
 6. 黒褐色 (2.5Y 3/2) シルト (径 30mm 程の礫、炭化物、遺物を含む) 7. 褐色 (10YR 4/4) 粘土 [遺構面]  
 ①黒褐色 (10YR 3/1) 粘土 [SP05 埋土]

図2 調査区平面図・土層断面図

SP03 直径約 40cm、深さ約 20cmを測り、SP02 に切られる。埋土は単層で、炭化物を含むオリーブ黒色粘土層である。遺物は出土しなかった。

SP04 直径約 40cm、深さ約 20cmを測る。埋土は2層に分かれており、上層はオリーブ黒色粘土層、下層は炭化物を含む黒褐色粘土層である。遺物は出土しなかった。

SP05 直径約 30cm、深さ約 15cmを測る。埋土は単層で、黒褐色粘土層である。遺物は出土しなかった。

### 3. まとめ

本調査地は古代から中世にかけての集落跡と評価される。

(芦塚)

17. 小篠原遺跡



全景（北東から）



北東壁



北西壁



## 18. 富波東遺跡

調査地 野洲市富波字山口乙 353 番 6  
調査原因 個人住宅  
調査期間 令和 5 年 3 月 14 日

### 1. 調査経過

富波東遺跡は弥生時代から室町時代にかけての集落跡と周知され、野洲市のほぼ中央に位置している。遺跡の規模は東西 600 m、南北 900 m にわたり、東は辻町遺跡、西は富波遺跡、北は常楽寺遺跡・野々宮遺跡に隣接する。調査地の北西には、祇王井川が流れる。

調査は個人住宅の建設に伴う試掘調査で、建物建築範囲に約 6.0m<sup>2</sup>の調査区を設定し、遺構・遺物の有無の確認に努めた。

### 2. 調査成果

地表面下約 1.3 m（標高約 92.5 m）で確認したにぶい黄色粘土層上面で精査を行ったが、遺構・遺物は確認されなかった。

### 3. まとめ

本調査地と同じ造成地内の隣接する地点では、砂層の基盤を確認したが、本調査地では粘土層が基盤となっていた。本調査地は富波東遺跡の遺構の空閑地と評価される。

（芦塚）

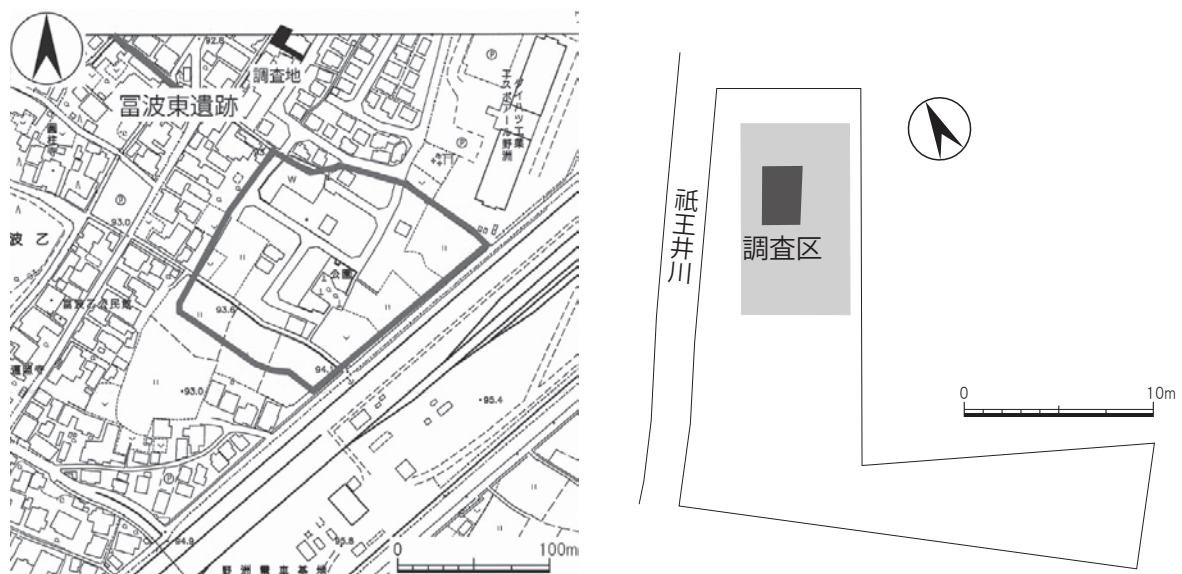
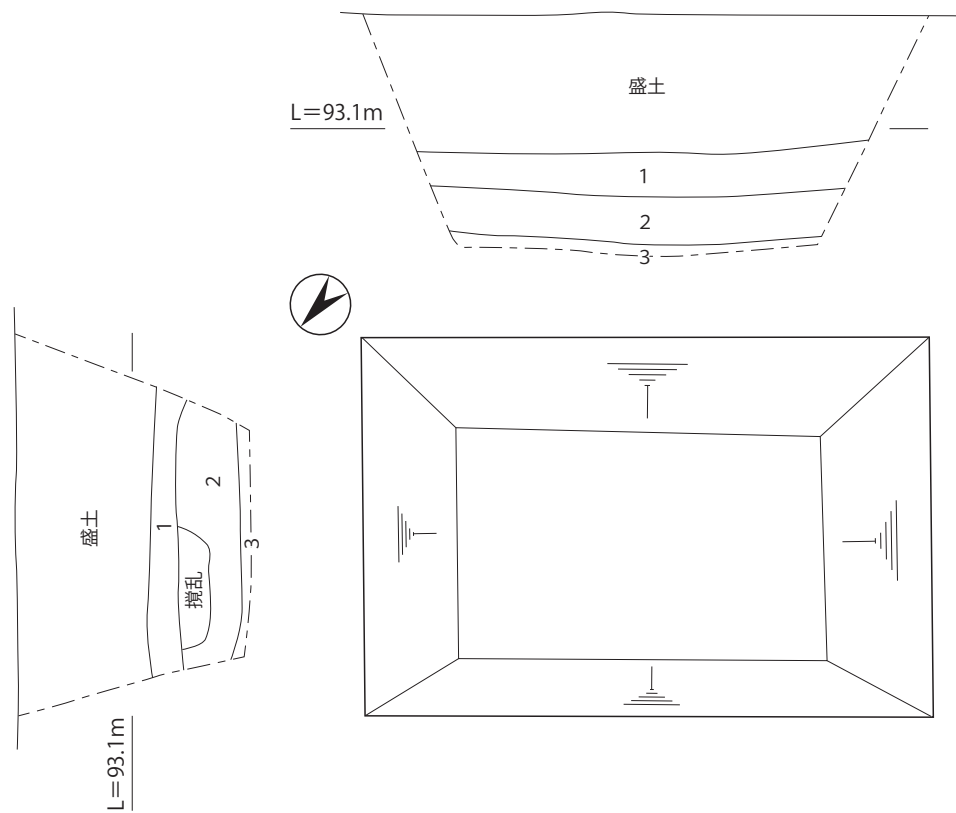


図1 調査地位置図・調査区配置図



1. 黒色 (5Y 2/1) 細粒砂 (径 50mm 程の礫、土のう袋を含む) 2. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 粗砂 3. にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 粘土

図2 調査区平面図・土層断面図



全景 (南西から)

## 19. 富波東遺跡

調査地 野洲市富波字山口乙 353 番 3  
調査原因 個人住宅  
調査期間 令和 5 年 3 月 15 日

### 1. 調査経過

富波東遺跡は弥生時代から室町時代にかけての集落跡と周知され、野洲市のほぼ中央に位置している。遺跡の規模は東西 600 m、南北 900 m にわたり、東は辻町遺跡、西は富波遺跡、北は常楽寺遺跡・野々宮遺跡に隣接する。調査地の北西には、祇王井川が流れる。

調査は個人住宅の建設に伴う試掘調査で、建物建築範囲に約 6.0m<sup>2</sup>の調査区を設定し、遺構・遺物の有無の確認に努めた。

### 2. 調査成果

表土以下は造成土が厚く堆積しており、隣接する地点で遺構面が確認されたレベル(標高約 92.7 m)まで掘り下げても、人為的に盛られた山砂が堆積していた。さらに掘り下げると、地表面下約 1.0 m 付近(標高約 92.3 m)で水が湧き始め、地表面下約 1.2 m 付近(標高約 92.1 m)からはまとまった量の湧水があったため、これ以上の掘り下げを断念した。

### 3. まとめ

周辺で遺構面が確認されるレベルで山砂の堆積が認められることから、前身の建物建築時の工事によって既に遺構が破壊されてしまっているものとみられる。

(芦塚)

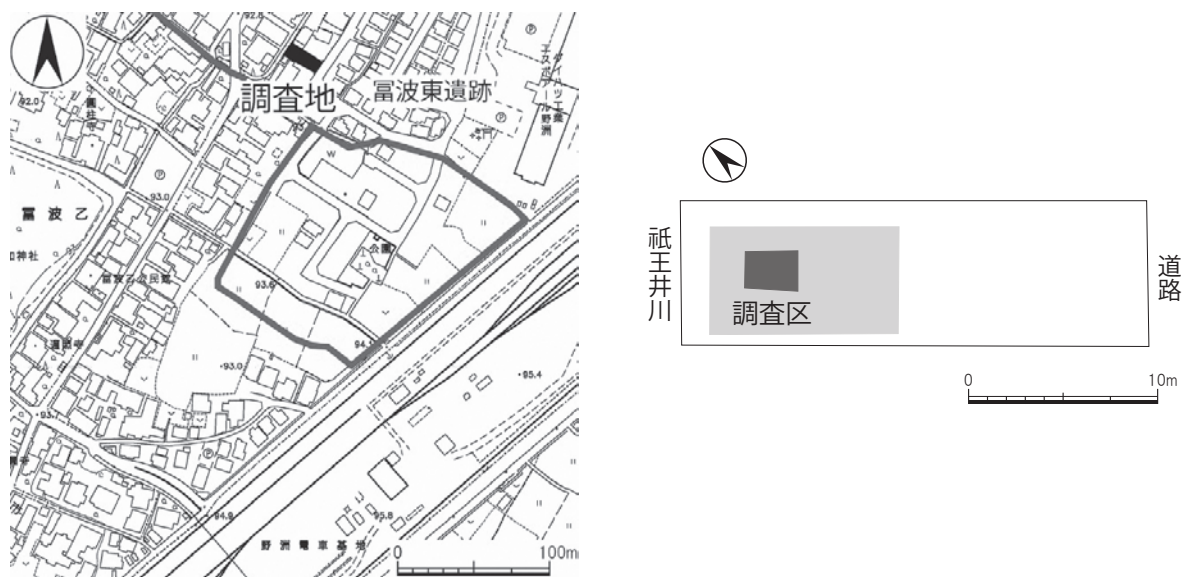
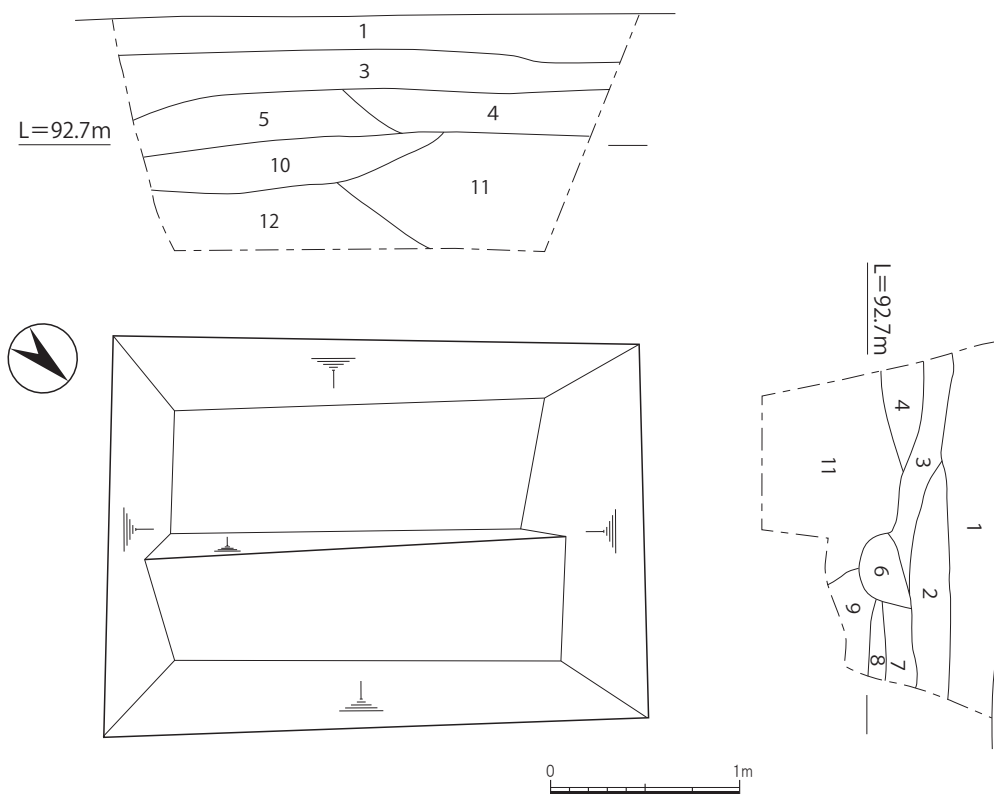


図1 調査地位置図・調査区配置図





1. 表土 2. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 粗粒砂 (ブロック土を含む、混入物多い)  
 3. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 中粒砂 (径 10 ～ 60mm 程の礫を含む) 4. 灰黄褐色 (10YR 4/3) 粗砂  
 5. 黄褐色 (2.5Y 5/3) 粗粒砂 6. 褐灰色 (10YR 5/1) 粗砂 (径 50 ～ 80mm 程の礫を含む)  
 7. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 粗粒砂混細粒砂 (径 10mm 程の礫を含む) 8. 明褐黄色 (10YR 6/6) 山砂  
 9. 灰黄褐色 (10YR 4/2) 極細粒砂 10. 黒褐色 (2.5Y 3/2) 砂混細粒砂 11. 明褐黄色 (10YR 7/6) 山砂  
 12. 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) シルト

図2 調査区平面図・土層断面図



全景 (北西から)

## 20. にし が わら 西河原遺跡

調査地 野洲市西河原<sup>にし が わら あざろくたんだ</sup>字六反田 896 番 2  
調査原因 個人住宅  
調査期間 令和 5 年 3 月 27 日

### 1. 調査経過

西河原遺跡は、奈良～江戸時代の集落跡と周知されている。

調査地は西河原遺跡の南西に位置する。調査は個人住宅建設に伴うものである。建物建築範囲に調査区を設定し、試掘調査を実施した。周辺の既往の調査としては、平成 18 年（2006）に北東側約 80 m 地点で調査が行われ、江戸時代の井戸を検出している<sup>(1)</sup>。

現地での調査は令和 5 年 3 月 27 日に行った。

### 2. 調査成果

調査は建物建築範囲に約 4.0m<sup>2</sup>の調査区を設定し、試掘調査を実施した。

地表面下約 0.8 m（標高 87.7 m）で確認した橙色粘土層上面で精査を行ったところ、溝を一条検出した。溝は調査区の北東側にさらに広がると思われ、深さ約 0.2 m を測る。埋土は暗褐色粘土となる。その後地表面下約 1.1 m まで下層確認を行ったが下層は礫層を基盤としており、遺物・遺構は確認できなかった。

溝からは中世の土師器片が出土した。1 は土師器の皿である。内面はナデ調整、底部はコビオサエ調整を施す。口縁部外面はヨコナデを施す。2 は黒色土器の椀である。内外面とともにナデ調整を施す。3 は重機掘削時に出土した黒色土器の椀である。内面はミガキ調整を施す。

### 3. まとめ

本調査地の東側約 50 m の市道部分で行った令和 3 年調査では遺構・遺物等は確認できていない<sup>(2)</sup>。遺構相当面は標高約 87.0 m で当該地点よりも 0.7 m 低いことから本調査地は微高地となっており、南東側にかけて遺跡の縁辺部となると予想される。



図 1 調査地位置図・調査区配置図

- (1) 滋賀県野洲市教育委員会 2007 『平成十八年度 野洲市内遺跡発掘調査年報』  
 (2) 滋賀県野洲市教育委員会 2023 『令和4年度 野洲市内遺跡発掘調査年報』

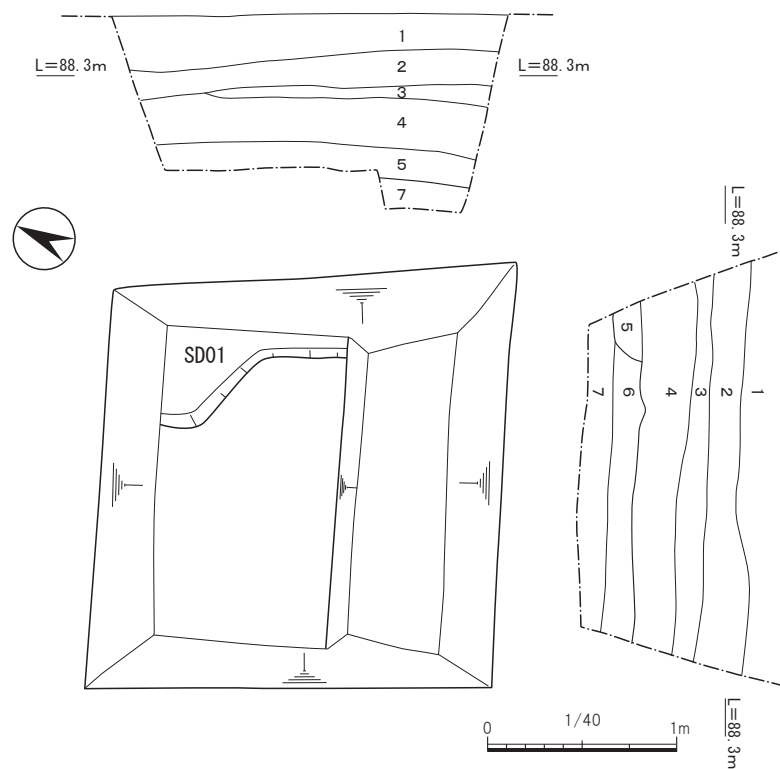


図2 調査区平面図・土層断面図

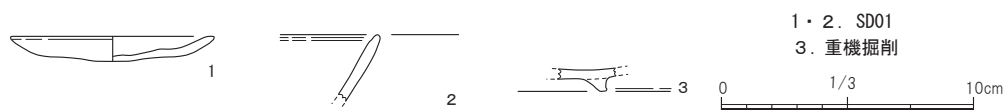


図3 遺物実測図



遺構完掘状況（東から）



南壁土層断面



## 20. 西河原遺跡

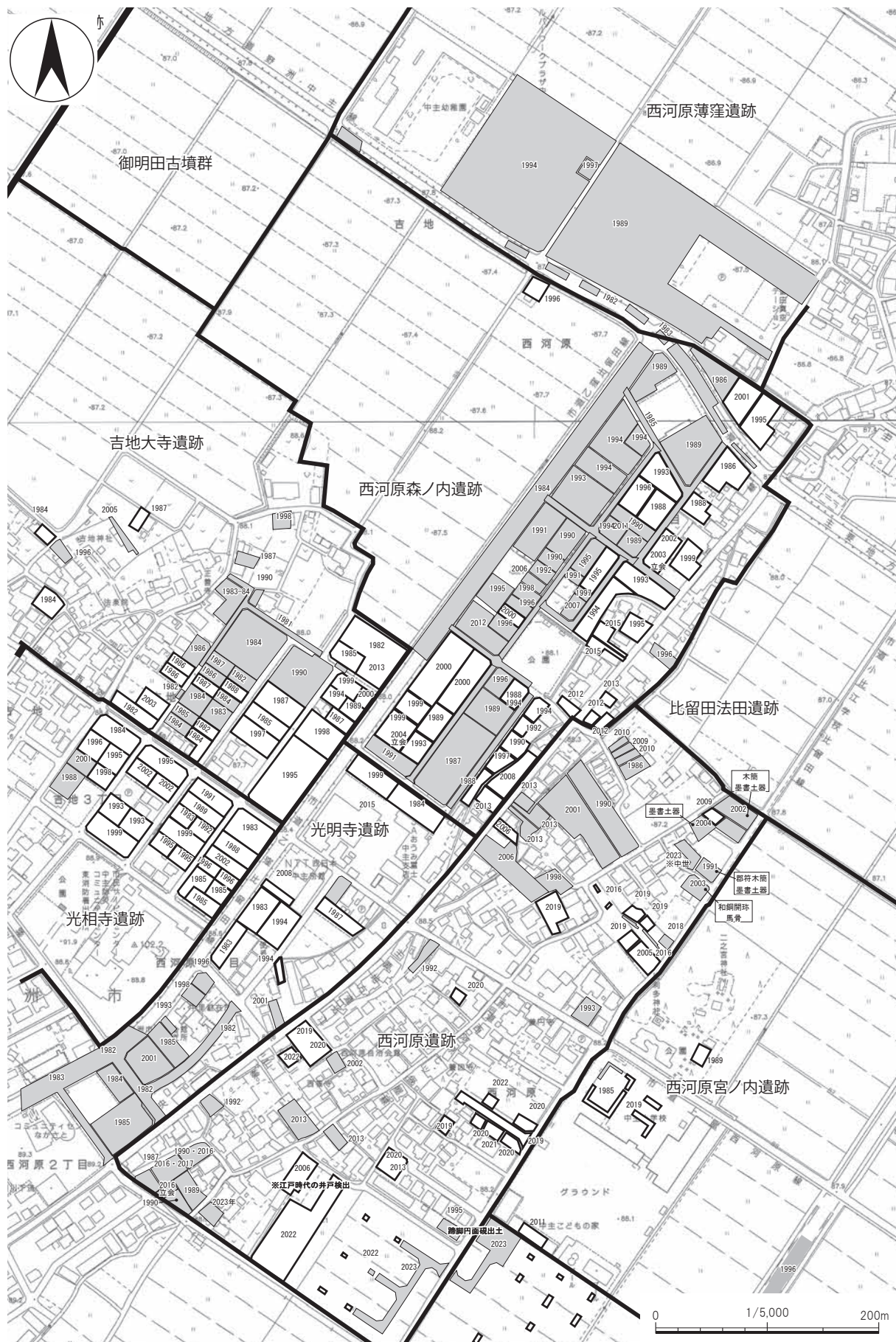


図4 既往の調査

## 21. と ば ひがし 富波東遺跡

調査地 野洲市<sup>と ば あざやまくちおつ</sup>富波字山口乙 353 番 2  
 調査原因 個人住宅  
 調査期間 令和 5 年 3 月 24 日

### 1. 調査経過

富波東遺跡は、弥生～室町時代の集落跡と周知されている。

調査地は富波東遺跡の北西側に位置する。調査は個人住宅建設に伴うものである。建物建築範囲に調査区を設定し、試掘調査を実施した。周辺の既往の調査としては、平成元年（1988）に東側約 50 m 地点で調査が行われ、古墳時代の遺構や中世の掘立柱建物、土墳墓等を検出している<sup>(1)</sup>。

現地での調査は令和 5 年 3 月 24 日に行った。

### 2. 調査成果

調査では建物建築範囲に約 6.0㎡の調査区を設定した。地表面下 1.1 m まで掘り下げたところ、地表面下約 0.9 m で遺構相当面と思われる明黄褐色土層を確認した。調査区からは遺構・遺物とともに出土しなかった。

### 3. まとめ

調査地は砂層を基盤としていた。本調査地の隣接する北側・南側の調査でも同じような土層堆積が確認できる<sup>(2)</sup>。調査地の西側には川があり、当調査地は川の砂の堆積による自然堤防のような様相を呈していると考えられる。

（渡邊）

(1) 野洲市教育委員会 2005 『野々宮遺跡発掘調査概要―滋賀県野洲市富波字野々宮・殿町・山ノ中所在』

(2) 野洲市教育委員会 2024 『令和 5 年度野洲市内遺跡発掘調査年報』

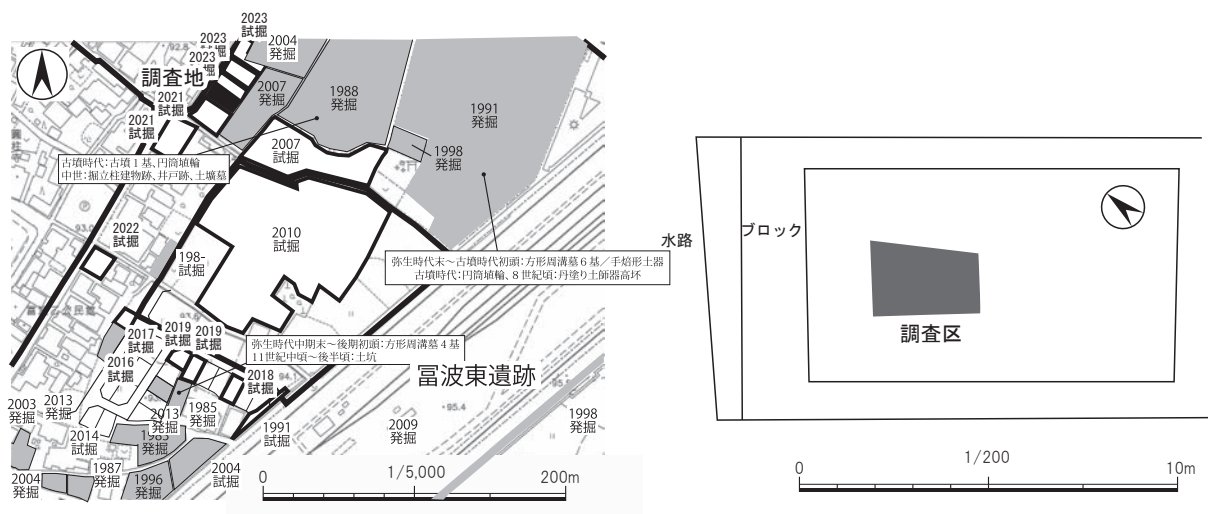


図 1 調査区位置図・調査区配置図



## 21. 富波東遺跡

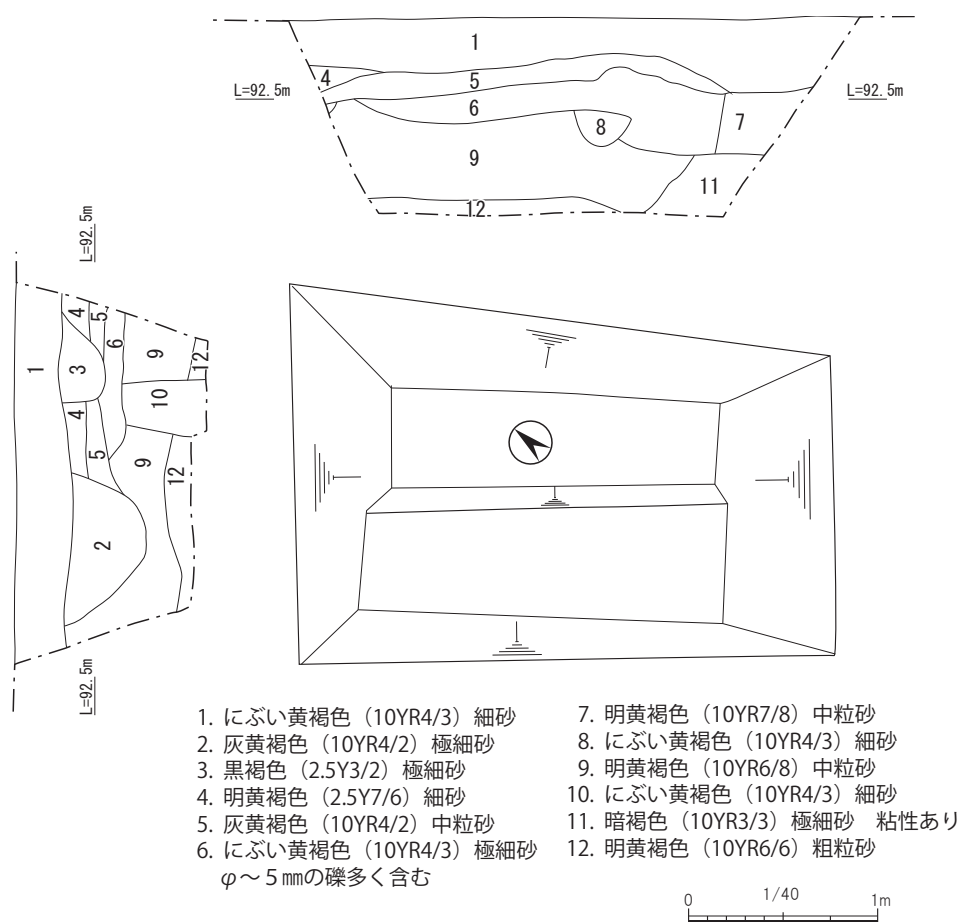
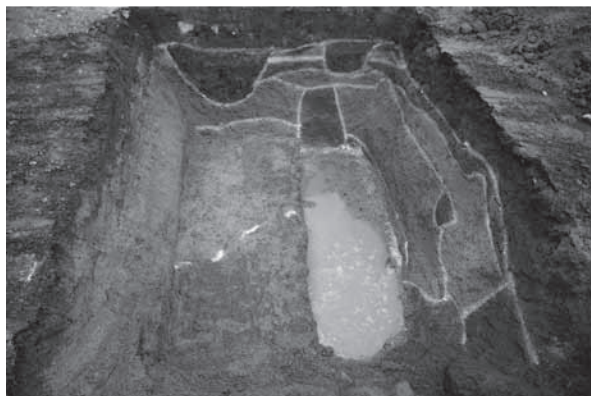


図2 調査区平面図・土層断面図



調査区 (南東から)



東壁土層断面



## 22. 五条遺跡

調査地 野洲市六条字辻堂 561 番 1  
 調査原因 個人住宅  
 調査期間 令和 5 年 4 月 21 日・24 日

### 1. 調査経過

五条遺跡は、弥生～江戸時代の集落跡と周知されている。

調査地は五条遺跡の南西に位置する。調査は個人住宅建設に伴うものである。建物建築範囲に調査区を設定し、試掘調査を実施した。周辺の既往の調査としては、令和元年（2019）に北東側約 30 m 地点で調査が行われ、ピットを検出している<sup>(1)</sup>。遺構面は 2 面確認でき、出土遺物から第 1 遺構面は中世、第 2 遺構面は古墳時代後半ごろと考えられる。このことから本調査地周辺は何時期の遺構面が確認されるとともに遺構・遺物も確認されることが予測された。

現地での調査は令和 5 年 4 月 21 日・24 日に行った。

### 2. 調査成果

調査は建物建築範囲に約 14.0m<sup>2</sup>の調査区を設定し、試掘調査を実施した。地表面下約 1.4 m まで掘り下げた結果、最上層に盛土が堆積し、その下には灰黄褐色極細砂層が堆積する。そして地表面下約 0.7 m（標高約 86.6 m）まで掘り下げたところ、第 1 遺構面を確認し、杭穴と柱穴、井戸を検出した。また地表面下約 0.9 m（標高約 86.4 m）では第 2 遺構面を確認し、土坑・ピットを検出した。以下遺構ごとに概要を述べる。

#### 第 1 遺構面

杭跡 調査区の北東側で検出した。一部に切りあい関係を持つものがある。このことから、多時期にわたる可能性があるが、積極的な配置の復元はおこなっていない。SP01・03・04 では計 5 cm ほどの木杭を確認している。埋土は一様に茶褐色土となる。

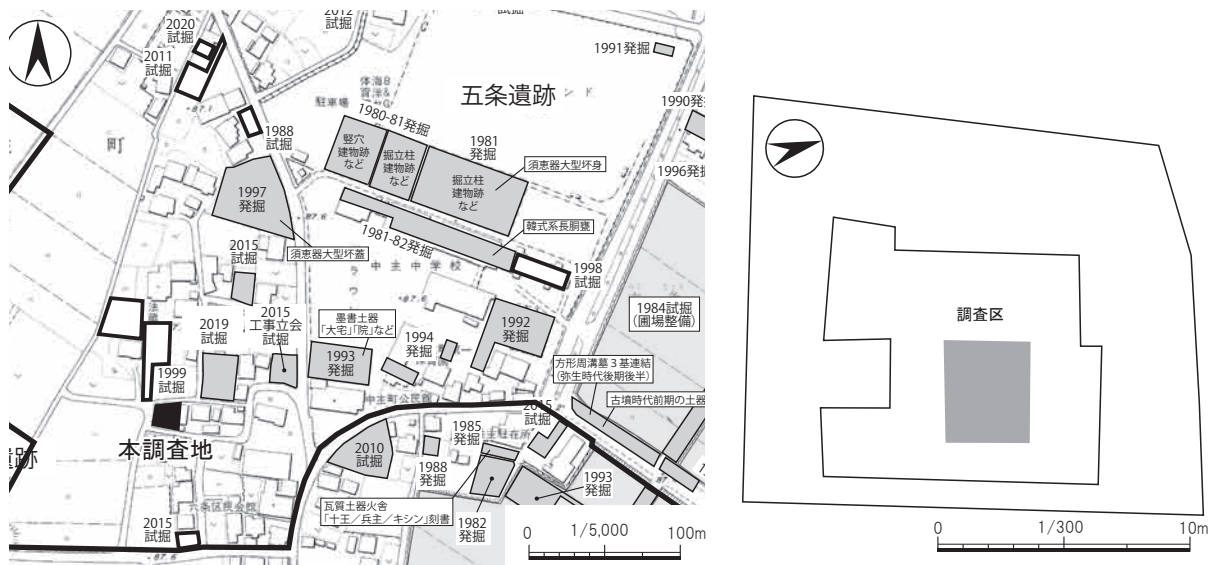


図 1 調査地位置図・調査区配置図

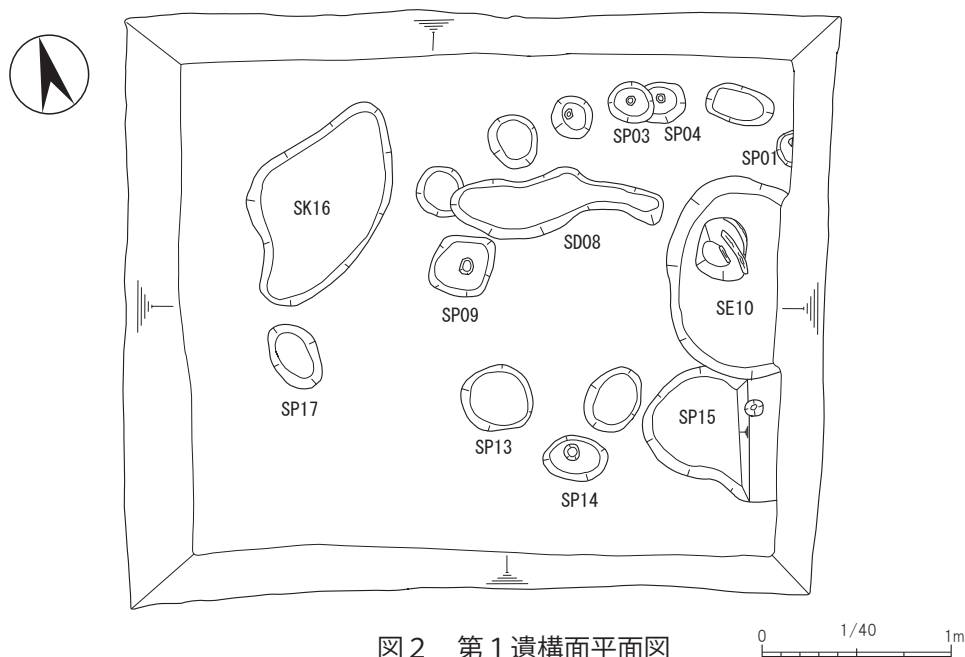


図2 第1遺構面平面図

**柱穴跡** 調査区全体で確認し、一部に切りあい関係を持つ柱穴跡があることから、多時期にわたる複数の掘立柱建物跡等を構成するものと思われる。しかし調査区が狭小なことから杭跡と同様に積極的な建物の復元はおこなっていない。SP14・15・09では柱根を確認している。SP09は掘方の平面形態が隅丸の正方形を呈す。SP14・09の柱根の先端は加工により尖っており、半打ち込み式と想定される。SP15の柱根は径が13cmほどと比較的大きく、根入れは10cmほどであった。

**SE10** 調査区の東側に位置する井戸である。南北約1.0mで楕円形を呈し、調査区の東側にさらに広がるものと思われる。深さは約0.6mを測る。SE10では径約30cmを測る曲物の残欠を確認し、当初は井筒・井側に数段の円形曲物筒を据える構造が復元できる。遺物は土師器の皿等が出土した。細片ではあるが焙烙も確認できたことから機能年代としては15～16世紀と考えている。

## 第2遺構面

**SK20** 平面形状が楕円形を測る土坑で、幅1.0m以上、深さ0.25mを測る。埋土は灰色シルト層が堆積する。SK20からは土師器の皿【図5-3】が伏せた状態で出土した。ほぼ完形であり形状から10～11世紀の所産であると判断される。遺構の性格は定かではない。

第2遺構面の遺構完掘後、さらにその後地表面下約1.4mまで下層確認を行ったが13層以下は礫を多く含む砂礫層が堆積しており、遺物も確認できなくなったため埋戻しを行った。

## 遺物

調査区からは遺物整理コンテナで3箱分の遺物が出土した。このうち9点において図を掲載しており、以下で出土遺構ごとに概要を述べていく。

1は土師器の小皿である。SE10から出土した。出土位置から曲物の中にあっただと思われ、井戸の機能年代を示すと思われる。口縁端部は尖る形状となる。2は焙烙である。第1遺構面精査時に出土した。内面はナデ調整を施す。外面には煤が付着する。3は土師器の皿である。SK20から出土した。いわゆるての字状であり、口縁端部は上に引き上げる形となる。内面はナデ調整、体部外面はユビオサエ調整を施す。4は土師器の皿である。SP14の柱根取り上げるため立ち割った際出土した。柱根

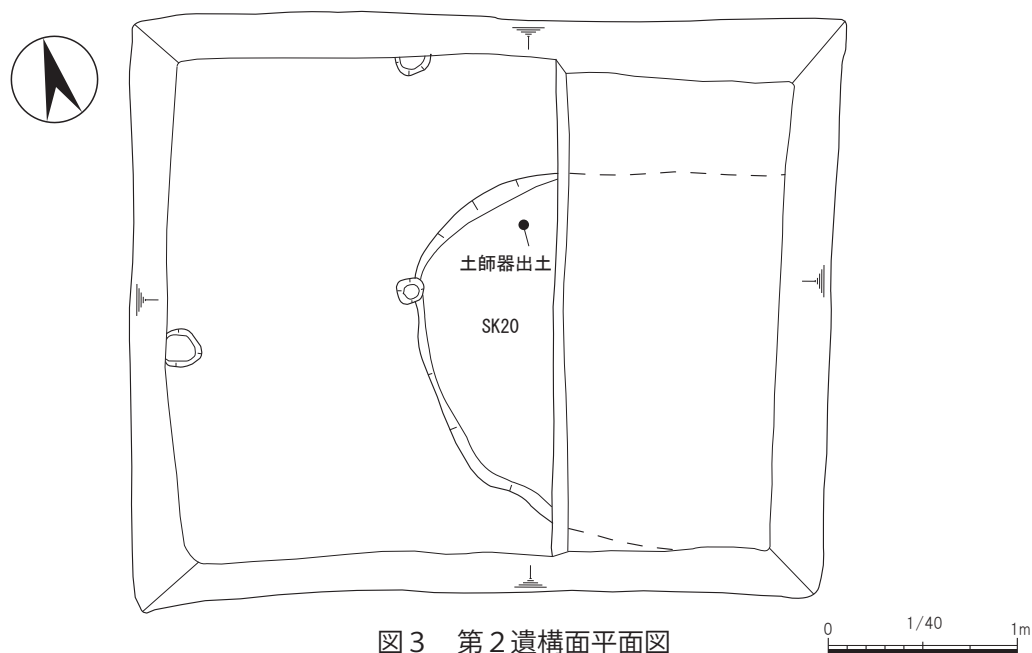
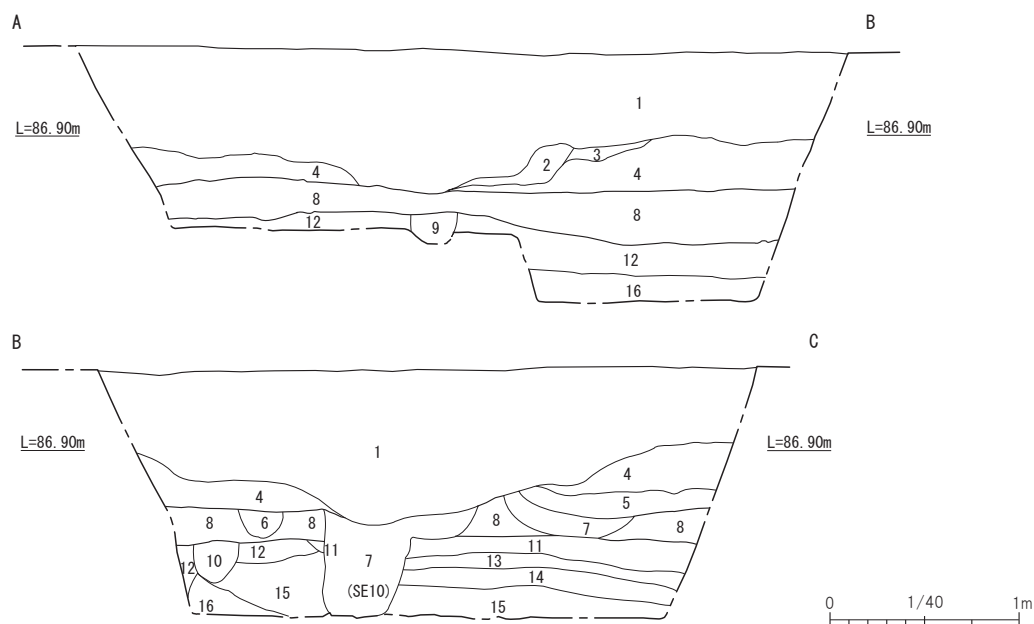


図3 第2遺構面平面図



- |                                      |                                    |
|--------------------------------------|------------------------------------|
| 1. 盛土                                | 9. 褐灰色 (10YR5/1) シルト (遺構埋土) (SP21) |
| 2. にぶい黄橙 (10YR7/2) シルト               | 10. 褐灰色 (N3/) シルト (遺構埋土)           |
| 3. 褐灰色 (10YR6/1) 極細砂                 | 11. 灰色 (5Y4/1) シルト (遺構埋土)          |
| 4. 灰黄褐色 (10YR5/2) 極細砂                | 12. 褐色 (7.5Y4/6) シルト [第2遺構面]       |
| 5. 褐灰色 (10YR6/1) 極細砂 粘性あり (包含層)      | 13. 灰色 (5Y4/1) 中粒砂                 |
| 6. 灰色 (5Y6/1) シルト (遺構埋土)             | 14. 黄褐色 (10YR5/6) 中粒砂              |
| 7. 灰色 (N5/) シルト (遺構埋土)               | 15. 灰色 (5Y9/1) 中粒砂 φ5cmの礫多く含む      |
| 8. にぶい黄橙 (10YR6/3) 極細砂 しまりあり [第1遺構面] | 16. 灰黄褐 (10YR5/2) 中粒砂 φ5cmの礫多く含む   |

図4 土層断面図



## 22. 五条遺跡

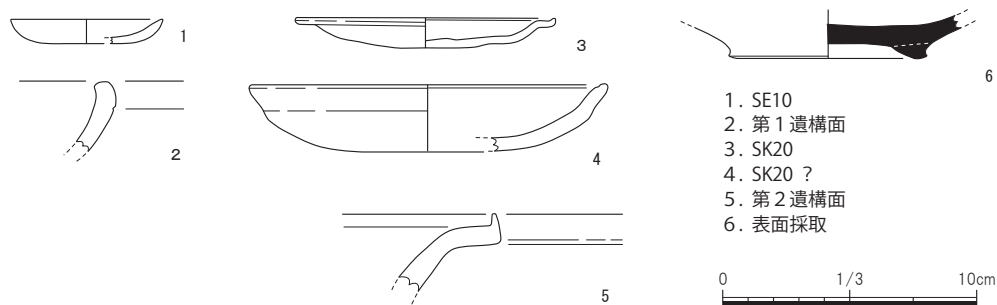


図5 出土遺物

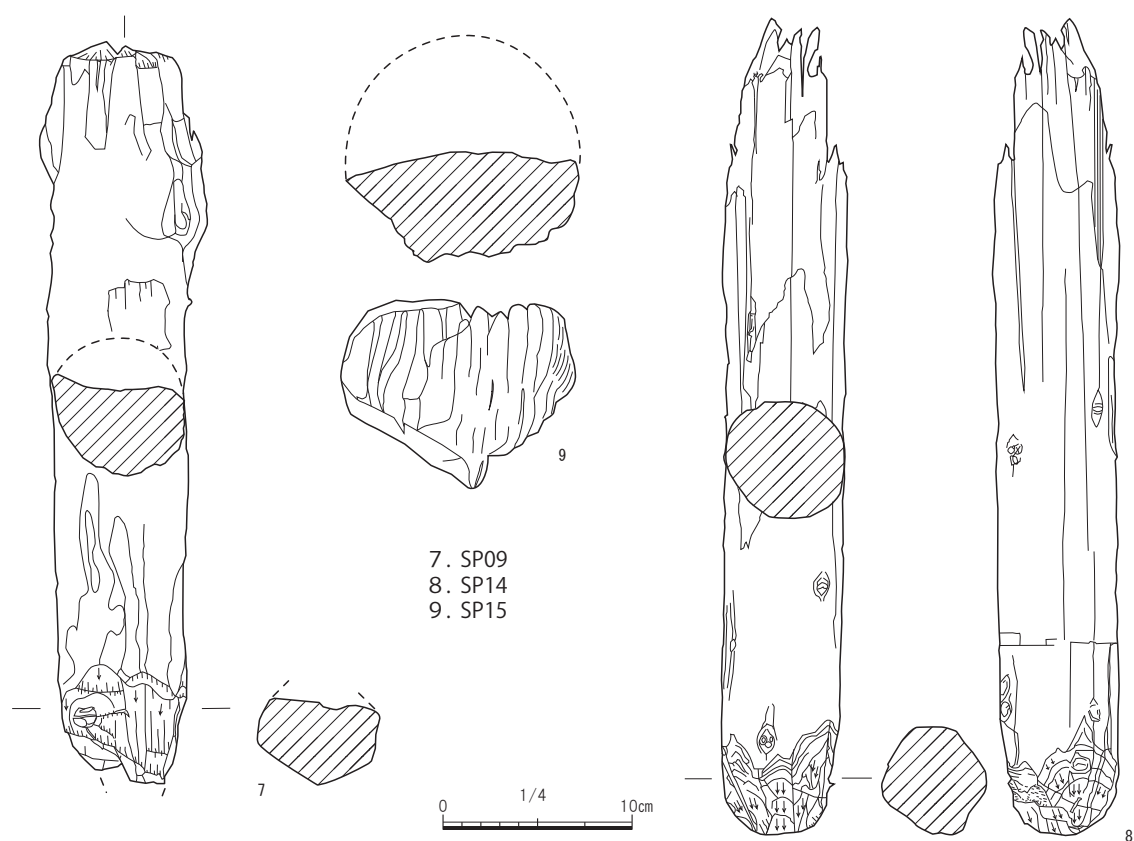


図6 木製品

は半打ち込み式のため下層まで貫入していたと考えられることから本来第2遺構面のSK20からの出土と考えられる。N系列のものと思われ、内面はナデ調整を施す。口縁端部外面はヨコナデを施し、体部外面はユビオサエ調整を施す。5は須恵器の壺の口縁部と思われる。第2遺構面精査時に出土した。口縁部端部は上に向けてつまみ出される。内外面ともにナデ調整を施す。6は調査地周辺で表面採取した須恵器の壺の高台部分である。底部は回転糸切調整が施され、高台は粗雑に貼り付けられる。内外面ともにナデ調整を施す。7～9は柱根である。7と8は幹を切り落とした芯持ち材で、先端を4～6角形に面取りし尖らせる。7は径約7.5cm、残存長38cm、8は径約7.0cm、残存長43cmを測る。9も芯持ち材で径約12.5cm、残存長約10cmを測る。9も先端を面取りし尖らせる。

また第1遺構面掘削時には中世の信楽や近世の陶器片が出土している。

### 3. まとめ

今回の調査では遺構面を二面確認した。出土遺物から第1遺構面は中世・近世、第2遺構面は10～11世紀のものと考えられる。調査区は狭小ではあるが、調査区では南西側にかけて遺構の密度は低調となる。本調査地の北西側や南側の試掘調査では遺構を確認できておらず<sup>(2)</sup>、本調査地から西・南側になるにつれ集落の縁辺部になると思われる。

なお今回の調査では地表面下約0.9 m以下は砂礫層が堆積しており、古代に遡る遺構は確認されなかった。しかし本調査地周辺から表採品として須恵器の甕等が見つかったため本調査地周辺には古代の遺構が存在することが予想され、今後周辺の調査歴のさらなる蓄積が期待される。

(渡邊)

(1) 滋賀県野洲市教育委員会 2020 『令和元年度 野洲市内遺跡発掘調査年報』

(2) 滋賀県野洲市教育委員会 2016 『平成 27 年度 野洲市内遺跡発掘調査年報』

22. 五条遺跡



第1遺構面 遺構検出状況（南西から）



第1遺構面 遺構完掘状況（南西から）



第2遺構面 遺構検出状況（南西から）



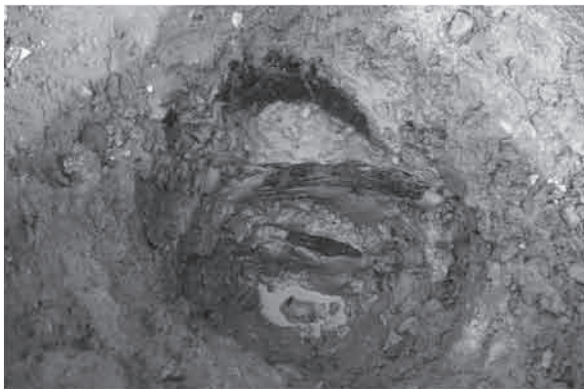
第2遺構面 遺構完掘状況（南西から）



北壁土層断面



東壁土層断面



第1遺構面 SE10



第2遺構面 SK20 遺物出土状況



## 23. 虫 生 遺 跡

調 査 地 野洲市虫生字里ノ内 200 番の一部  
調査原因 個人住宅  
調査期間 令和 5 年 5 月 15 日・16 日

### 1. 調査経過

虫生遺跡は、弥生～江戸時代の集落跡と周知されている。

調査地は虫生遺跡のほぼ中央に位置する。調査は個人住宅建設に伴うものである。建物建築範囲に調査区を設定し、試掘調査を実施した。周辺の既往の調査としては、平成 23 年（2011）に南西側約 70 m 地点で調査が行われ、多数の柱穴を確認している<sup>(1)</sup>。遺物としては中世の所産と考えられる土師器等が出土している。

現地での調査は令和 5 年 5 月 15 日・16 日に行った。

### 2. 調査成果

調査は建物建築範囲に約 15.0m<sup>2</sup>の調査区を設定し、試掘調査を実施した。

地表面下約 0.9 m（標高 87.0 m）まで掘り下げたところ明黄褐色粘土層上面で溝とピットを検出したため可能な限り調査区を拡大し調査を行った。

遺構はピット・溝を検出した。以下で概要を報告する。

#### SB01

SP10・04 では建物の礎盤石を確認した。SP10・04 は径 0.5 ～ 0.3 m ほどで平面形状は円形を呈す。深さは 0.2 m を測り間隔は 2.0 m を測る。礎盤石は 2 石とも径 0.2 m を測る人頭大の自然石で上部が被熱していた。なお周辺も含めて炭化材は確認できていない。調査区が狭小なこともあり建物の配列は復元しえなかった。建物は SP10 の切りあい関係から SD01 に後出しており、14 世紀の遺構ととらえておきたい。SP04 からは土師器の細片や播鉢片が出土したが実測には至らなかった。

#### SD01

SD01 は調査区の西側で検出した、南西から北東にかけて延びる素掘り溝で、溝の肩が確認できる

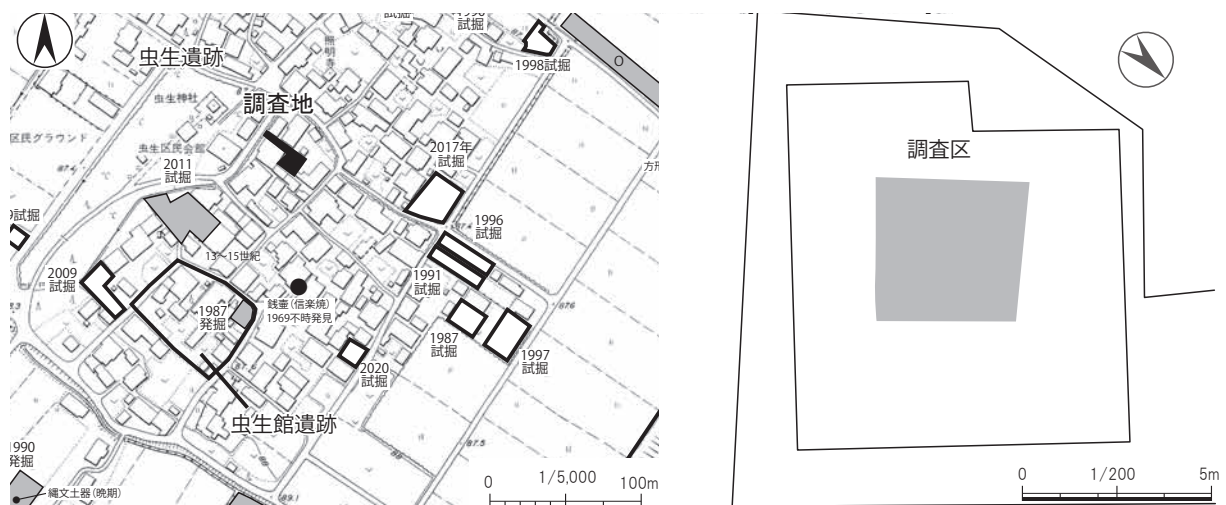
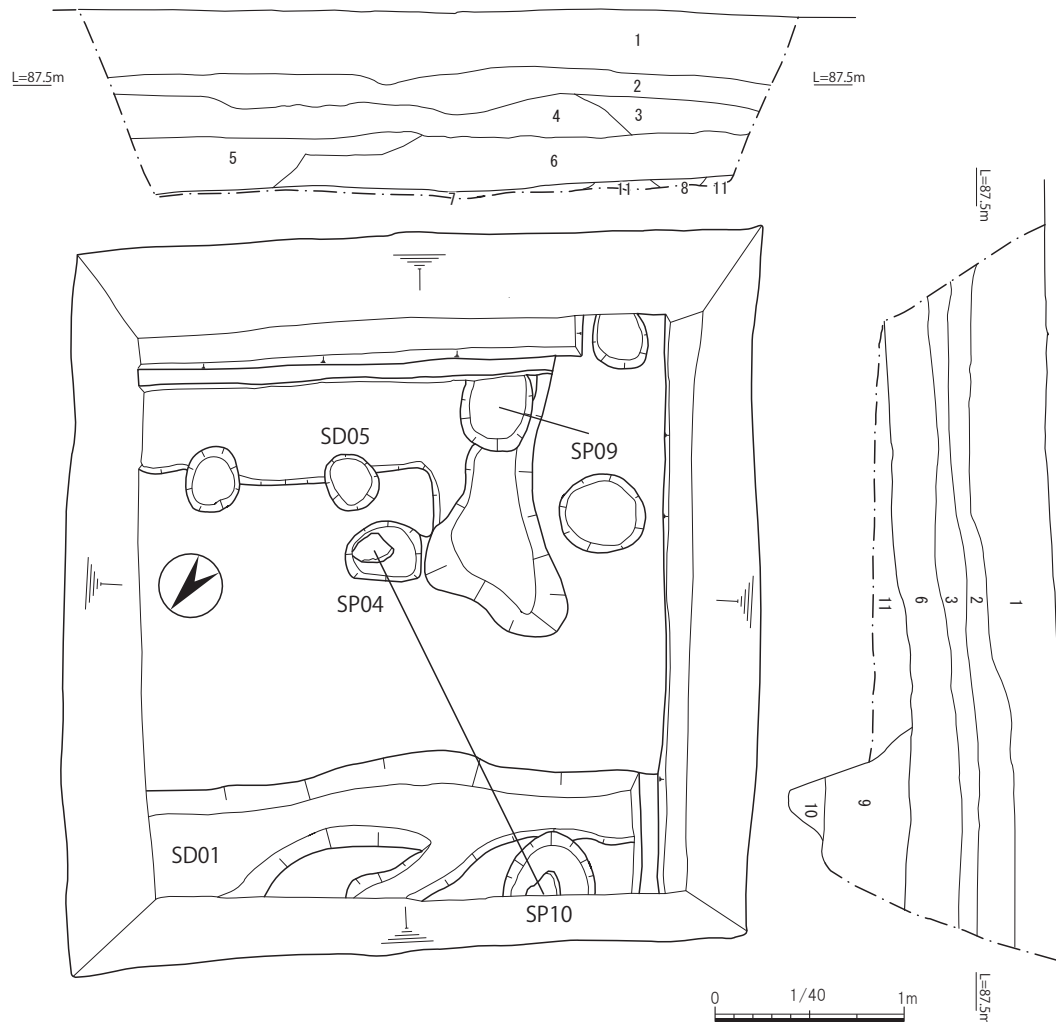


図 1 調査地位置図・調査区配置図

## 23. 虫生遺跡

南東側では上幅 1.0 m、深さ約 0.6 mを測る。底部レベルは東西比 0.1 mほどで南西に向かってやや傾斜する。埋土としては黄灰色粘土層、灰色粘土層が堆積する。SD01 の上層・下層からは 12 世紀後半～14 世紀前半の黒色土器や土師器等の遺物が多く出土している。14 世紀前半までの間に埋没したと考えられる。



- |                                  |                                     |
|----------------------------------|-------------------------------------|
| 1. 黄灰色 (2.5Y 4/1) 極細砂 粘性あり (耕作土) | 7. 灰色 (5Y 4/1) シルト φ~3cm垂円礫含む しまりあり |
| 2. 暗黄灰色 (2.5Y 4/2) 極細砂           | 8. 灰色 (5Y 4/1) シルト                  |
| 3. 灰色 (5Y 5/1) 細砂~極細砂 遺物含む       | 9. 黄灰色 (2.5Y 4/1) 粘土 (SD01、上層)      |
| 4. 灰色 (5Y 6/1) 細砂                | 10. 灰色 (5Y 5/1) 粘土 (SD01、下層)        |
| 5. 黄灰色 (2.5Y 5/1) 細砂             | 11. 明黄褐色 (10YR 7/6) 粘土 しまりあり (遺構面)  |
| 6. 灰色 (7.5Y 4/1) シルト (包含層)       |                                     |

図2 調査区平面図

## 3. 遺物

調査区からは遺物コンテナ 3 箱分の遺物が出土した。以下出土遺構ごとに 51 点について報告する【図 3・4】。

SD01・上層 1～4 は土師器の皿である。13 世紀中～後半のもので、1 と 4 は口縁部外面に強いヨコナデを施す。3 は口縁の上端部が上方に突出し、断面が三角形を呈する。5～12 は黒色土器の椀である。5、6 は高台で、6 は断面四角形となる。7 は断面三角形の高台を貼り付ける底部から、体部が内湾しながら口縁部に続く形態で、口縁部内面は横方向、底部から口縁部内面にかけて放射状の

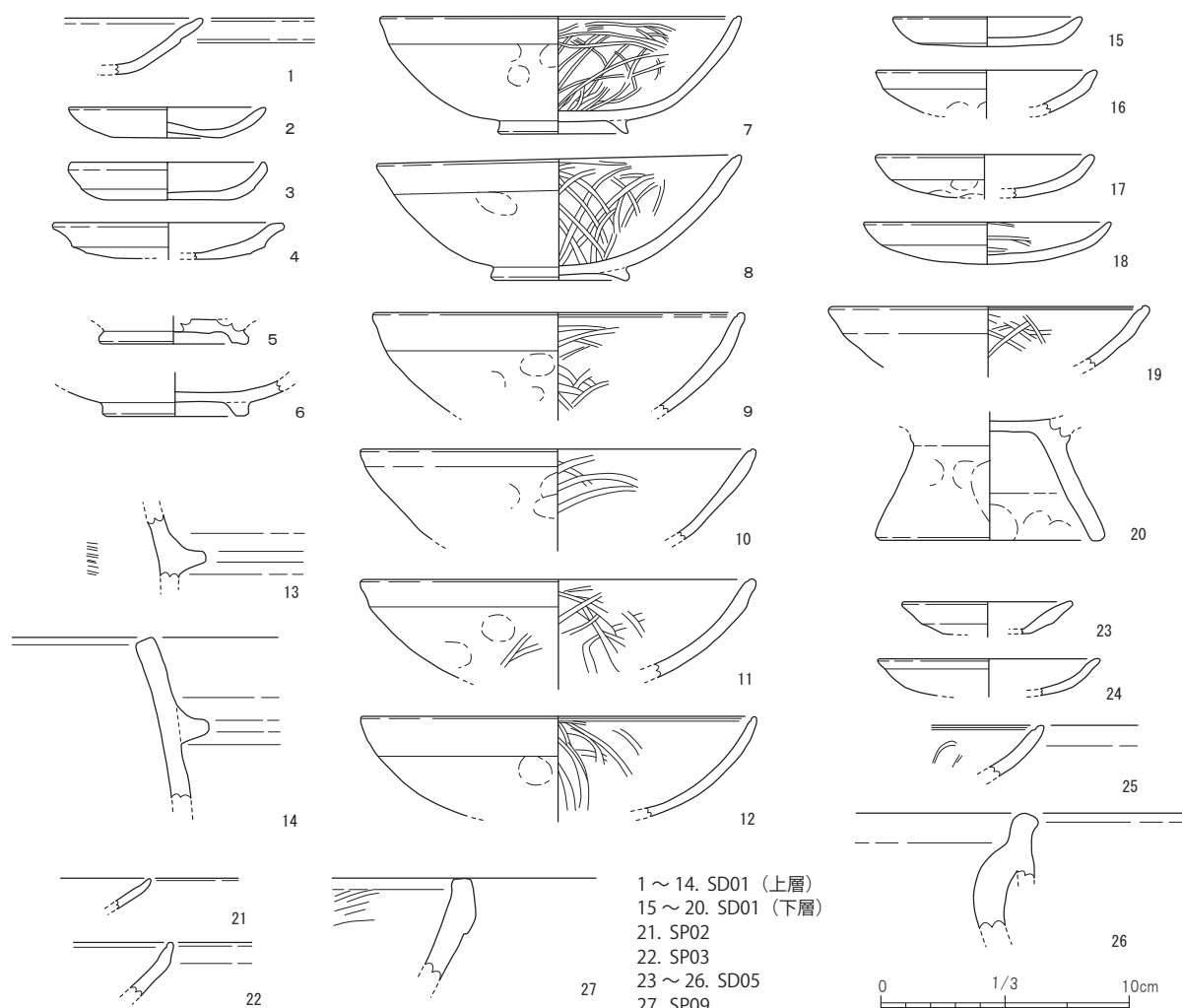


図3 出土遺物①

ヘラミガキを施す。7・8とともに摩耗のため体部外面のヘラミガキは認められない。12は器壁が薄い。13・14は瓦質の釜である。13・14ともにやや軟質の焼成である。13は外面に煤が付着する。

#### SD01・下層

15～17は土師器の皿である。16は口縁部外面に強いヨコナデを施す。17は底部から口縁部にかけてゆるく立ち上がる。18は黒色土器の皿である。内面には横方向のヘラミガキを施す。19は黒色土器の椀である。20は脚付皿の脚部である。底部内面・外面とともにユビオサエ調整を施す。

SP02 21は土師器の皿である。器壁は薄い。口縁端部はやや上につまみだされる。内面はナデ調整、体部外面はユビオサエ調整を施す。口縁端部外面はナデ調整を施す。

SP03 22は黒色土器の椀である。口縁端部外面は黒化する。

SD05 23・24は土師器の皿である。23は口縁部が肥大する。25は黒色土器の椀である。内面にはかすかにヘラ磨きを確認できる。26は信楽の甕である。口縁部下部は欠損する。

SP09 27は焙烙である。外面には煤が付着する。内面にはハケ調整がのこる。14世紀代か。

包含層 28～45は包含層からの出土である。13世紀～15世紀代の遺物が混在する。28～31は土師器の皿である。28は口縁の上端部が上方に突出し、断面が三角形を呈する。29はN系列のもの。内面はナデ調整、外面はユビオサエ調整を施す。30もN系列のもの。32は土師器の高杯である。



## 23. 虫生遺跡

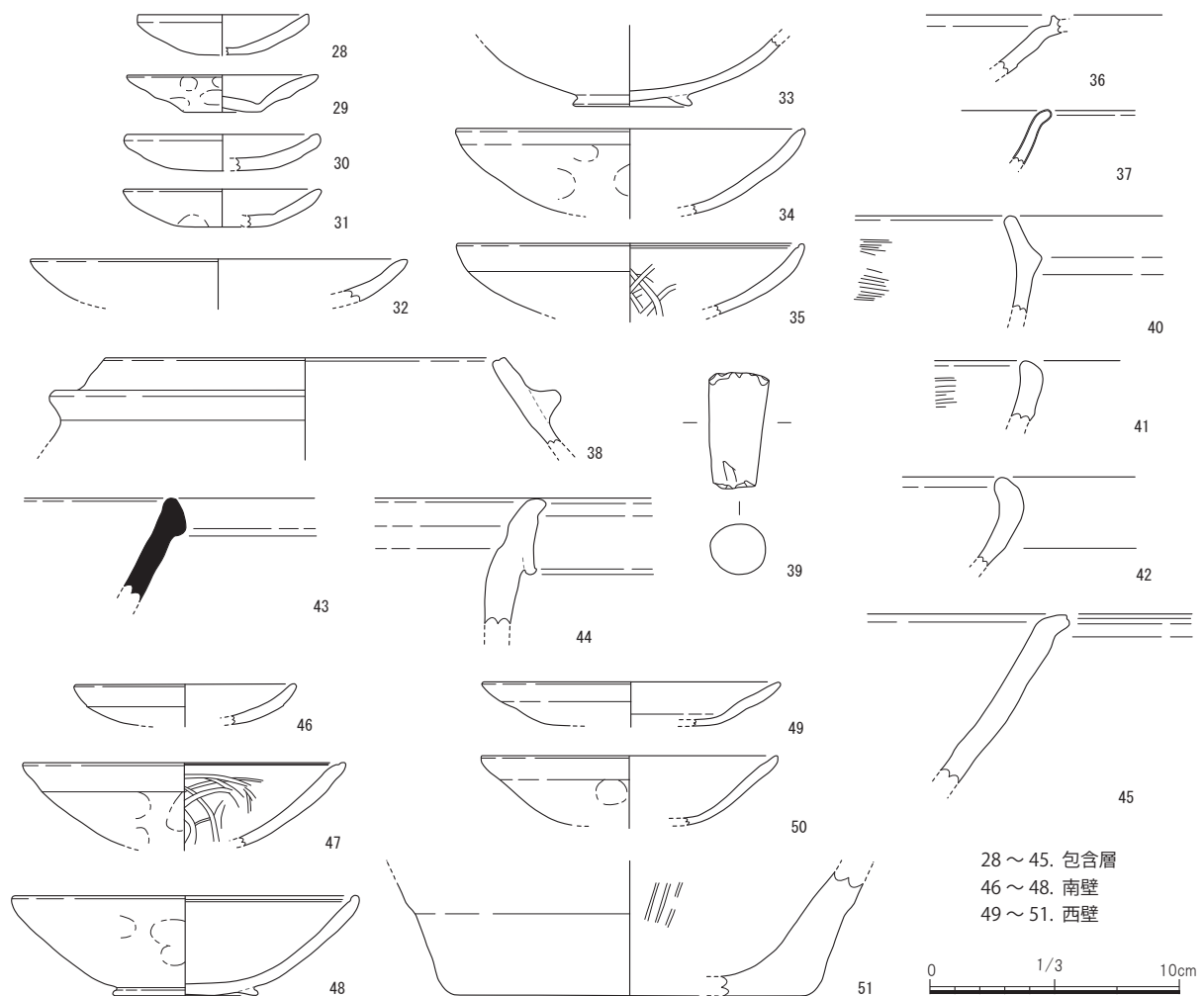


図4 出土遺物②

高台部は欠損する。33～35は黒色土器の椀である。33の口縁部は欠損する。高台はやや外に踏ん張る形となる。35は摩耗が著しいが、内面にヘラミガキ調整が確認できる。36は国産施釉陶器の折縁深皿である。古瀬戸後期様式のものである。37は青磁椀である。擦痕が確認できるが明瞭ではない。38は羽釜でイブシは良好である。39は三足鍋の脚である。断面は円形を呈す。40～42は焙烙である。40は初源期の焙烙であり14世紀中頃もの。41・42は15世紀のものと考えられる。43は東播系の須恵器の鉢である。口縁部は断面三角形を呈す。44は信楽の甕である。内面には凹線がめぐる。45は信楽の捏鉢である。口縁部は断面平行四辺形でやや水平な端面を持つ。

46～48は南壁精査時に出土した。46は土師器の皿である。47～48は黒色土器の椀。49～51は西壁精査時に出土した。49～50は土師器の皿である。49はS系列のもので平底となる。15世紀後半と思われる。50はS系列のもので15世紀代か。51は信楽の播鉢の底部である。内面には3条のクシガキによる播目が確認できる。

### 4. まとめ

本調査地では12世紀～14世紀代のピット・溝を検出した。

調査区では掘り下げ時に14～15世紀代の遺物を確認後、遺構の輪郭が明瞭でなかったためさらに掘り下げをおこない11層で明瞭な遺構面を確認している。掘り下げ時の印象では3層の段階で15世紀代の遺物の混入の割合が多かったことから3層や6層も中世後期の遺構面としてとらえられ

るのかもしれない。

現虫生集落内では発掘調査例が少なく、遺跡の詳細は判然としていないが本調査地の南西側約 70 m 地点では平成 23 年（2011）に調査が行われ標高 87.4 m ほどの灰黄褐色土層で多数の柱穴を確認している。出土遺物としても 13 世紀中頃から 15 世紀代のものであり本調査地と同一の遺構面と考えられるが、遺構面のレベルが 0.4 m ほど違うことから中世の地形としては南西側にかけ若干傾斜していたと考えられる。今回の発掘調査によって虫生の中世集落の様相がより明らかとなった。なお、令和 5 年 11 月 13 日に本調査地から西側約 10 m 地点でも試掘調査を実施しており、12 ～ 13 世紀代の溝を検出している。詳細については令和 6 年度野洲市発掘調査年報で報告予定である。

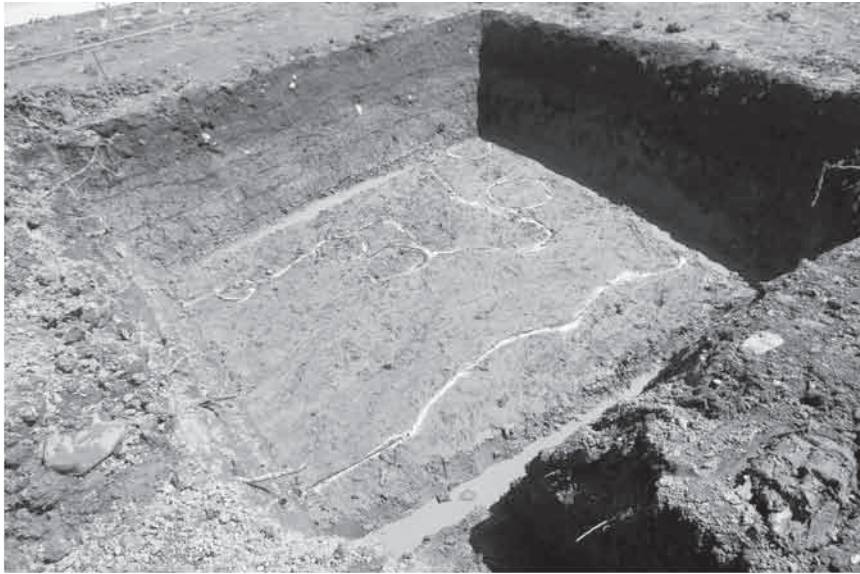
（渡邊）

（1）滋賀県野洲市教育委員会 2012 『平成二十三年度 野洲市内遺跡発掘調査年報』



調査地

## 23. 虫生遺跡



遺構検出状況（北から）



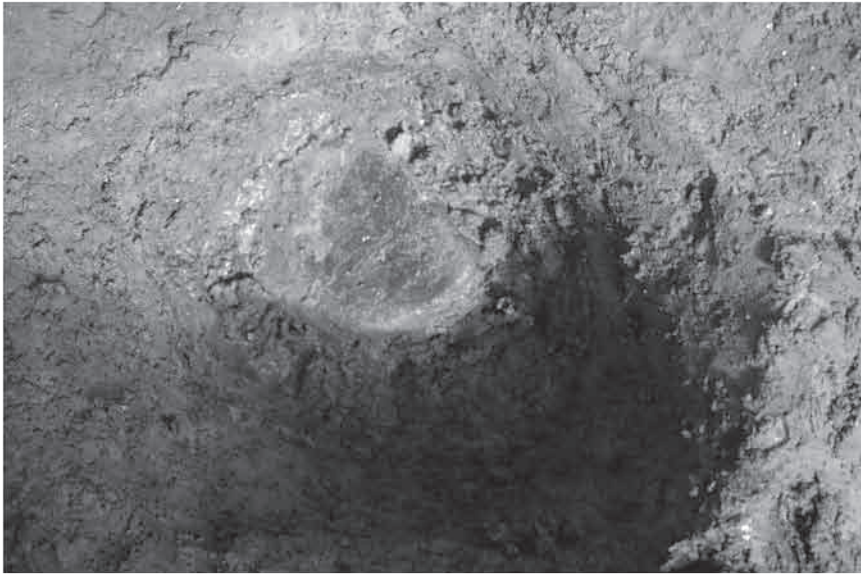
遺構完掘状況（北から）



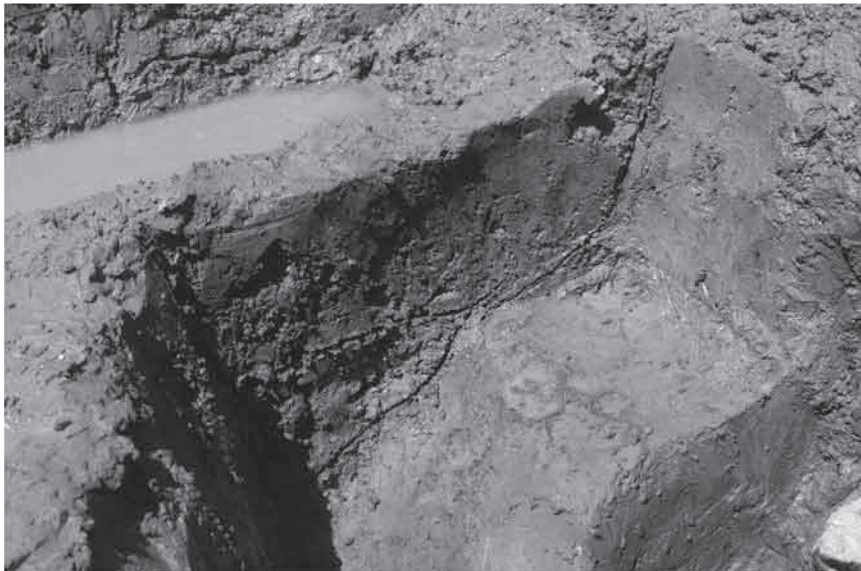
南壁土層断面（北から）



23. 虫生遺跡



SP04 礎盤石検出状況



SD01 土層断面（東から）



SD01 遺物検出状況

23. 虫生遺跡



## 24. おお しの はら にし 大 篠 原 西 遺 跡

調 査 地 おおしのはらあざはり め 野洲市大篠原字針目 3191 番 1 外 19 筆  
調査原因 工場  
調査期間 令和 5 年 6 月 7 日・8 日

### 1. 調査経過

調査地は大篠原西遺跡の南西に位置する。調査は工場建設に伴うものである。建物建築範囲に調査区を設定し、試掘調査を実施した。周辺の既往の調査としては、平成 2 年（1990）に西側約 50 m 地点で調査が行われ、耕作痕跡を示す溝状遺構とピット等を検出している<sup>(1)</sup>。また東側約 150 m 地点では令和元年度に調査が行われ、北側の調査区では遺構を確認している<sup>(2)</sup>。

なお、本調査地は平成 7 年（1995）に試掘調査を実施しているが一部現代の溝状の掘り込みを確認しただけで、それ以外に明確な遺構や遺物は確認できていない<sup>(3)</sup>。

現地での調査は令和 5 年 6 月 7 日・8 日に行った。

### 2. 調査成果

調査は建物建築範囲に 2 か所の調査区を設定し、試掘調査を実施した。なお T 1 に関して造成土が固く掘り下げに時間を要したため遺構の有無の判断が可能な範囲で調査区を狭めて調査した。T 1 の調査面積は約 12㎡、T 2 は約 28㎡である。

T 1 では最上層には造成土があり、その下には旧耕作土である灰黄色極細砂土、黄灰色中粒砂土が堆積する。そして地表面下約 1.4 m（標高約 100.2 m）で地山である浅黄色粘土層を確認した。遺構・遺物はともに確認できなかった。

T 2 では最上層に耕作土があり、その下には床土である黄灰色細砂土が堆積する。そして地表面下約 0.4 m（標高約 100.2 m）で地山である灰黄色粘土層を確認した。なお灰黄色粘土層には一部明褐色細砂が混じる。

遺構としてはピット 3 基を確認した。ピットは 3 基とも埋土は黒褐色シルト土となり深さが約 0.15 ～ 0.1 m ほどを測る浅いものである。遺物は確認できなかった。

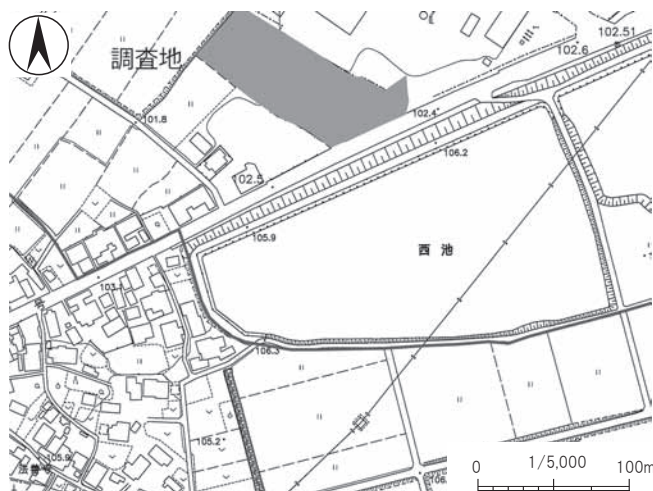


図 1 調査地位置図

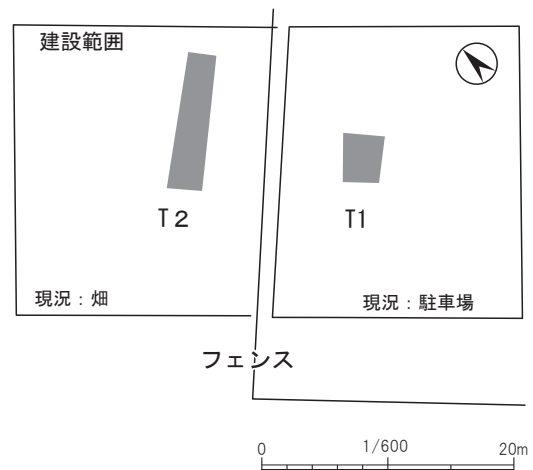
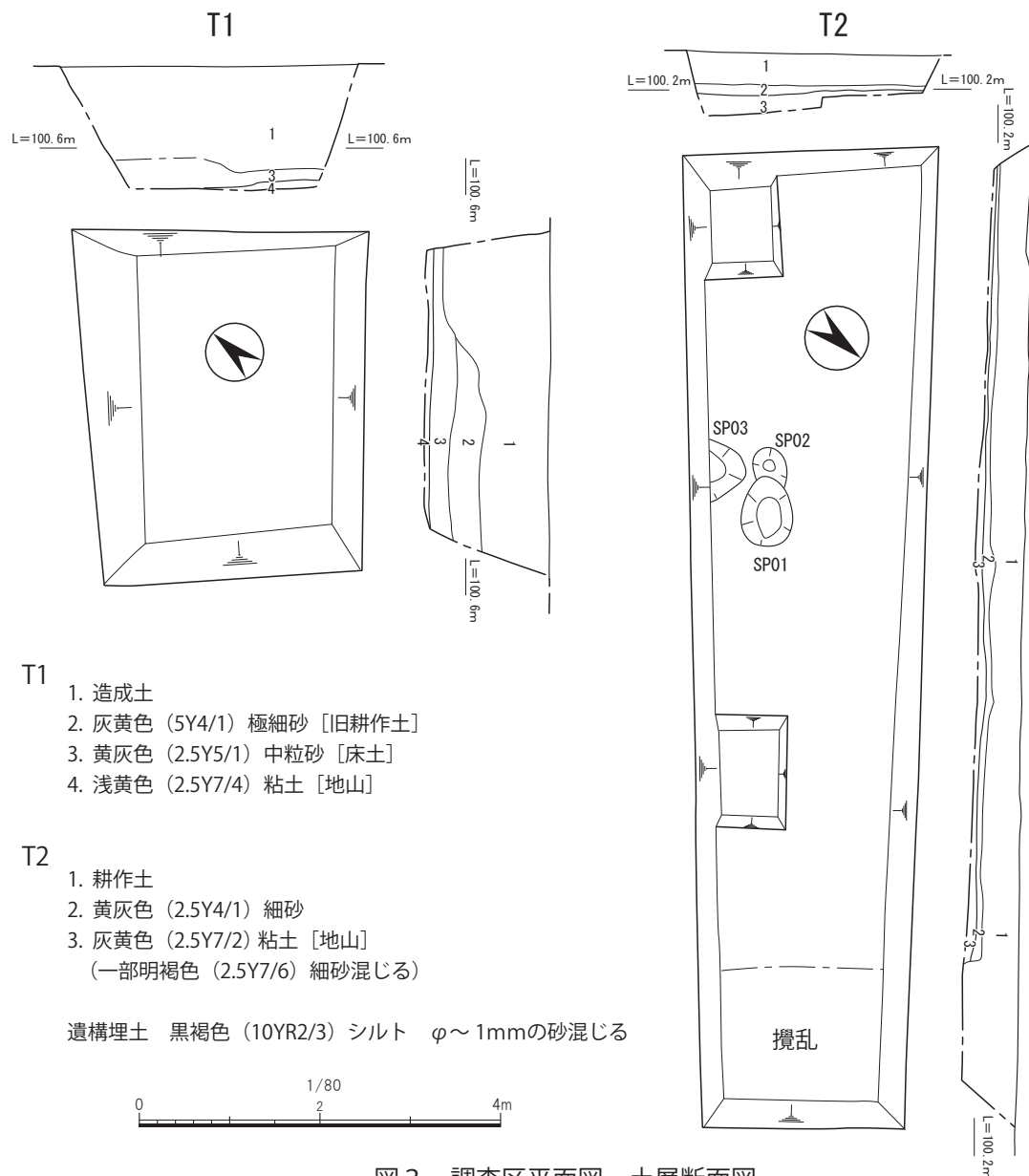


図 2 調査区配置図



## 24. 大篠原西遺跡



今回の調査では、本調査地の遺構密度が低いことが判明し本調査には至らないと判断できた。そのため記録を作成したのち埋戻しをおこなった。

### 3. まとめ

本調査地の西側の1990年調査では随所に遺構が確認されているものの検出された遺構は耕作土に伴う溝や性格不明な遺構がほとんどであった。一方北西側の1989年調査等では古代・中世の2時期にわたる掘立柱建物群が確認されている。本調査地は旧東山道沿いであるが丘陵間にある谷地形の縁辺にあたり、大篠原西遺跡の集落の中心地は丘陵部から離れた、本調査からみて北～北西側であったと想定される。

(渡邊)

- (1) 野洲町教育委員会 1991 『平成2年度 野洲町内遺跡発掘調査概要』
- (2) 滋賀県野洲市教育委員会 2020 『令和元年度 野洲市内遺跡発掘調査年報』
- (3) 野洲市教育委員会 2005 『1995年埋蔵文化財調査年報』

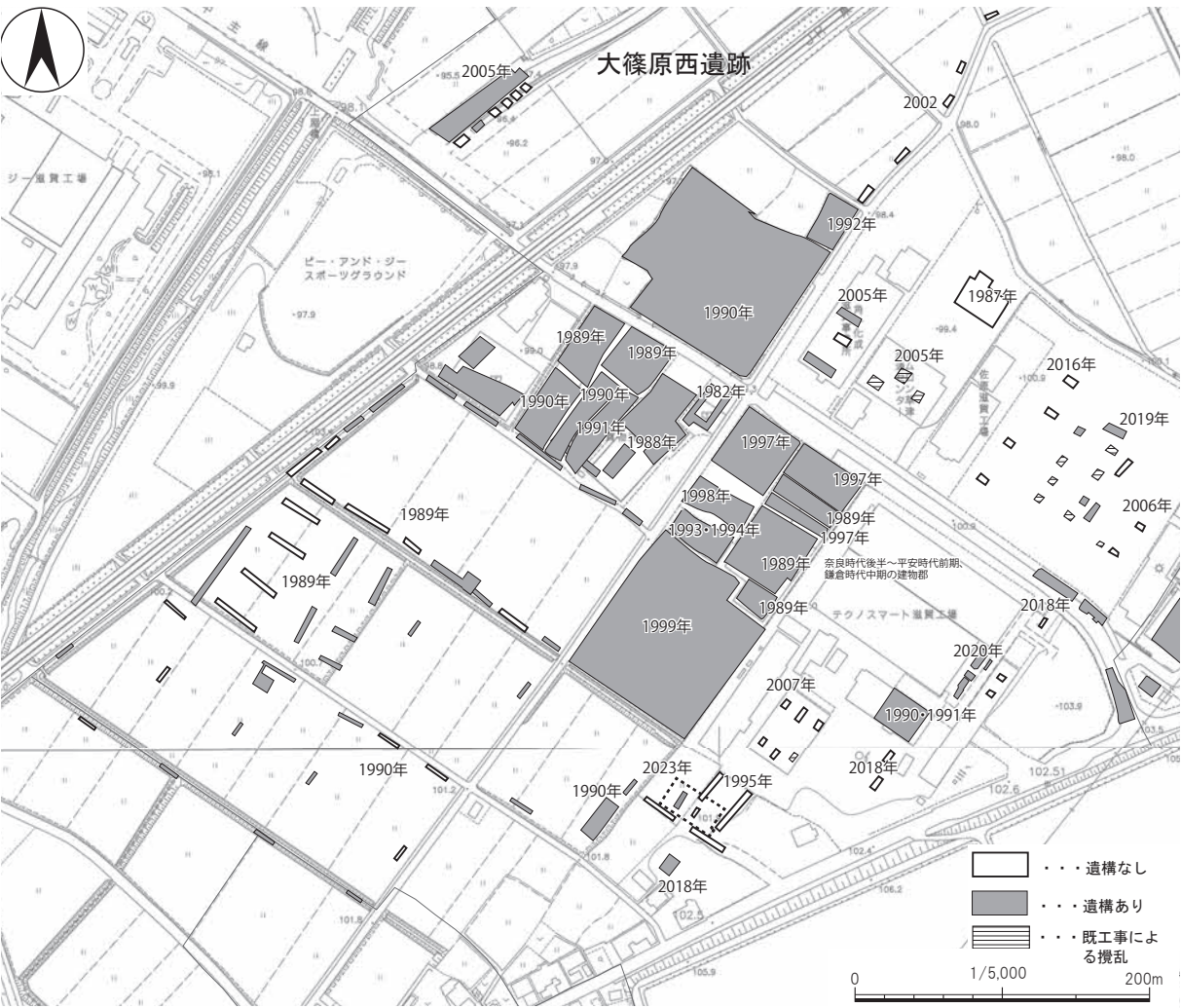


図4 大篠原西遺跡 既往の調査

## 24. 大篠原西遺跡



T 1 調査区全景（南西から）



T 1 東壁土層断面（西から）



T 1 北壁土層断面  
（南西から）



24. 大篠原西遺跡



T 2 遺構検出状況（北から）



T 2 遺構完掘前（東から）



T 2 遺構完掘後（北から）

## 24. 大篠原西遺跡



T 2 遺構完掘後（北から）



T 2 南壁土層断面（北東から）



T 2 西壁土層断面（西から）



## 25. 八 夫 遺 跡

調 査 地 野洲市<sup>やぶあざと</sup>八夫字里ノ内 1559 番 1  
調査原因 個人住宅  
調査期間 令和 5 年 6 月 16 日

### 1. 調査経過

八夫遺跡は、弥生～江戸時代の集落跡と周知されている。

調査地は八夫遺跡の北東に位置する。調査は個人住宅建設に伴うものである。建物建築範囲に調査区を設定し、試掘調査を実施した。周辺の既往の調査としては、南西側約 110 m 地点では平成 29 年（2018）に調査が行われ、近世の溝跡と思われる遺構を検出している<sup>(1)</sup>。なお平成 16 年（2004）に北西側の隣接地で調査が行われているが遺構は確認されていない<sup>(2)</sup>。

現地での調査は令和 5 年 6 月 16 日に行った。

### 2. 調査成果

調査は建物建築範囲に約 10.0m<sup>2</sup>の調査区を設定し、試掘調査を実施した。地表面下約 1.4 m（標高約 88.2 m）まで掘り下げ、灰オリーブ色粘土層上面で遺構精査を行ったが遺構・遺物とともに確認できなかった。9 層は粒度が粗く、上の方になるにつれ亜角礫粒が大きくなる逆流化層となっており、かなり強い流れの洪水が当地区を襲ったことが示唆される。

享保 3 年（1718）「江州木部八夫虫生用水悪水堤筋之絵図」（木部区有文書 1 号）では本調査地周辺で川が氾濫し一部決壊していることが確認できる。本調査地の 9 層がこの洪水堆積層だとすると 9 層より上は近世以降の土層と推測され、6 層の壁面に近世～近現代の遺物が含まれていることもそれを裏付ける。上記のことから 9 層以下の層が中世・古代の遺構面となる可能性があったため一部立ち割ったところ地表面下約 2.0 m で再び灰色シルト層が確認できた。しかし掘削深度と湧水の影響、また遺物が確認できなかったことから埋戻しを行った。なお本調査地はグライ化していることから近現代に至るまで低湿地のような様相を呈していたと考えられる。

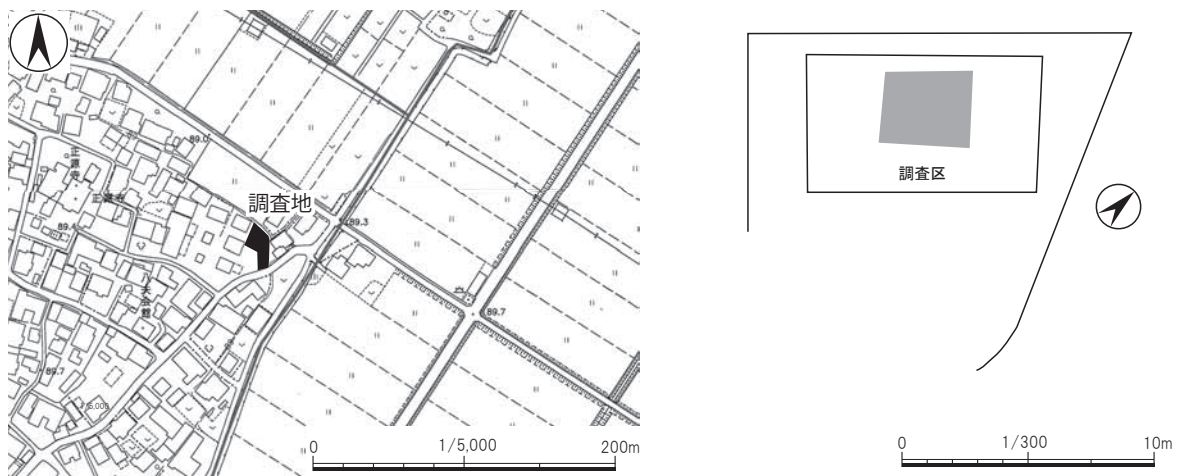


図 1 調査地位置図・調査区配置図



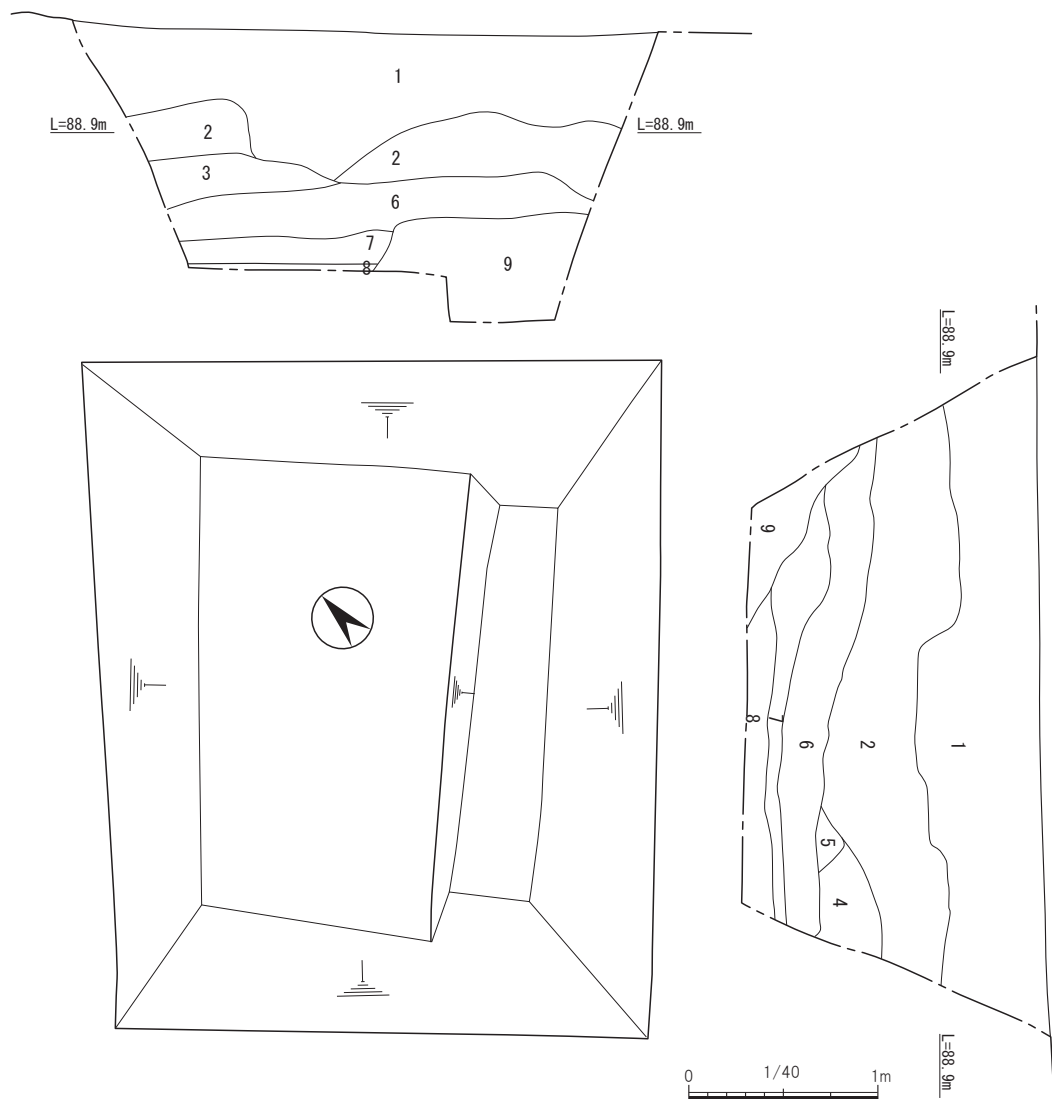
## 25. 八夫遺跡

### 3. まとめ

本調査地は今回の調査成果と近隣の調査事例から考えると八夫遺跡の集落の縁辺部と想定される。

(渡邊)

- (1) 滋賀県野洲市教育委員会 2018 『平成 29 年度 野洲市内遺跡発掘調査年報』
- (2) 滋賀県野洲市教育委員会 2005 『平成 16 年度 野洲市内遺跡発掘調査概要Ⅱ』



- |                                 |  |
|---------------------------------|--|
| 1. 造成 土                         | 6. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 粗粒シルト               |
| 2. 灰色 (10YR5/1) 粗粒シルト (現代の遺物含む) | 7. 灰色 (7.5Y6/1) 中粒シルト                    |
| 3. 灰色 (7.5Y4/1) 粗粒シルト           | 8. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 粘土 [近世以降の遺構面?]         |
| 4. 灰白色 (10Y6/1) 粘土              | 9. 灰色 (7.5Y4/1) 細砂 φ~5cmの亜角礫多く含む [洪水堆積層] |
| 5. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 細砂         |  |

図2 調査区平面図・土層断面図

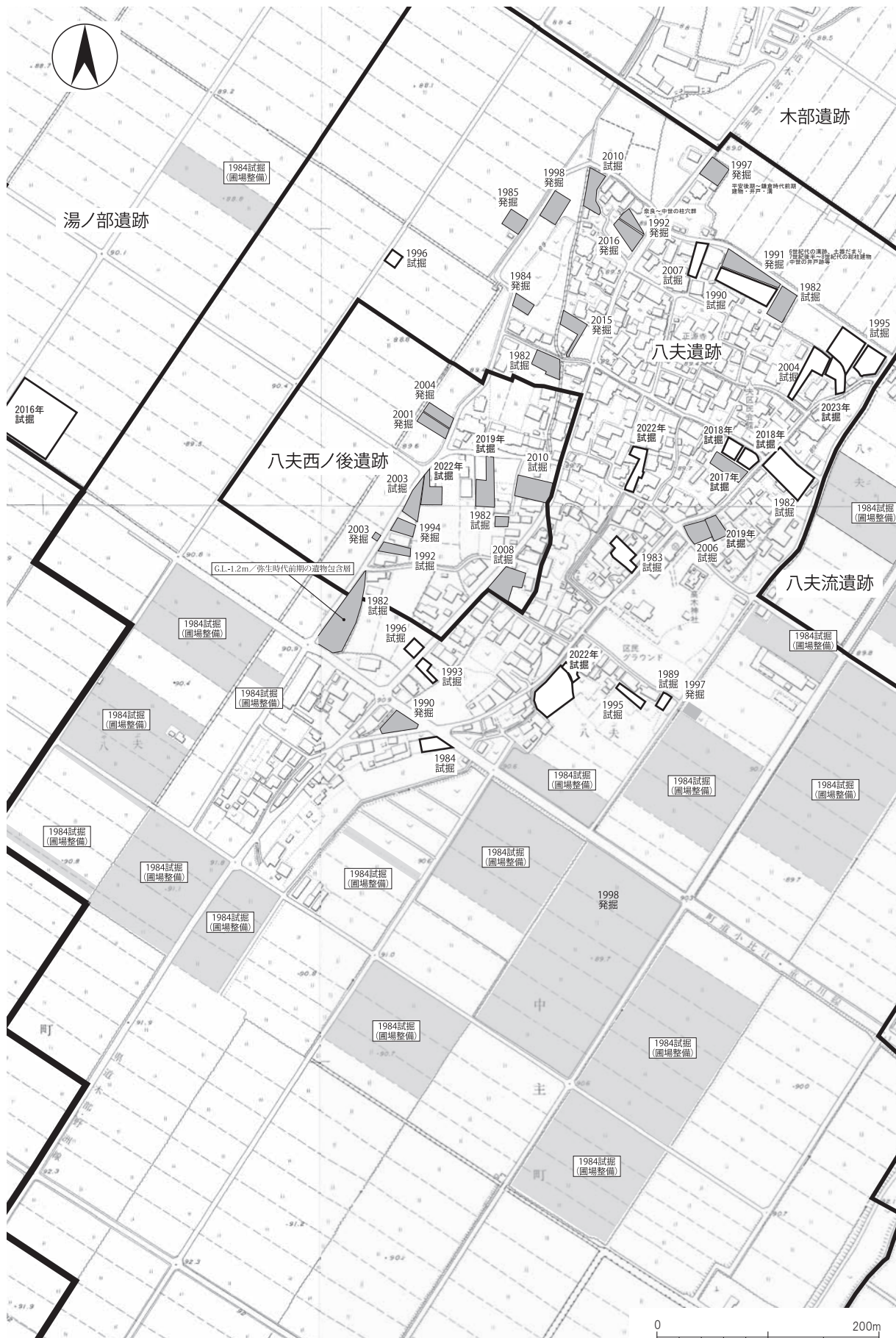


図3 既往の調査

25. 八夫遺跡



享保3年(1718)「江州木部  
八夫虫生水悪水堤筋之絵図」  
(木部区有文書1号)



調査区(南西から)



25. 八夫遺跡



北側土層断面（南西から）



9層（南西から）



下層確認

## 26. にしがわら 西河原遺跡

調査地 野洲市西河原字里ノ内 85 番 3、86 番 2  
調査原因 個人住宅  
調査期間 令和 5 年 6 月 23 日～ 26 日

### 1. 調査経過

西河原遺跡は、弥生～江戸時代の集落跡と周知されている。

調査地は西河原遺跡の北東に位置する。調査は個人住宅建設に伴うものである。建物建築範囲に調査区を設定し、試掘調査を実施した。周辺の隣接した既往の調査としては、南東側の平成 3 年（1991）に行われた調査では遺構面を 3 面確認しており、第 2 遺構面の溝では郡符木簡や墨書土器が出土している<sup>(1)</sup>。また平成 15 年（2003）に行われた調査では<sup>(2)</sup>遺構面を 3 面確認し、第 3 遺構面の溝からは馬骨、和同開珎等が出土している。北側の平成 16 年（2004）に行われた調査では遺構面が 2 面確認されており、第 2 遺構面の土坑からは 9 世紀後半を中心とした遺物とともに墨書土器等も出土している<sup>(3)</sup>。

これらのことから本調査地でも複数の遺構面が確認されることが予想されるとともに平成 3 年調査・平成 15 年調査で確認された木簡や和同開珎等が出土した溝の延長上に本調査が存在することから多くの遺物が出土することが予想された。現地での調査は令和 5 年 6 月 23 日～ 26 日に行った。

### 2. 調査成果

調査は建物建築範囲に約 16.0m<sup>2</sup>の調査区を設定し、試掘調査を実施した。地表面下約 0.4 m（標高約 87.2 m）まで掘り下げたところにぶい黄橙色極細砂土上面でピットを確認した。土師器・黒色土器等の出土遺物から 12～13 世紀の遺構面と思われる。狭小な調査区により建物の配置は復元しえないが南側にかけて遺構密度は高くなるようである。

図面を作成した後、第 2 遺構面を確認するためさらに掘り下げを行ったところ 10 層からは黒色土器片が出土し、2 時期にわたる 12～13 世紀の遺構面の存在が示唆された。

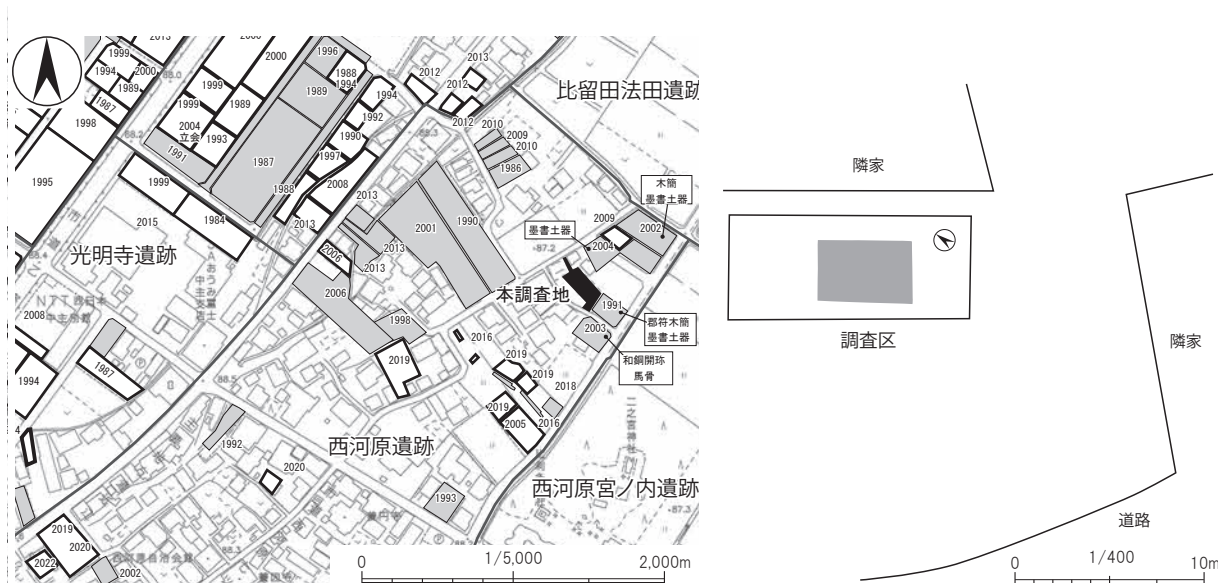


図 1 調査地位置図・調査区配置図

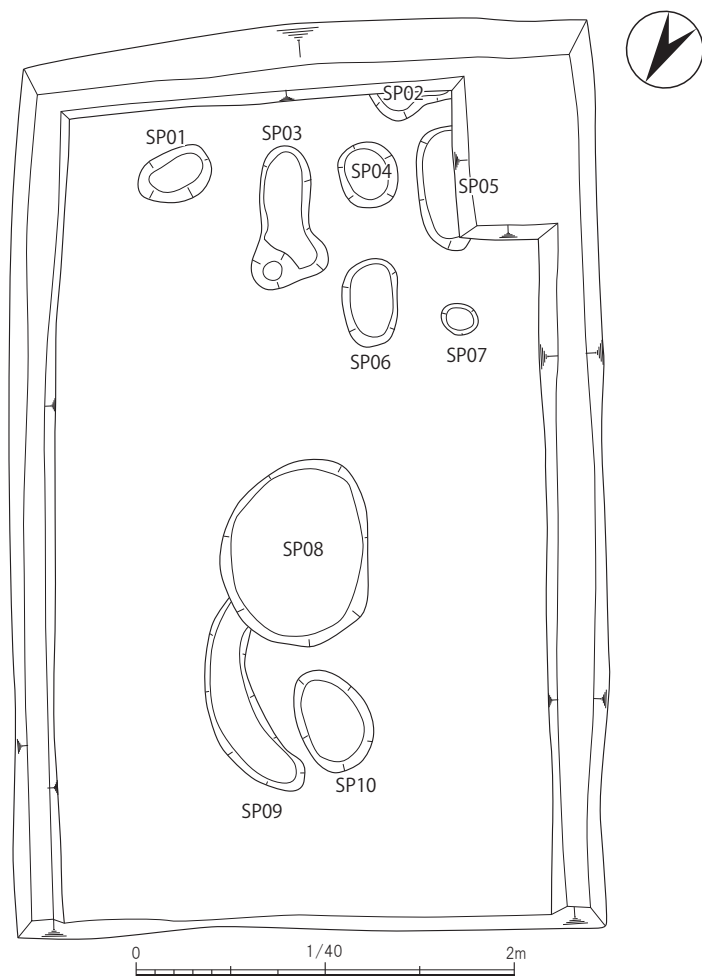


図2 第1遺構面 平面図

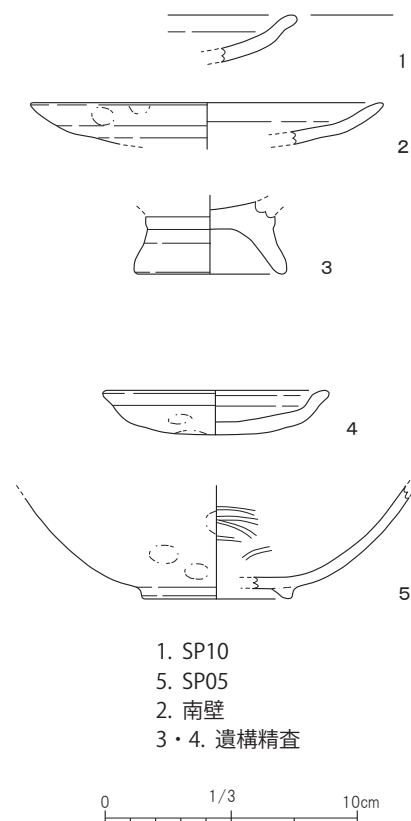


図3 出土遺物

その後、古代の遺構面を確認するため掘り下げを行い比較的土層が安定していた標高 86.6 m 前後の灰色粘土層上面（15 層）で遺構精査を行ったが遺構は確認できなかった。なお、本調査地から北側 20 m 地点で行われた西河原第 12 次調査では第 2 遺構面を標高 86.6 m 前後の灰色極細砂～粘土層として遺構を検出しており、土層断面の観察からも 15 層が古代の遺構面として比定されようか。

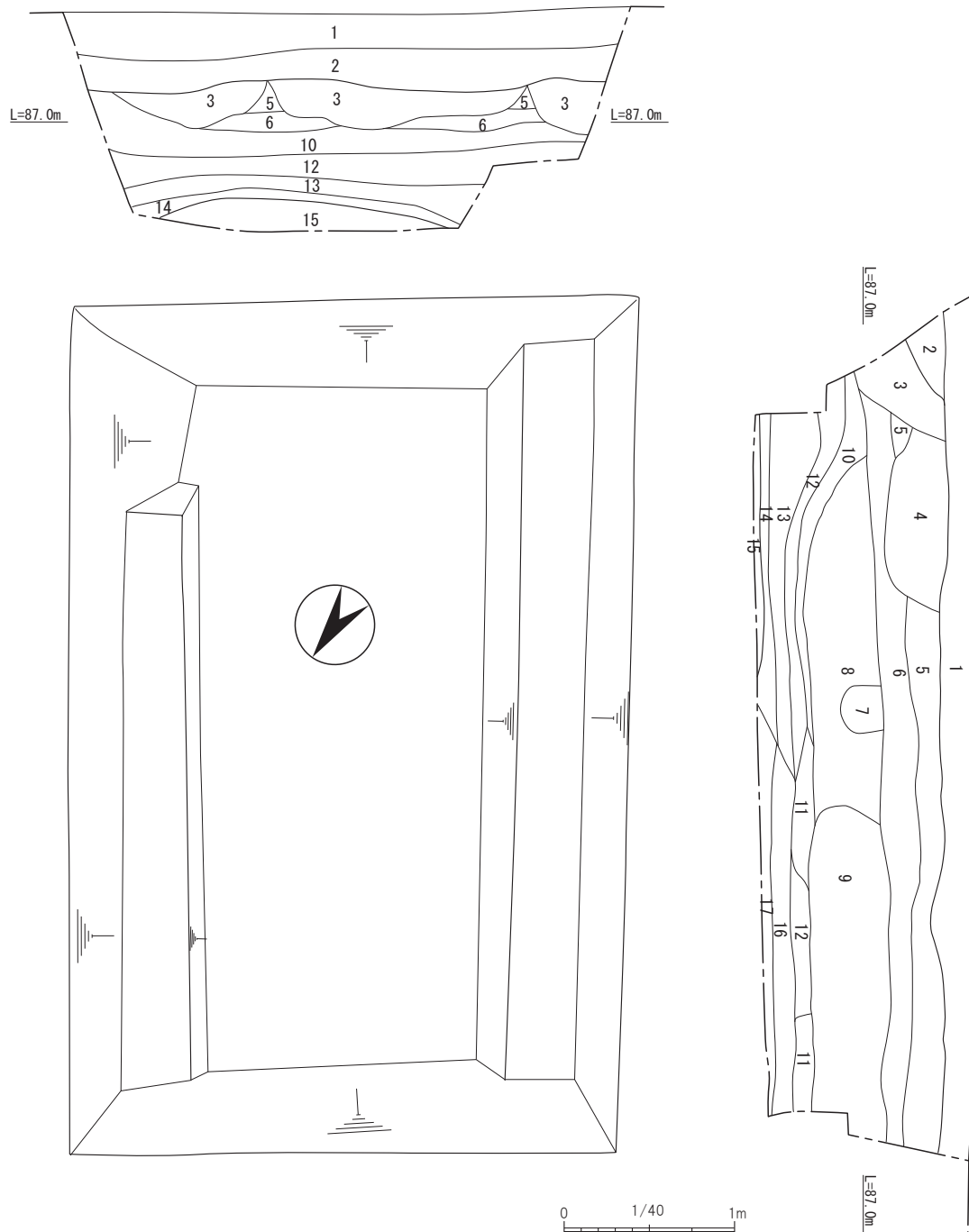
土層堆積状況から 10 層以下は細砂層やシルト層等が互層になっており本調査地は何度か緩やかな流れの滞水状態にみまわれたと思われる。また 9 層は粗粒砂～極粗粒砂が基質であり逆級化層理から北側からの洪水堆積がみまわれたことが示唆される。12 層以下からは遺物は出土せず、包含層からも古代以前に遡る遺物は出土しなかった。

### 3. 遺物

調査区から出土した遺物は第 1 遺構面・またはそれに伴う遺構からの出土である。1 は土師器の皿である。口縁端部外面は強いヨコナデを施し、底部はユビオサエ調整を施す。内面はナデ調整を施す。SP10 から出土した。2 は土師器の皿である。正円とはならずややいびつな形となる。内面はナデ調整、口縁端部外面は弱いヨコナデを施す。底部はユビオサエ調整を施す。南壁精査時に出土した。3 は土師器の台付皿である。全体的に摩耗が著しく調整等は定かでない。遺構精査時に出土した。4 は黒色土器の皿である。底部はユビオサエ調整を施し、口縁端部外面はヨコナデを施す。内面はナデ調整を施す。内外面とともに黒化する。遺構面精査時に出土した。5 は黒色土器の椀である。SP05 から出土した。口縁部は欠損する。外面はユビオサエ調整を施し、内面は螺旋状のミガキが施される。



## 26. 西河原遺跡



- |                                      |                        |
|--------------------------------------|------------------------|
| 1. 耕作土                               | 10. 青灰色 (5BG6/1) 細砂    |
| 2. にぶい橙色 (7.5YR6/4) 極細砂              | 11. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト |
| 3. 黒褐色 (10YR4/1) 極細砂[遺構埋土]           | 12. 灰色 (5Y4/1) 細砂      |
| 4. 黒褐色 (10YR3/2) 極細砂                 | 13. 灰オリーブ色 (5Y5/3) 細砂  |
| 5. にぶい黄橙色 (10YR6/3) 極細砂 しまりあり[第1遺構面] | 14. 灰色 (5Y4/1) シルト     |
| 6. にぶい黄橙色 (10YR6/4) 極細砂 しまりあり        | 15. 灰色 (N5/ ) 粘土       |
| 7. 暗褐色 (10YR3/3) 極細砂                 | 16. 黒褐色 (2.5Y3/1) 細砂   |
| 8. にぶい黄橙色 (10YR6/4) シルト              | 17. 灰色 (N6/ ) 細砂       |
| 9. 褐色 (10YR4/4) 粗粒砂～極粗粒砂             |                        |

図4 平面図・土層断面図

## 4. まとめ

周辺の調査例を見ると南東側の西河原遺跡第3次調査・11次調査等では古代の溝が検出され、墨書土器や木簡などが出土している。今回の調査は溝の延長が調査区にかかることが予想されたが溝は

検出できず、またそのことから本調査区は溝より西側に位置していると思われる。周辺の調査や今回の調査を踏まえると、この溝の西側は遺構が希薄であることから溝が古代西河原集落の西限にあたると思われ、溝は集落を区画する区画溝としての機能が想定される。

本調査地は西河原遺跡の中世集落の一角と想定される。

(渡邊)

- (1) 中主町教育委員会 1993 『平成3年度 中主町内遺跡発掘調査年報』
- (2) 滋賀県野洲郡中主町教育委員会 2004 『平成15年度 中主町内遺跡発掘調査年報』
- (3) 滋賀県野洲市教育委員会 2005 『平成16年度 野洲市内遺跡発掘調査概要Ⅱ』



調査前



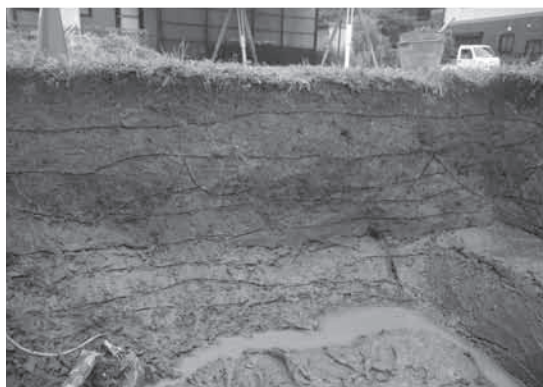
第1遺構面 遺構検出状況（北から）



第1遺構面 遺構完掘状況（北から）



西壁土層断面（北から）



南壁土層断面（北西から）



調査区（東から）

– 94 –



## 27. 比留田遺跡

調査地 野洲市比留田字重高 964 番 1、965 番 1  
調査原因 個人住宅  
調査期間 令和 5 年 8 月 1 日

### 1. 調査経過

比留田遺跡は、弥生～江戸時代の集落跡と周知されている。

調査地は比留田遺跡の北西側に位置する。調査は個人住宅建設に伴うものである。建物建築範囲に調査区を設定し、試掘調査を実施した。周辺の既往の調査としては、北東側約 70 m 地点では平成 18 年（2006）に調査が行われ、9 世紀代の土坑等の遺構を検出している<sup>(1)</sup>。なお平成 22 年（2010）に北西側の隣接地で調査が行われているが当調査では遺構は確認されていない<sup>(2)</sup>。現地での調査は令和 5 年 8 月 1 日に行った。

### 2. 調査成果

調査は建物建築範囲に約 13.5㎡の調査区を設定し、試掘調査を実施した。

地表面約 0.7 m で遺構と思われる溝状の落ち込みを検出したが、締まりはなく、一部断割ったところ落ち込みではなく盛土状のものと判明した。そのことから本調査地は盛土して整地していると想定される。盛土は搬入土と思われ、13 世紀代の黒色土器【図 3-1】、土師質管状土錘【図 3-5/ 重さ約 22g】、羽釜【図 3-3】が含まれていた。

その後地表面下約 1.1 m（標高約 85.8 m）で灰黄褐色土の遺構面を確認したが、遺構・遺物とともに確認できなかった。また、一部断ち割ったところ、7 層以下は灰色シルト層が堆積し、地表面下約 1.7 m ではオリーブ灰色粗粒砂～極粗粒層が確認できた。遺物・遺構とともに確認できなかったことから、そのまま埋戻しを行った。

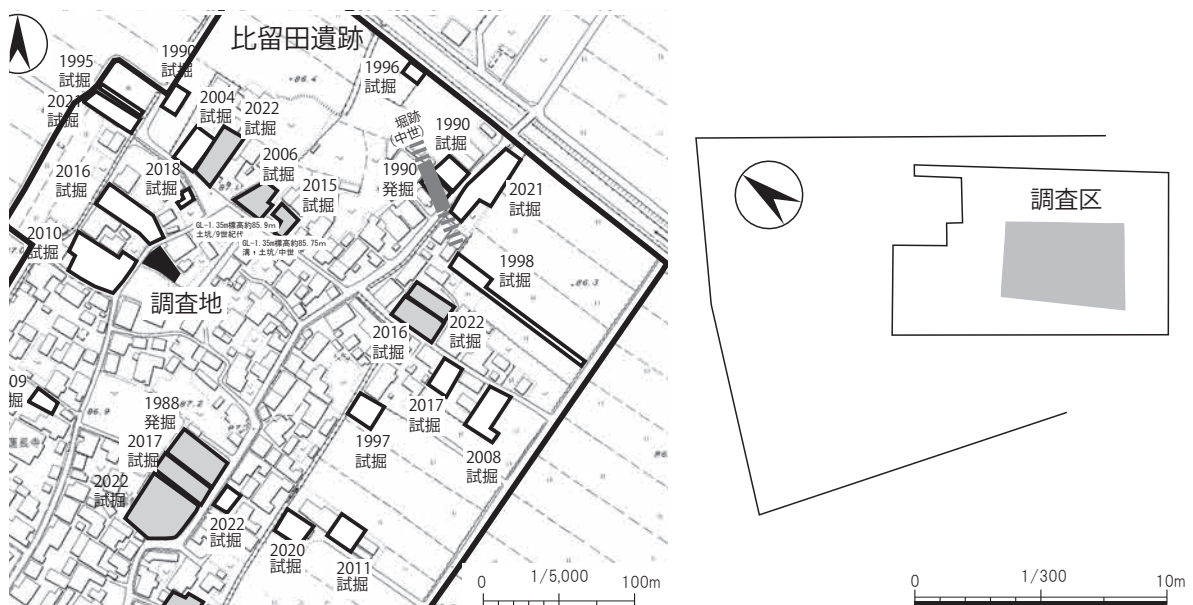


図 1 調査地位置図・調査区配置図

## 27. 比留田遺跡

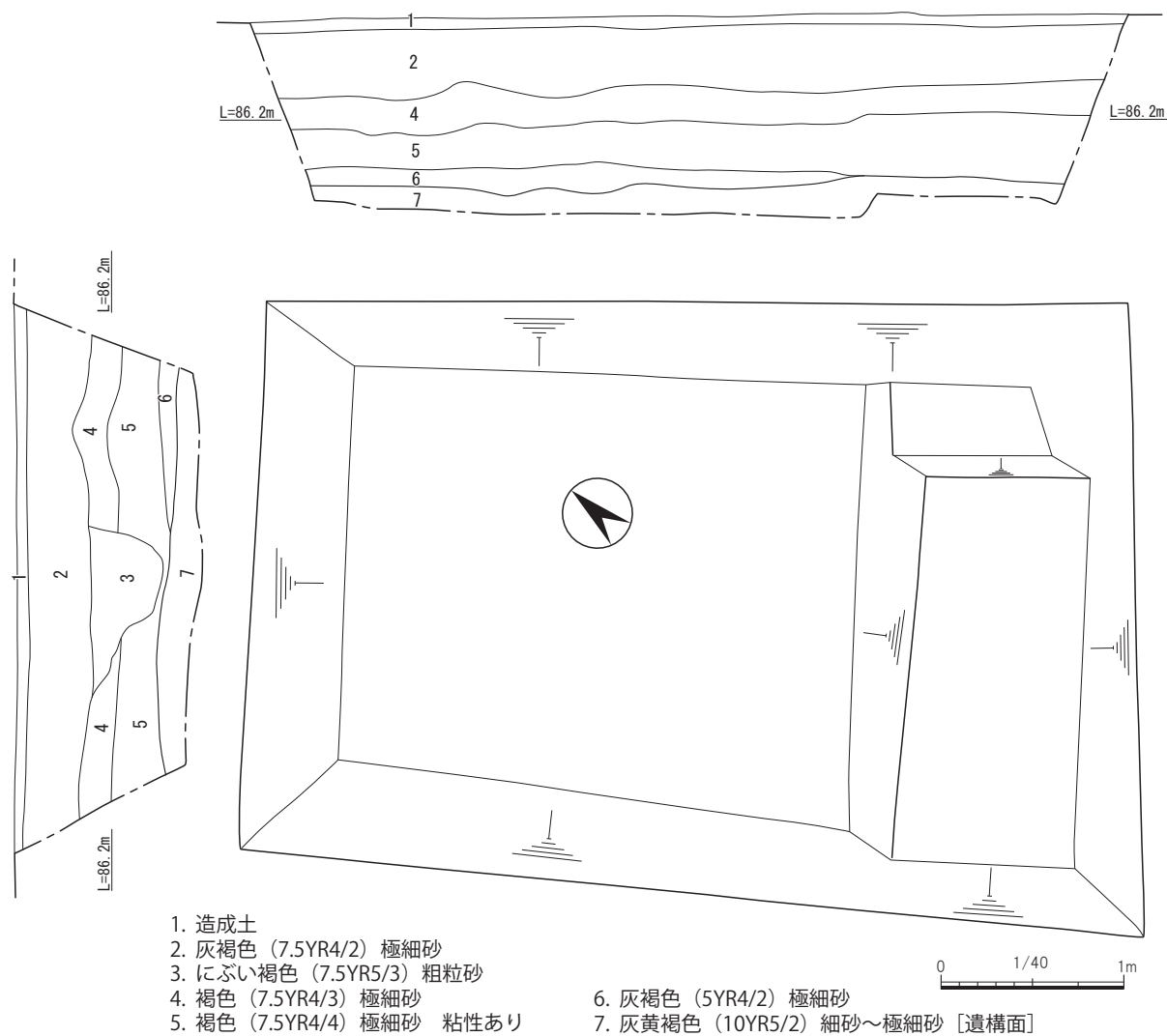


図2 土層断面図

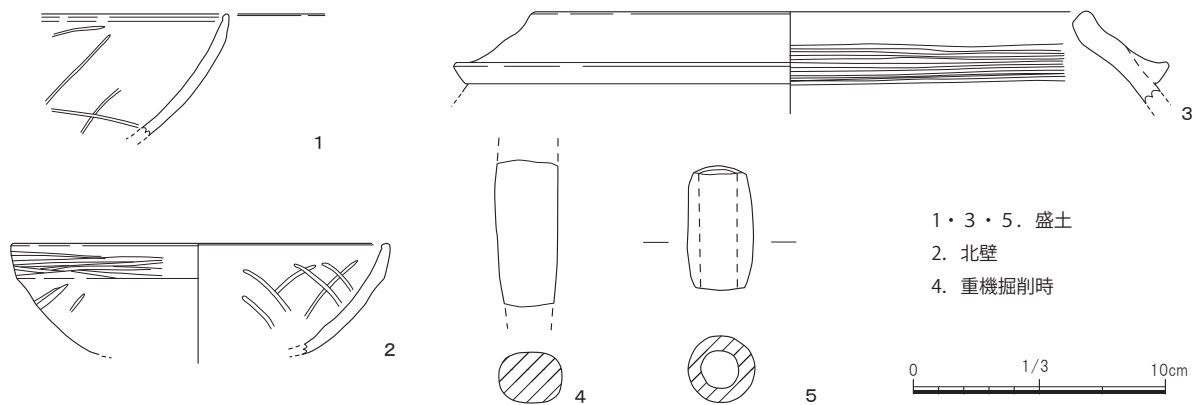


図3 出土遺物

### 3. 遺物

遺物としては上記のものに加え重機掘削時に、三足鍋の脚部【図 3-4】、壁面精査時に黒色土器の椀【図 3-2】が出土した。

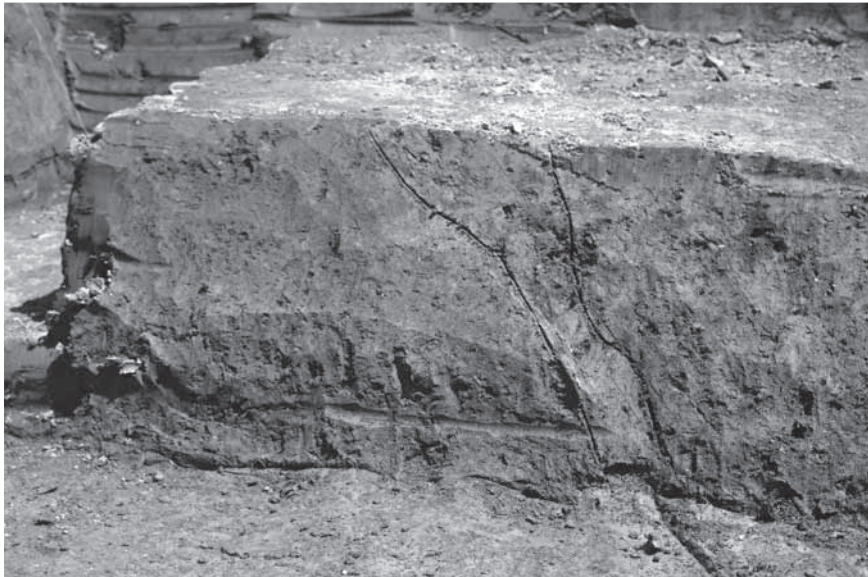
### 4. まとめ

本調査地は集落の縁辺部にあたり、周辺の調査事例から北東側にいくにつれ遺構の密度が高くなると想定される。

(渡邊)

(1) 滋賀県野洲市教育委員会 2007 『平成 18 年度 野洲市内遺跡発掘調査年報』

(2) 滋賀県野洲市教育委員会 2011 『平成 22 年度 野洲市内遺跡発掘調査年報』



盛土堆積状況



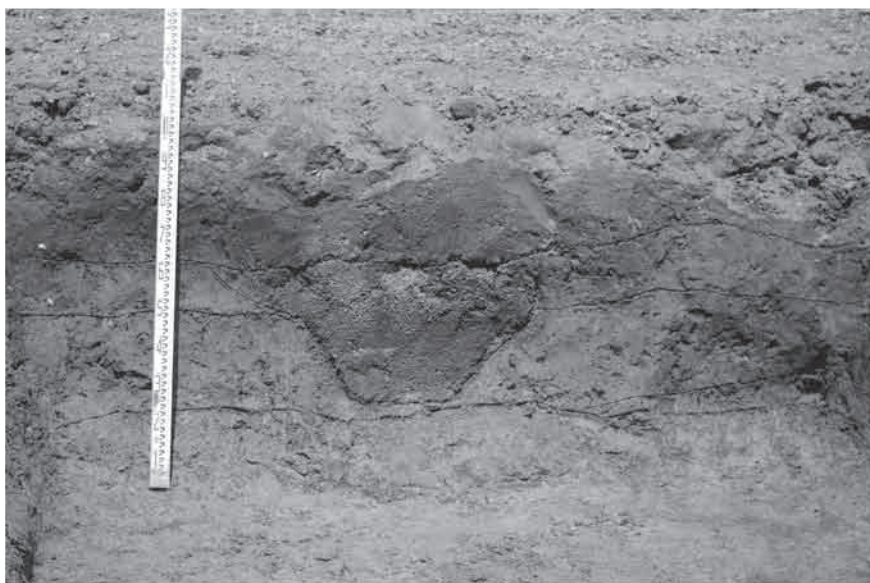
調査区平面



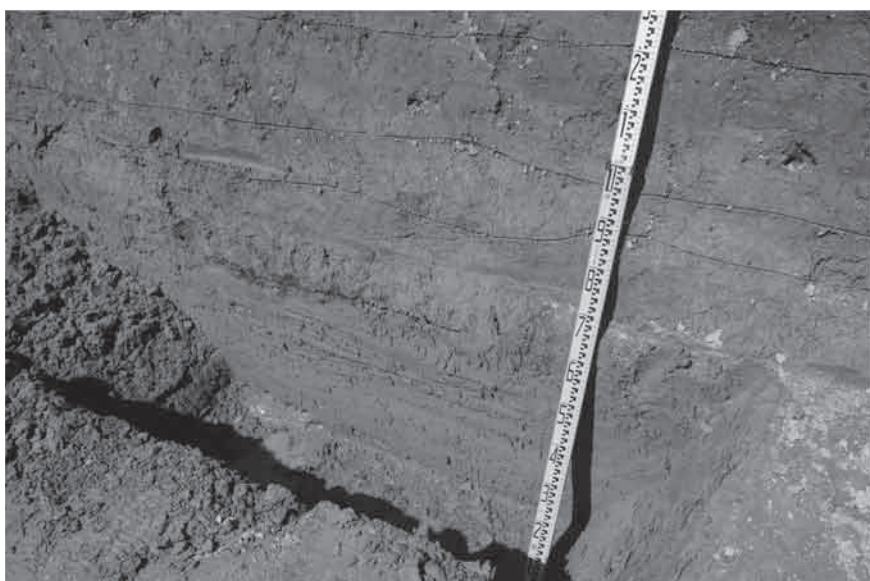
## 27. 比留田遺跡



北壁土層断面



西壁土層断面



下層確認状況

## 28. たかぎ 高木遺跡

調査地 野洲市<sup>たかぎ あざはし うち</sup>高木字橋ノ内 656 番 10、656 番 11  
調査原因 個人住宅  
調査期間 令和 5 年 8 月 8 日

### 1. 調査経過

高木遺跡は、古墳～室町時代の集落・城館跡と周知されている。

調査地は高木遺跡の中央部に位置する。調査は個人住宅建設に伴うものである。建物建築範囲に調査区を設定し、試掘調査を実施した。周辺の既往の調査としては、南側約 50 m 地点では平成 12 年（2000）に調査が行われ、2 面の遺構面とともに 2 基のピット、また古墳時代前期の土師器や高杯、甕が出土している<sup>(1)</sup>。また平成 19 年（2007）にも南側約 60 m 地点で調査が行われ、遺構は検出していないが信楽の播鉢片が出土している<sup>(2)</sup>。現地での調査は令和 5 年 8 月 8 日に行った。

### 2. 調査成果

調査は建物建築範囲に約 10.0m<sup>2</sup>の調査区を設定し、試掘調査を実施した。地表面下約 1.7 m まで掘り下げたところ、地表面下約 1.6 m（標高約 88.7 m）の灰白色粘土層の遺構面を検出した。遺構はなし。遺物としては 8 層から中世の信楽の播鉢片、瀬戸美濃産の皿が出土した。細片のため実測には至らなかった。

土層観察では近世～近現代の遺物が混ざっていた（7 層）。明治 6 年高木村地券取調総絵図には本調査地には屋敷地があったことがわかり、屋敷に伴うものと考えられる。また 6 層では随所に中粒砂の噴砂等が確認でき、近現代に地震等による液状化現象が起きたと想定される。このことから本調査地の厚い盛土は軟弱地盤を回避するためのものと考えられる。

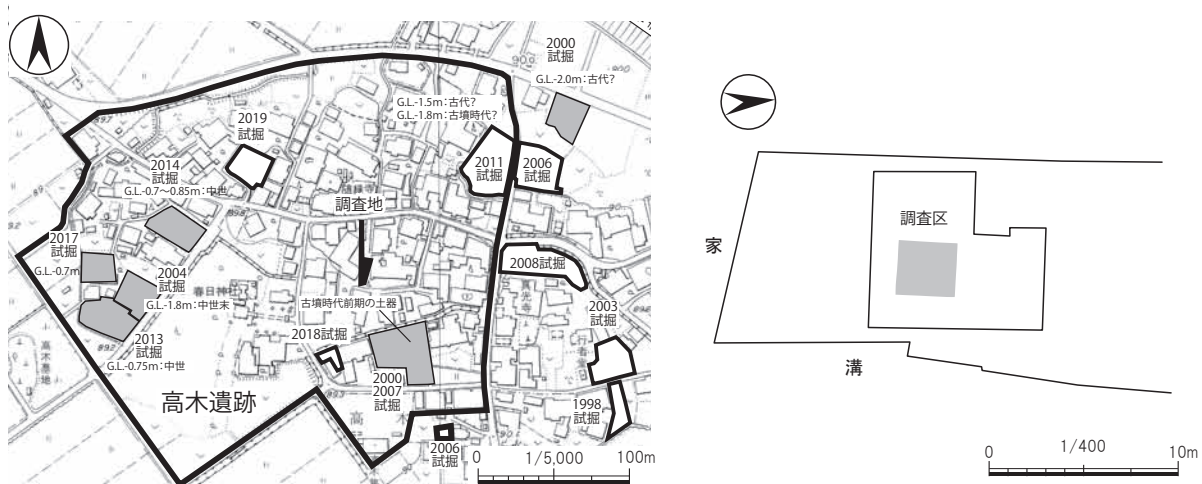


図1 調査地位置図・調査区配置図

## 28. 高木遺跡

### 3. まとめ

本調査地では遺構は確認できなかったが、中世の遺物が出土した。また周辺の調査歴と今回の調査成果を踏まえると、本調査地から西～南にいくにつれ、中世集落の中心部になるのが想定される。

(渡邊)

(1) 野洲町教育委員会 2001 『平成 12 年度野洲町内遺跡発掘調査概要』

(2) 滋賀県野洲市教育委員会 2007 『平成 19 年度野洲市内遺跡発掘調査年報』

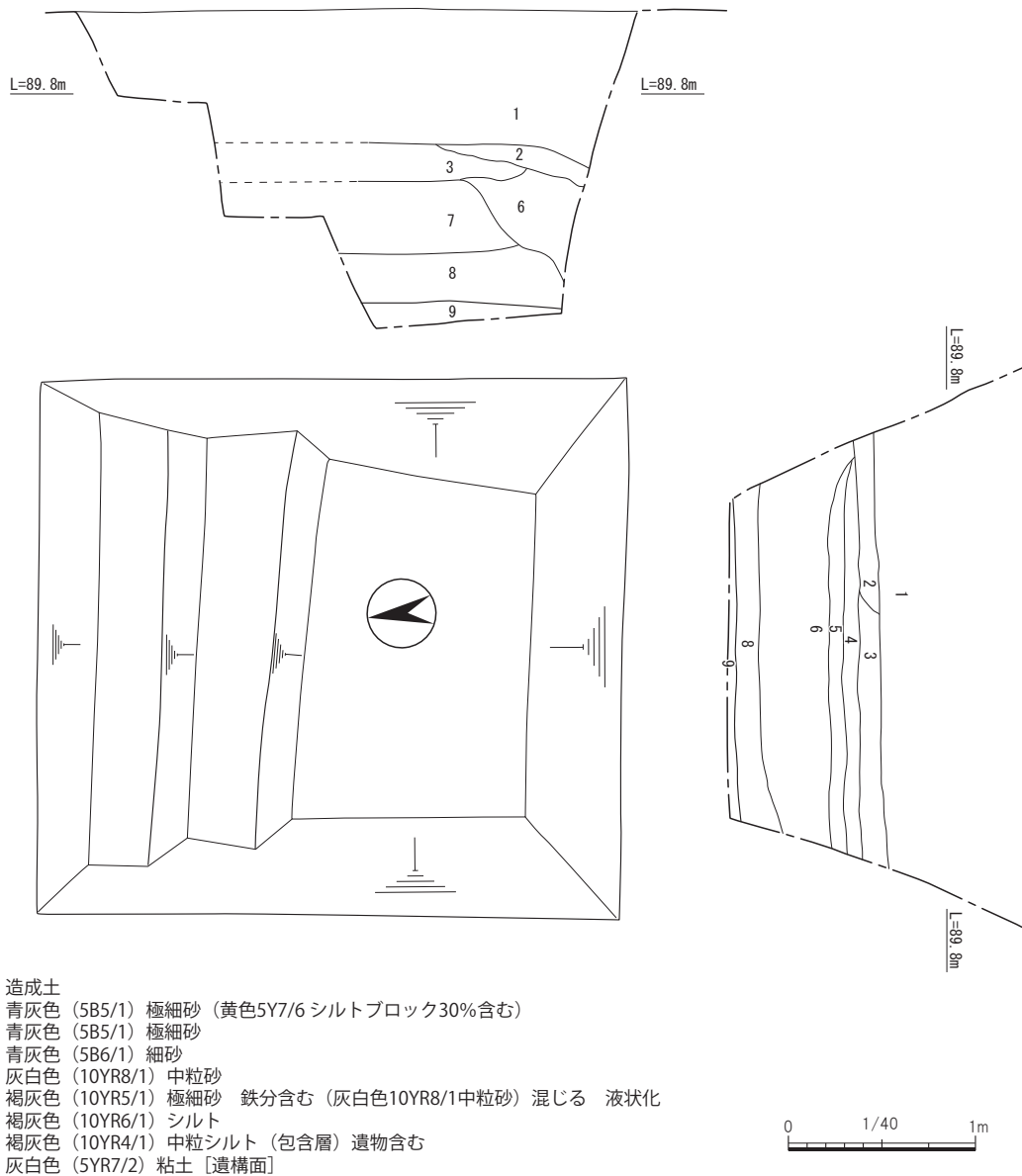


図2 土層断面図



28. 高木遺跡



調査区平面



南壁土層断面



東壁土層断面

29. <sup>あわ</sup>安 <sup>じ</sup>治 <sup>ほう</sup>放 <sup>こう</sup>光 <sup>じ</sup>寺 遺 跡

調 査 地 野洲市安治<sup>あわじ あさきた</sup>北田 125 番 1 の一部  
調査原因 個人住宅  
調査期間 令和 5 年 8 月 23 日

## 1. 調查經過

安治放光寺遺跡は、古墳時代～江戸時代の集落跡と周知されている。

調査地は安治放光寺遺跡の北側に位置する。調査は個人住宅建設に伴うものである。建物建築範囲に調査区を設定し、試掘調査を実施した。周辺の既往の調査としては、北西側の隣接地では平成 27 年（2015）に調査が行われ、古墳時代中期から後期にかけての不明土坑遺構を検出している<sup>(1)</sup>。なお令和 2 年（2020）に西側の隣接地で調査が行われているが遺構は確認されていない<sup>(2)</sup>。現地での調査は令和 5 年 8 月 23 日に行った。

## 2. 調査成果

調査は建物建築範囲に約 12.0m<sup>2</sup>の調査区を設定し、試掘調査を実施した。部分的に断ち割りながら掘り下げを行ったところ地表面下約 0.9 m（標高 85.5 m）の褐灰色シルト層上面でピットを 2 基確認した。その後、下層確認のため地表面下約 1.7 m まで掘り下げたが、以下灰色シルト層、灰色中粒砂層が堆積しており、遺構・遺物も確認できなかったためそのまま埋戻しを行った。

### 3. まとめ

近現代に描かれた「野洲郡第7区安治村領内絵図」や明治6年作成の「近江国野洲郡安治村地券取調絵図」では調査地は特に区分分けされていない。現在でも調査地は安治集落の北端に位置しており、北側の平成27年調査でも近現代の水田をめぐると推定される用水路跡が検出されていることから、

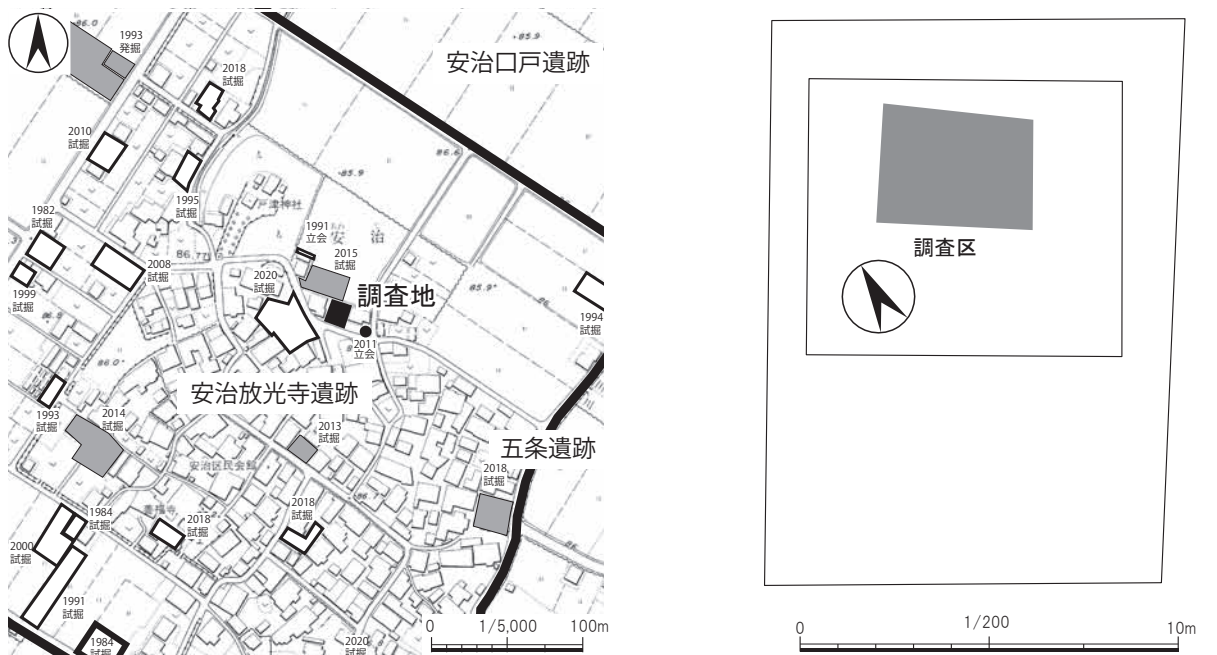


図1 調査地位置図・調査区配置図

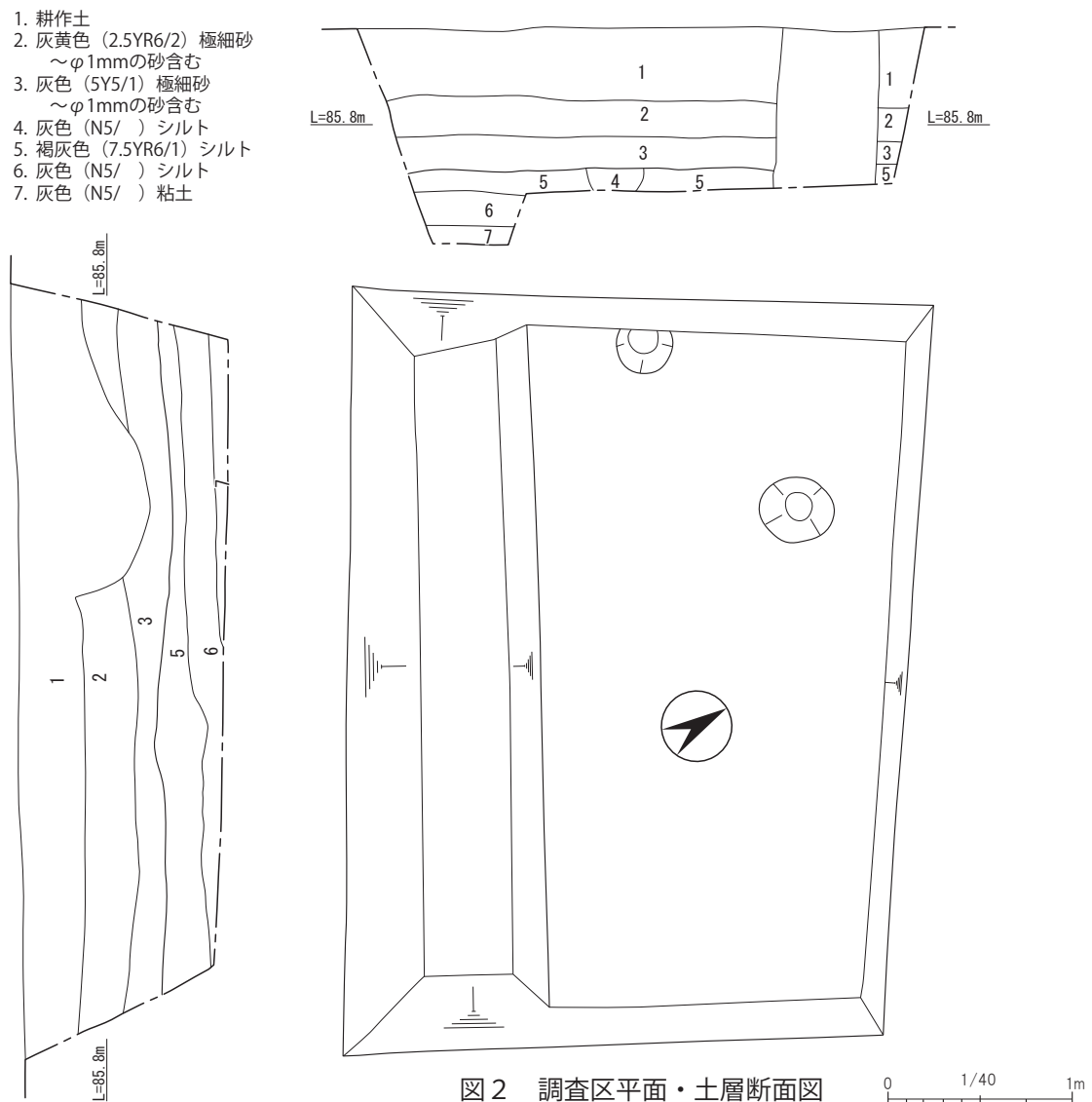
近現代においては本調査地は積極的利用されておらず、それは近世以前も同様であると考えられる。

本調査地は安治放光寺遺跡の縁辺部と想定される。

(渡邊)

(1) 滋賀県野洲市教育委員会 2016 『平成 27 年度 野洲市内遺跡発掘調査年報』

(2) 滋賀県野洲市教育委員会 2021 『令和 3 年度 野洲市内遺跡発掘調査年報』





29. 安治放光寺遺跡



遺構検出（西から）



南壁土層断面（東から）



下層確認

## 30. 三上遺跡

調査地 野洲市三上字神守田 491 番 1  
調査原因 個人住宅  
調査期間 令和 5 年 8 月 29 日

### 1. 調査経過

三上遺跡は、古墳～中世の集落跡と周知されている。

調査地は三上遺跡の南東側に位置する。既往の調査として、南側約 40 m 地点では平成 24 年(2012)に試掘調査が行われている(1)。それと隣接した調査としても令和元年(2019)に試掘調査が行われている(2)。遺構は検出していないが、令和元年の調査では土師器・須恵器片が出土している。

現地の調査は令和 5 年 8 月 29 日に行った。

### 2. 調査成果

調査は建物建築範囲に約 9.0m<sup>2</sup>の調査区を設定し、試掘調査を実施した。

地表面下約 1.1 m まで掘り下げたところ地表面下約 1.0 m (標高約 103.6 m) で灰色粘土層を確認した。この層が遺構面に相当すると思われる。遺構は確認できなかった。なお、同日に行った西側の調査と比較すると 1～4 層までは同じような堆積状況を示すが、5～6 層は様相が異なっており、当調査地は河川による氾濫・沖積作用を受けていた。

調査区では重機掘削時に土師器片や白磁・椀【図 3－1】の小片が出土した。印象としては 4 層からの出土が多い。白磁椀の釉は薄く、口縁部は断面三角を呈す。11 世紀後半～12 世紀前半のものと考えられる。

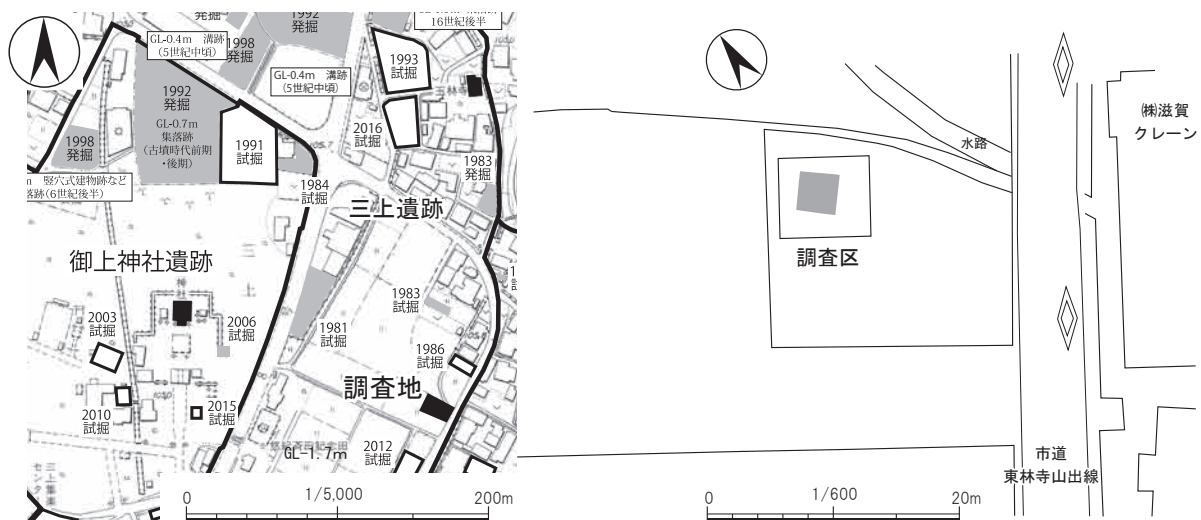


図 1 調査地位置図・調査区配置図

### 30. 三上遺跡

#### 3. まとめ

本調査地では遺構は確認できていないものの、2012年に南側約40m地点で行われた調査では重機掘削時に土師器・須恵器片が出土している。このことから周辺の調査事例による資料の蓄積が望まれる。

本調査地は三上遺跡の縁辺部と想定される。

(渡邊)

(1) 滋賀県野洲市教育委員会 2013 『平成24年度 野洲市内遺跡発掘調査年報』

(2) 滋賀県野洲市教育委員会 2020 『令和元年度 野洲市内遺跡発掘調査年報』

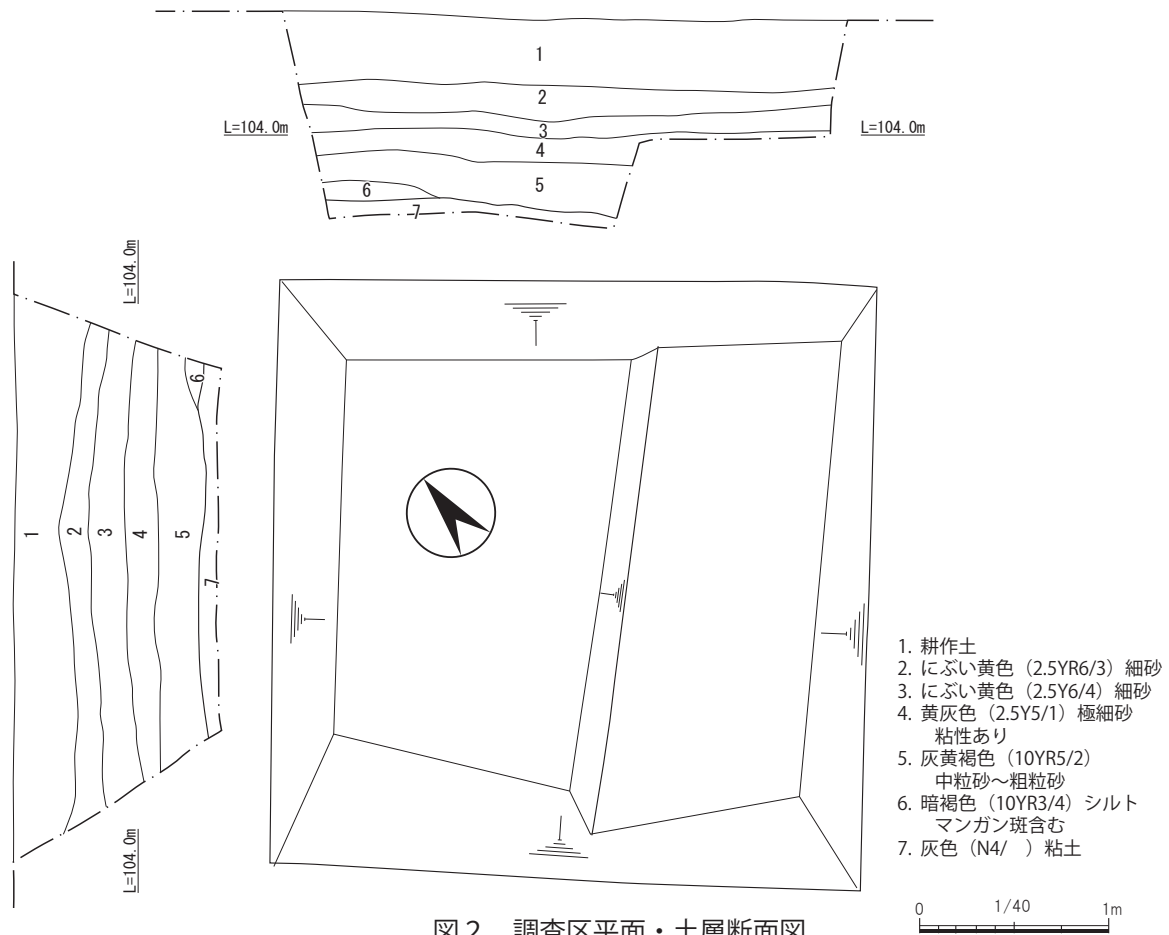


図2 調査区平面・土層断面図

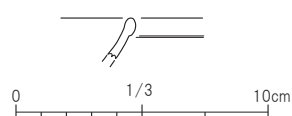


図3 出土遺物





調査区



北壁土層断面（南西から）



調査地遠景

# 31. 三上遺跡

調査地 野洲市三上字神守田 491 番 1  
調査原因 個人住宅  
調査期間 令和 5 年 8 月 29 日

## 1. 調査経過

三上遺跡は、古墳～中世の集落跡と周知されている。

調査地は三上遺跡の南東側に位置する。既往の調査として、南側約 40 m 地点では平成 24 年(2012)に試掘調査が行われている(1)。それと隣接した調査としても令和元年(2019)に試掘調査が行われている(2)。遺構は検出していないが、令和元年の調査では土師器・須恵器片が出土している。

現地での調査は令和 5 年 8 月 29 日に行った。

## 2. 調査成果

調査は建物建築範囲に約 12.0㎡の調査区を設定し、試掘調査を実施した。地表面下約 1.2 m まで掘り下げたところ地表面下約 1.0 m (標高約 103.6 m) で褐灰色シルト層を確認した。この層が遺構相当面となる。令和元年に南側約 70 m 地点で行われた試掘調査では灰色粘土層の上で確認した褐灰色シルト層を遺構相当面としており、同一の遺構相当面となる。遺構は確認できなかった。

遺物としては重機掘削時に土師器片・瓦が出土した。瓦は摩耗が著しいが中世の所産と思われる。

## 3. まとめ

本調査地から西側には御上神社が位置している。御上神社は国宝本殿が鎌倉期のものであり、現在の神社境内の構成が鎌倉期までさかのぼるとおもわれる。また周辺には三上山の山岳信仰に関連する寺院遺跡などが存在し、中世段階では三上社を筆頭に三上山を中心として関連の寺社の存在を伺うことができる。今回の調査区からも中世の所産と思われる瓦が出土したため、改めて周辺に関連の寺院

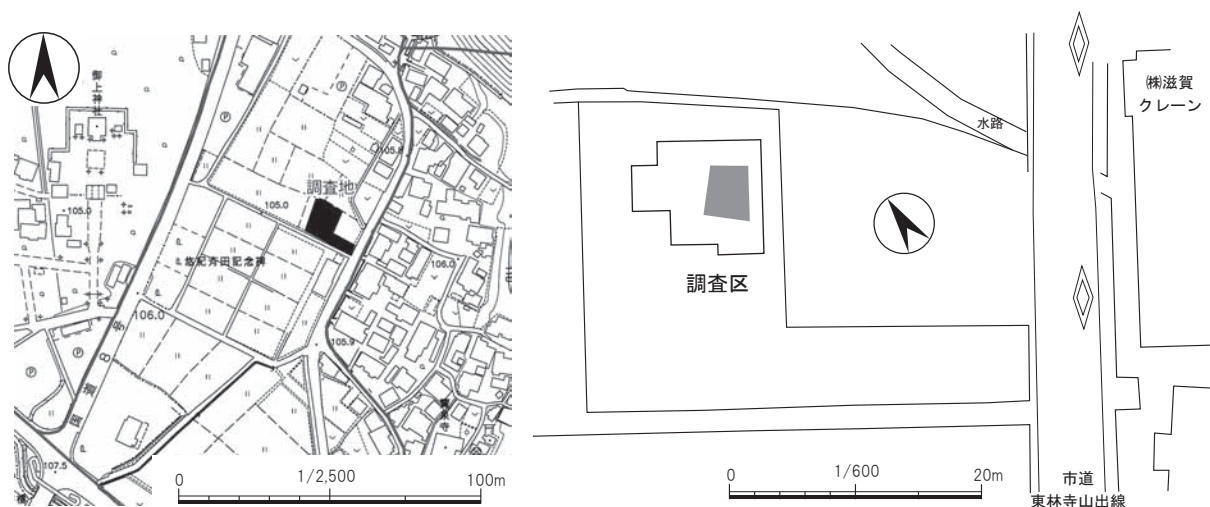


図1 調査地位置図・調査区配置図

遺跡の存在を傍証する結果となった。

本調査地は三上遺跡の縁辺部と想定される。

(渡邊)

(1) 滋賀県野洲市教育委員会 2013 『平成 24 年度 野洲市内遺跡発掘調査年報』

(2) 滋賀県野洲市教育委員会 2020 『令和元年度 野洲市内遺跡発掘調査年報』

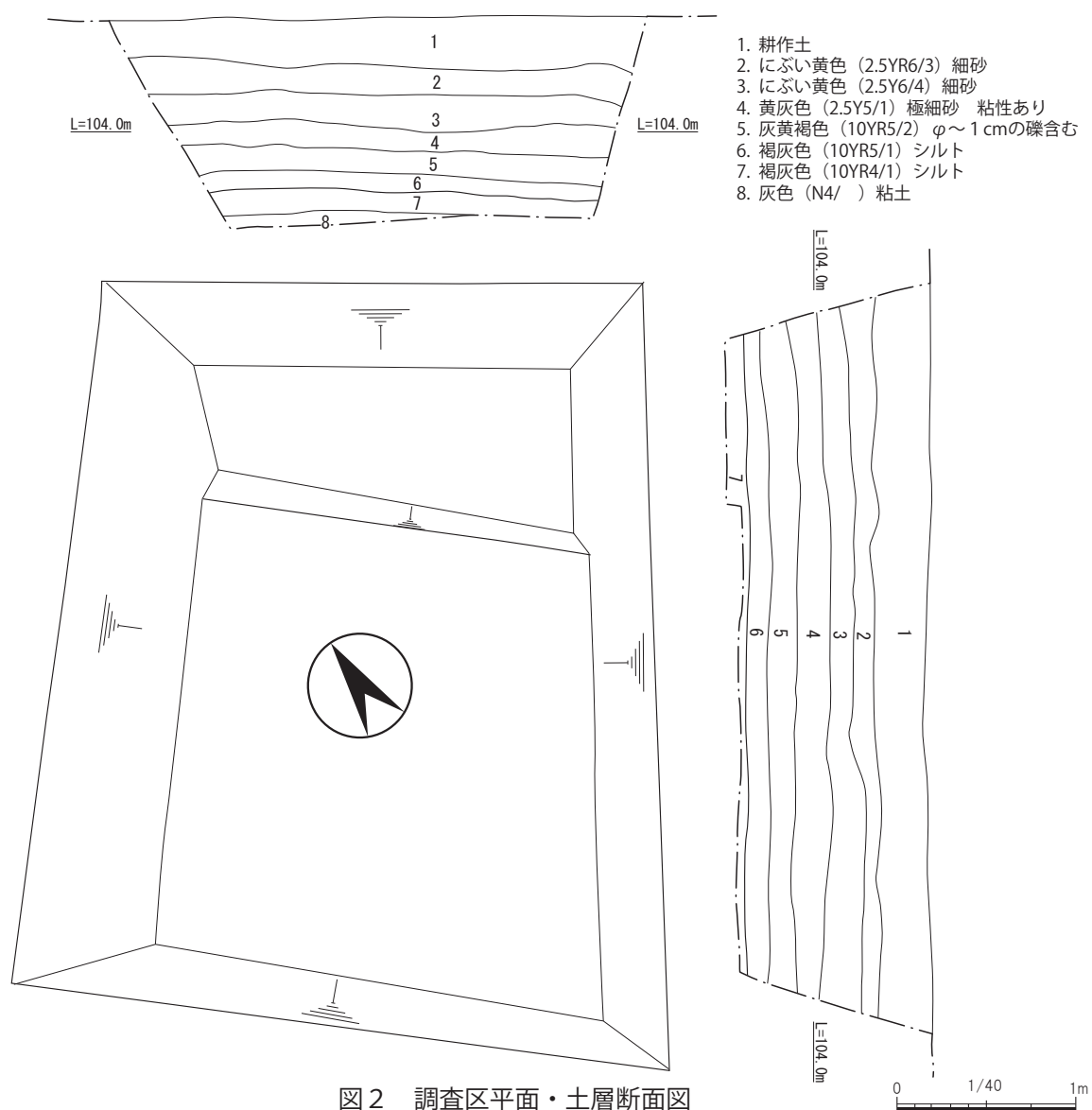


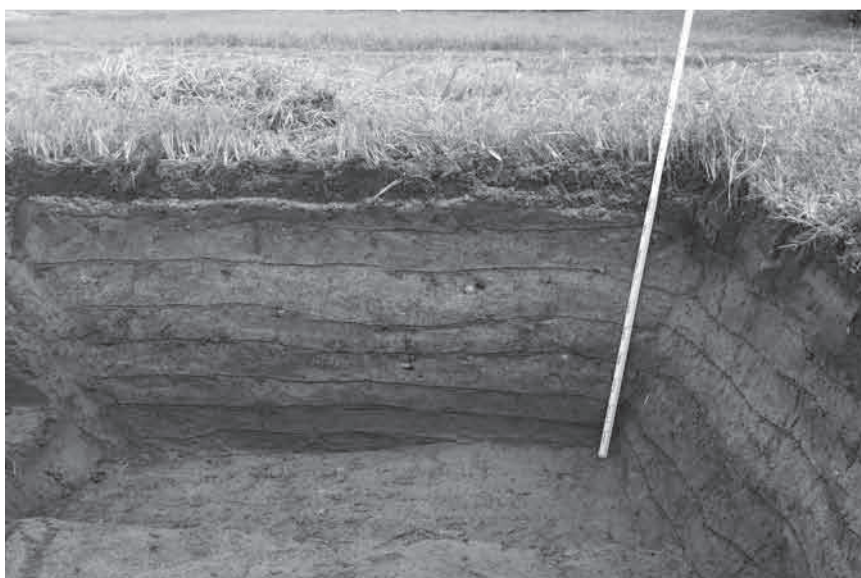
図2 調査区平面・土層断面図



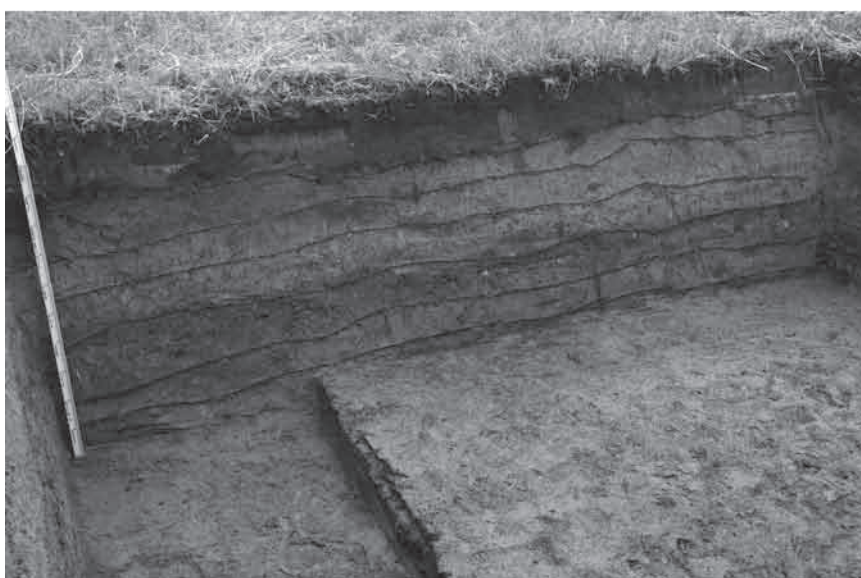
31. 三上遺跡



調査区



北壁土層断面（南西から）



東壁土層断面（北西から）



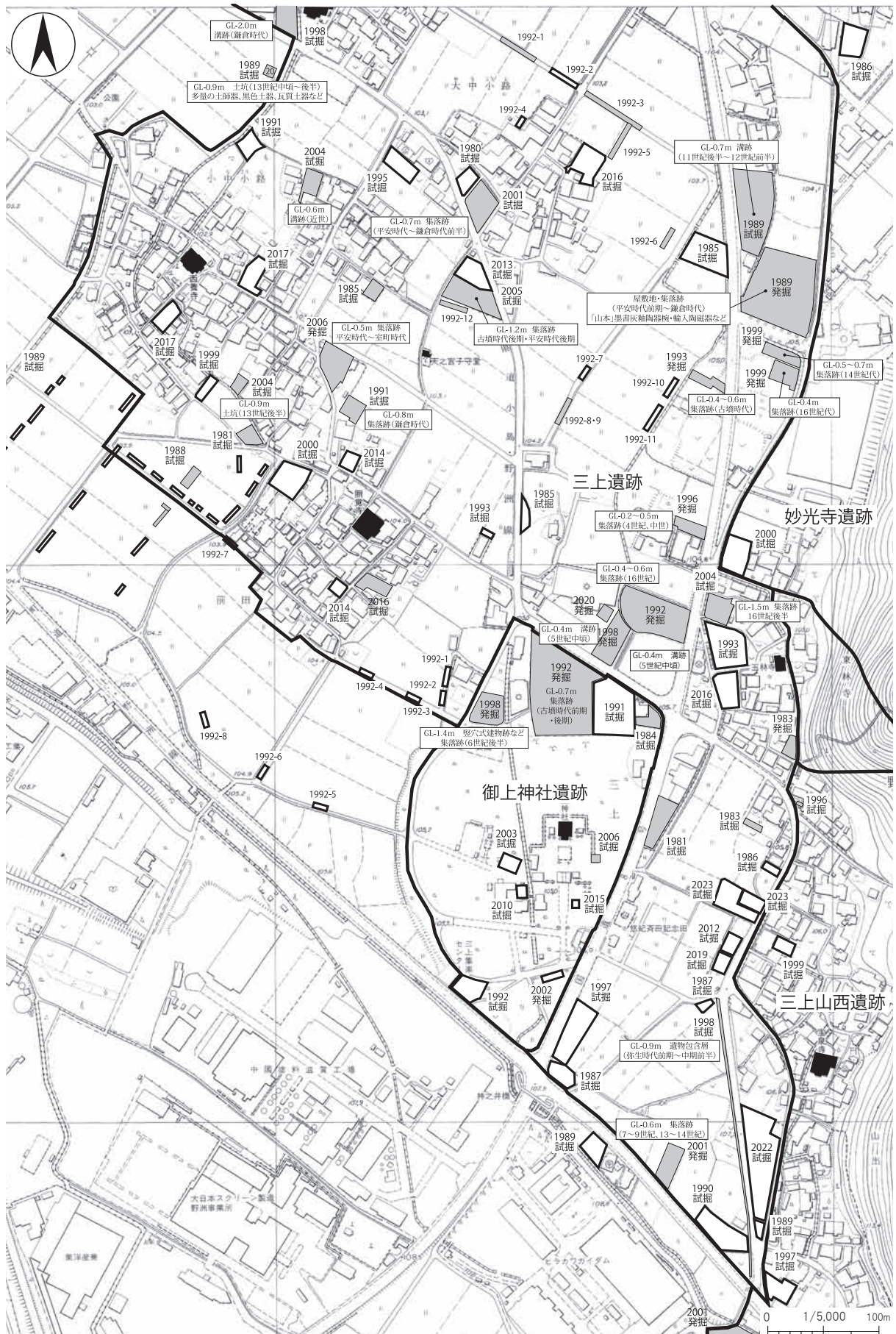


図3 既往の調査

## 32. 木部遺跡

調査地 野洲市八夫字馬場表 627 番 2  
調査原因 個人住宅  
調査期間 令和 5 年 9 月 5 日

### 1. 調査経過

木部遺跡は、弥生～江戸時代の集落跡と周知されている。

調査地は木部遺跡の南東側に位置する。調査は個人住宅建設に伴うものである。建物建築範囲に調査区を設定し、試掘調査を実施した。周辺の既往の調査としては、西側の隣接地点では平成 17 年（2005）に調査が行われ、古代の鍔付甕が出土している（1）。

現地の調査は令和 5 年 9 月 5 日に行った。

### 2. 調査成果

調査は建物建築範囲に約 9.0㎡の調査区を設定し、試掘調査を実施した。

地表面下約 0.9 m（標高約 87.4 m）まで掘り下げたところ遺構面である明黄褐色粘土層を検出した。遺構は確認できなかった。遺物としては、重機掘削時に土師器の皿【図 3-1】・土師器の甕【図 3-2】が出土した。

図面等を作成したのち、下層確認のため地表面下約 1.8 m まで掘削を行ったところ、下層には灰色粘土層が堆積しており、7 層以下遺構・遺物も確認できなかったためそのまま埋戻しを行った。

### 3. まとめ

周辺の調査事例として、西側の隣接地点では平成 17 年（2005）に調査が行われ、古代の鍔付甕が出土している。遺構は検出していない。今回の調査でも遺構は検出していないが古代の所産と思われる土師器片が出土しており、今後周辺の調査事例の増加が望まれる。

本調査地は木部遺跡の縁辺部と想定される。

（渡邊）

（1）野洲市教育委員会 2006 『平成 17 年度野洲市内遺跡発掘調査年報』

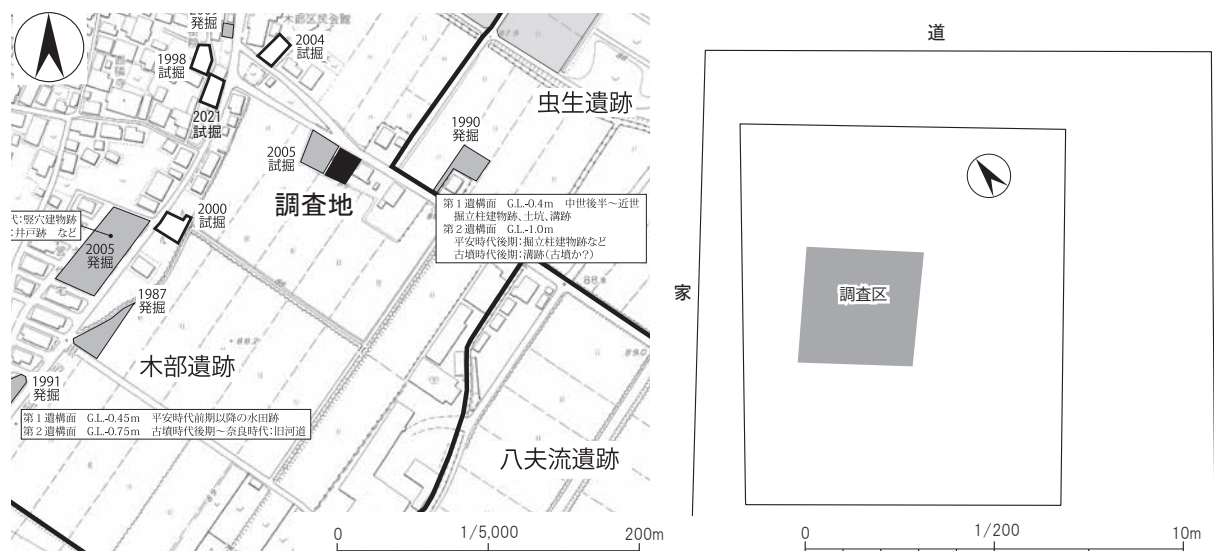


図 1 調査地位置図・調査区配置図



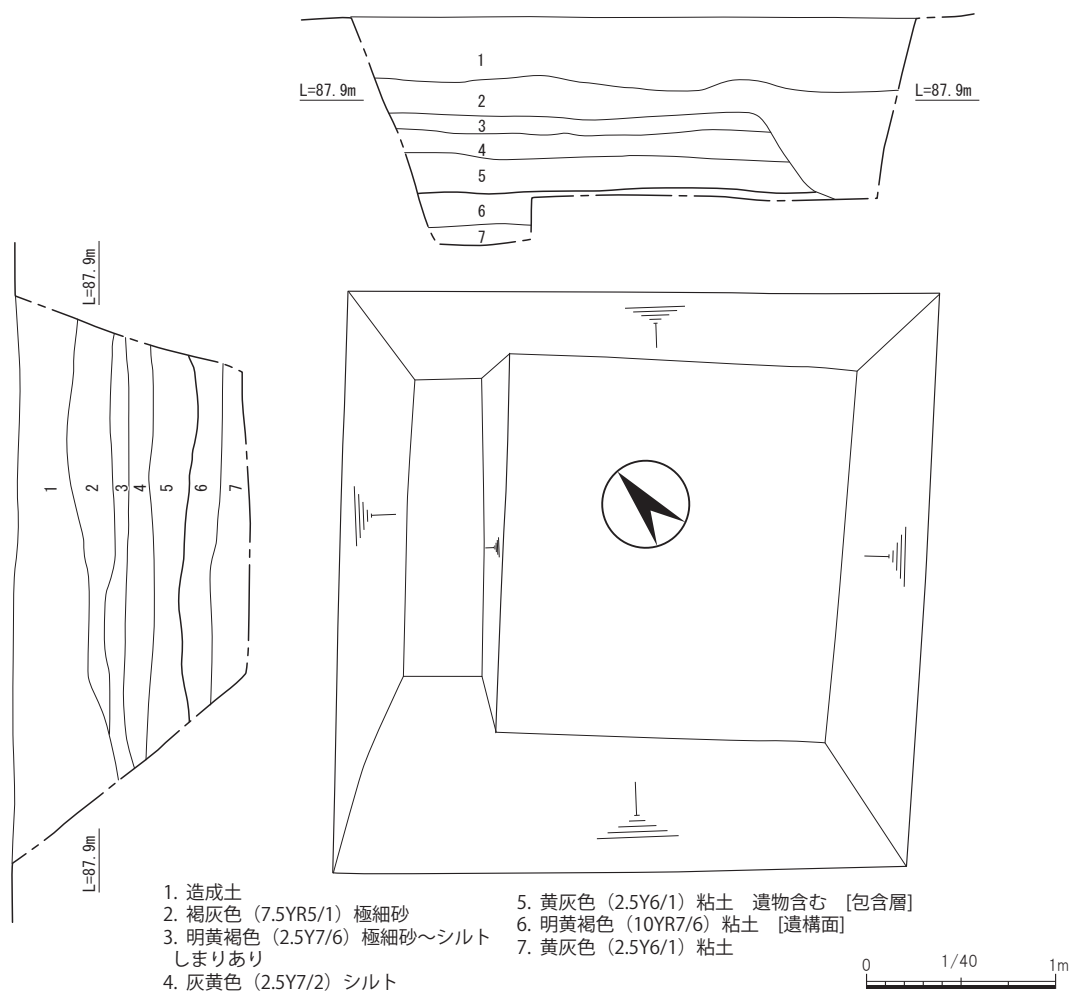


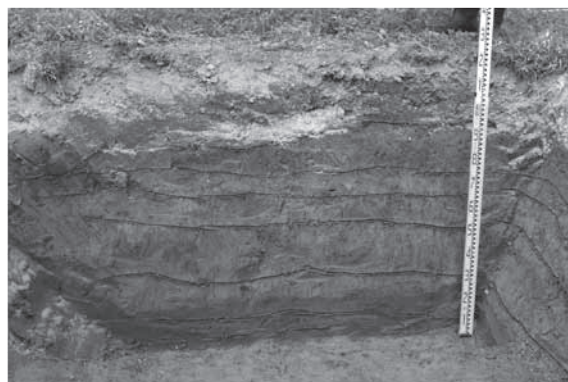
図2 調査区平面・土層断面図



図3 出土遺物



調査区（南から）



西側土層断面（南東から）

### 33. <sup>こ</sup> <sup>しの</sup> <sup>はら</sup> 小篠原遺跡・<sup>はやし</sup> <sup>こし</sup> 林ノ腰古墳

調査地 野洲市<sup>こしのはらあざはやし</sup>小篠原字林ノ腰 2500 番  
調査原因 個人住宅  
調査期間 令和 5 年 9 月 21 日～ 25 日

#### 1. 調査経過

本調査地は小篠原遺跡と林ノ腰古墳の 2 つの遺跡内に位置する。調査は個人住宅建設に伴うものである。建物建築範囲に調査区を設定し、本発掘調査を実施した。既往の調査として、令和 5 年 1 月に行った宅地造成の擁壁埋設に伴う発掘調査では、林ノ腰古墳の内濠・外濠を検出している<sup>(1)</sup>。そのことから、本調査地は内濠部分が建築範囲にかかることが予想され、多数の遺物が出土することが想定された。なお、計画掘削深度は地表面下約 1.25 m の杭埋設であったため、掘削深度は 1.2 m 未満にとどめ、原則それ以上の掘削は行わなかった。

#### 2. 調査成果

調査は建物建築範囲に約 25.0m<sup>2</sup>の調査区を設定し、調査を実施した。地表面下約 1.1 m で明黄褐色極細砂層の遺構面を確認した。遺構としては落ち込みを検出した。林ノ腰古墳の配置から内濠とみられる。埋土は上から褐色土、黒褐色土の順に堆積しており、墳丘側になるに従い深くなる。4 層は明黄褐色粘土の層が小ブロックとなって混在して堆積しており、墳丘または周堤帯の盛土が崩れて墳丘際の周濠内に堆積したものである可能性が高い。また、内濠では人頭大の垂角礫を検出した。垂角礫は葺石であったと考えられ、墳丘に葺かれていたのが転落したもの、もしくは墳丘の破壊とともに周濠内に遺棄されたものとおもわれる。埴輪列などは確認できなかった。これは後世の削平が原因とおもわれる。内濠からは比較的固まった状態で埴輪が出土した。南北方向に直線的に出土しており、同一個体かと思われる。底部を墳丘側とし、周堤帯から崩落したものかと考えられる。

遺物としては内濠から埴輪片や須恵器片が出土した【図 3】。1～4 は円筒埴輪である。1 は口縁

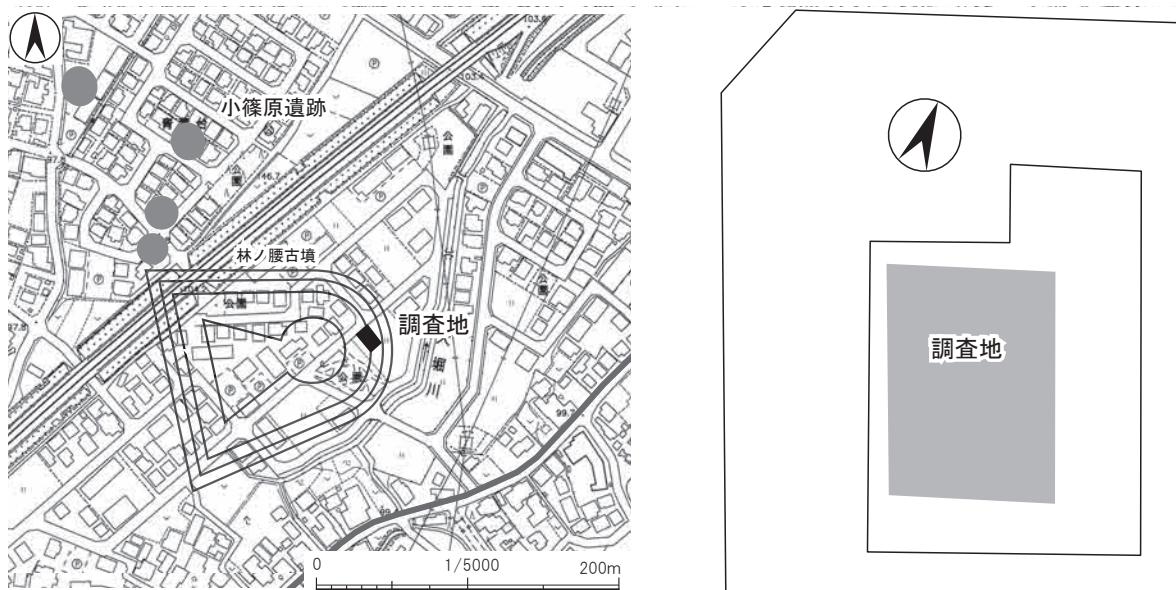


図 1 調査地位置図・調査地配置図

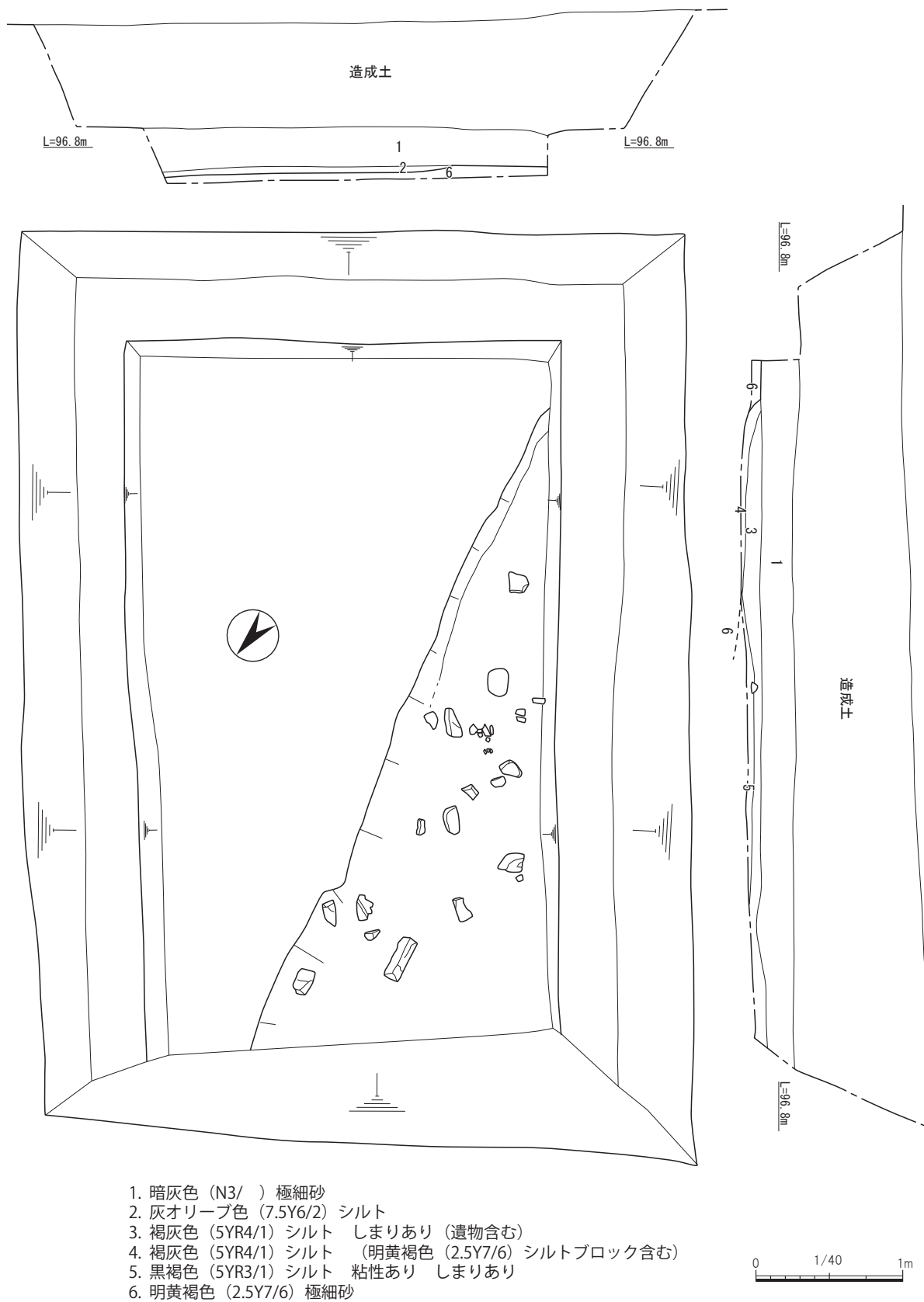


図2 土層断面図



### 33. 小篠原遺跡・林ノ腰古墳

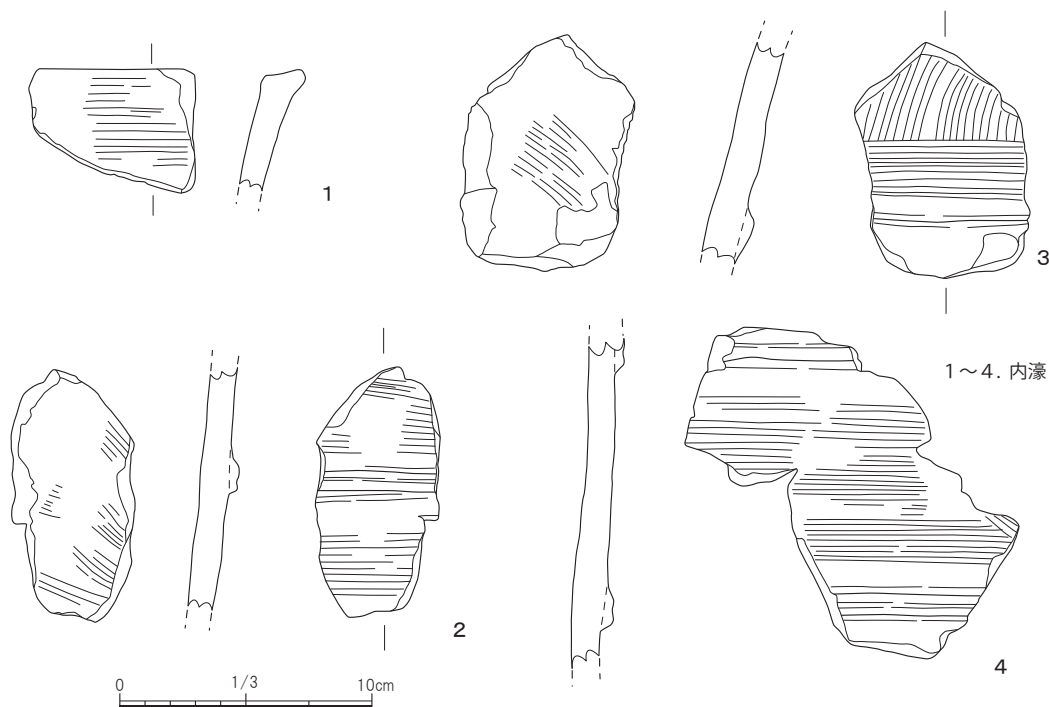


図3 出土遺物



図4 遺物出土状況

部が残存し、内面はヨコハケを施す。端部は平らで、外側に肥厚する。2の外面はヨコハケを施し、内面は部分的に斜め方向のハケ目が不規則に施される。突帯は扁平なM字型の断面形態を呈する。3の外面は一次調整のタテハケ後ヨコハケを施す。4は体部中位2段の残存。外面はストロークの長いヨコハケを施す。

今回の調査区では古代以降の遺物は出土しておらず、比較的早い段階で周濠が埋没した可能性がある。

#### 3. まとめ

本調査地は林ノ腰古墳の一角、また小篠原遺跡の集落の一角と判断される。

(渡邊)

(1) 野洲市教育委員会 2024 『令和5年度 野洲市埋蔵文化財調査概要報告書』

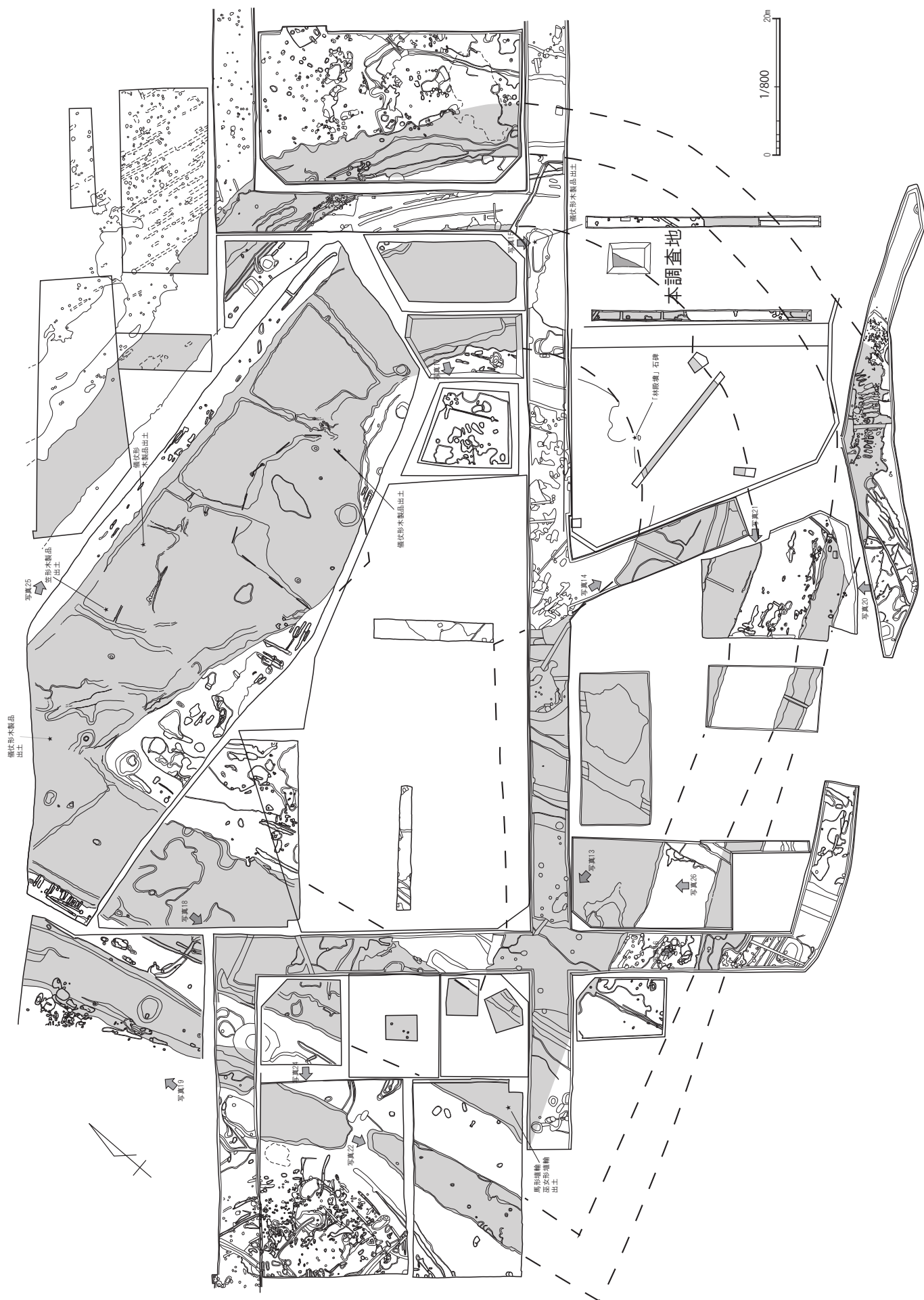


図5 林ノ腰古墳 既往の調査

33. 小篠原遺跡・林ノ腰古墳



遺構検出状況（北から）



遺構掘り下げ状況（北から）



東壁土層断面



33. 小篠原遺跡・林ノ腰古墳



南壁土層断面



遺物出土状況①



遺物出土状況②

## 34. おちくぼ 乙 窪 遺 跡

調 査 地 おちくぼあざみやまいしはら 野洲市乙窪字宮前石原 396 番  
調査原因 個人住宅  
調査期間 令和 5 年 9 月 19 日

### 1. 調査経過

乙窪遺跡は、奈良～江戸時代の集落跡と周知されている。

調査地は乙窪遺跡の南東隅に位置する。調査は個人住宅建設に伴うものである。建物建築範囲に調査区を設定し、試掘調査を実施した。周辺の既往の調査としては、平成 17 年（2005）に南西側約 30 m 地点で試掘調査が行われているが、遺構・遺物は出土していない<sup>(1)</sup>。また、東側約 40 m 地点での試掘調査でも遺構・遺物は確認されていない<sup>(2)</sup>。

### 2. 調査成果

調査は建物建築範囲に約 9.0㎡の調査区を設定し、試掘調査を実施した。地表面下約 1.3 m（標高約 89.7 m）まで掘り下げ、にぶい黄褐色細砂層（6 層）確認した。遺物が少量確認できたことから遺構面と想定し精査を行ったが遺構は確認できなかった。一部調査区を立ち割ったところ地表面下約 1.7 m で粗粒砂層に到達しており、遺物・遺構とともに確認できなかったためそのまま埋戻しを行った。調査区では遺構掘削時に土師器片・黒色土器片が出土した。

### 3. まとめ

周辺の調査事例では遺構・遺物とともに確認できていない。本調査地からは中世の所産と考えられる遺物が出土したため、中世段階になんらかの活動があったことがうかがえる。

本調査地は乙窪遺跡の縁辺部と想定される。

（渡邊）

(1) 滋賀県野洲市教育委員会 2007 『平成 18 年度 野洲市内遺跡発掘調査年報』

(2) 中主町教育委員会 2002 『平成 12 年度 中主町内遺跡発掘調査年報』

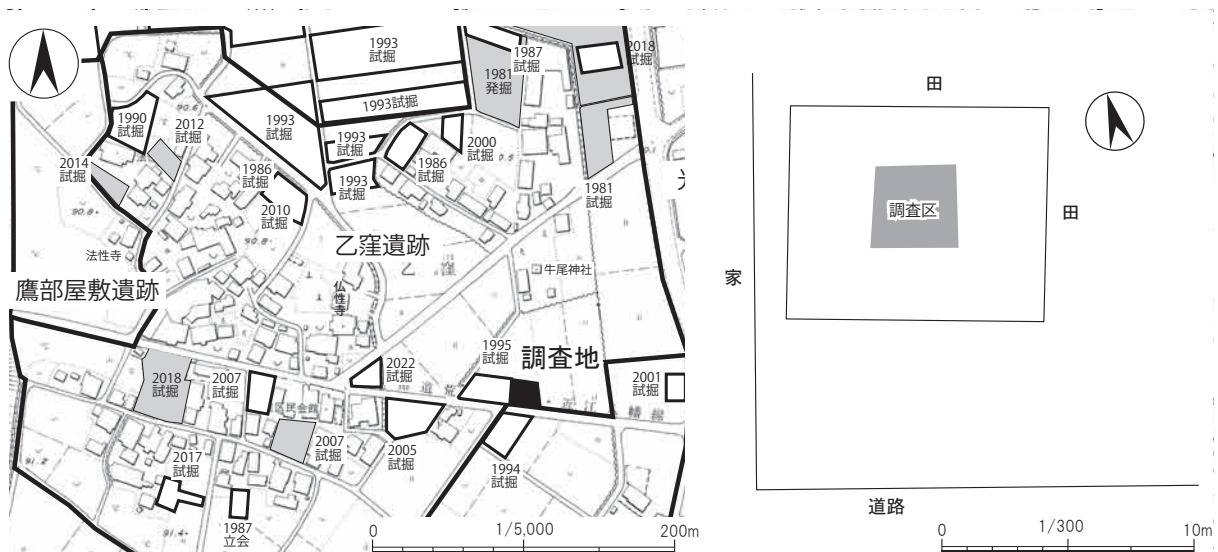
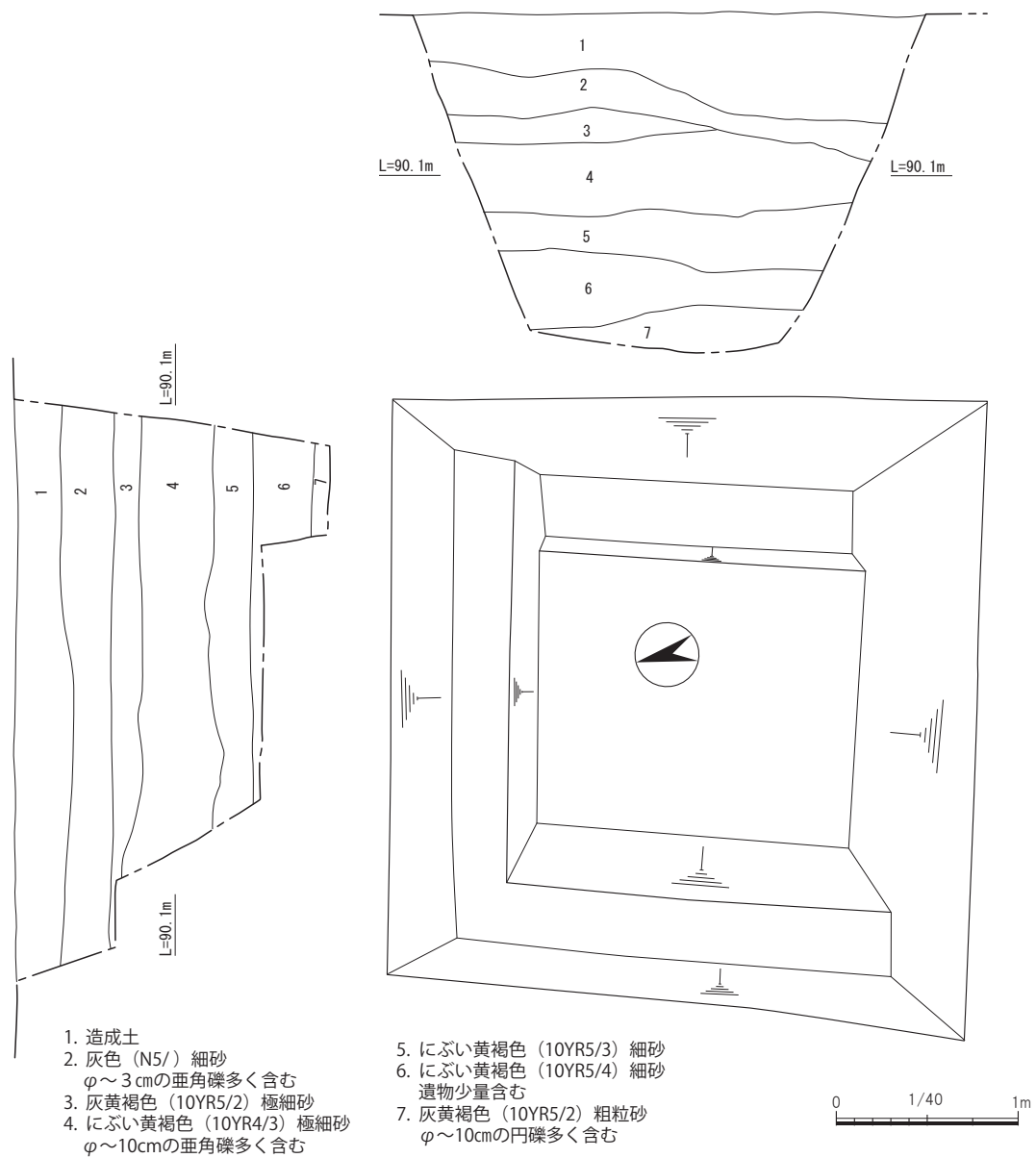


図 1 調査地位置図・調査区配置図



調査区平面（北東から）



東壁土層断面



## 35. 比江遺跡

調査地 野洲市比江字里ノ内 1160 番 6 の一部  
調査原因 個人住宅  
調査期間 令和 5 年 9 月 28 日

### 1. 調査経過

比江遺跡は、弥生～江戸時代の集落跡と周知されている。

調査地は比江遺跡の南東に位置する。調査は個人住宅建設に伴うものである。建物建築範囲に調査区を設定し、試掘調査を実施した。周辺の既往の調査としては、平成 17 年（2005）に北西側約 20 m 地点で調査が行われ、中世のピットや土坑 2 基等を検出している<sup>(1)</sup>。現地の調査は 9 月 28 日に行った。

### 2. 調査成果

調査は建物建築範囲に約 9.0㎡の調査区を設定し、試掘調査を実施した。地表面下約 1.2 m（標高約 90.6 m）まで掘り下げたところ、地表面下約 1.0 m で灰色極細砂層を確認した。この層が遺構面であり、落ち込みと石列を検出した。石列を構成する石材は 0.35 m × 0.2 m ほどの大きさの粗割石で、北東から南西方向に配される。平滑な面を上にとそえていないことや配列が不規則であることから当初の原位置はとどめていないと考えられる。石列の機能は定らかでないが、検出した落ち込みと合わせて考えると堀や溝等に伴う護岸施設等の可能性がある。なお、ピンホールでは裏込めや続く石材は確認できていない。遺構面は極細砂と砂層の互層であることから、当調査地は旧河道の自然堤防となっていたと考えられる。落ち込みは暗オリーブ灰色シルト、暗灰色極細砂土を埋土としており、掘方を確認するため一部西側を地表面下約 1.45 m までたち割ったところ、なだらかに北西側に傾斜することが確認できた。深さは 0.35 m 以上となる。落ち込み内の出土遺物から、寺院を圍繞する溝もしくは堀の可能性がある。落ち込みからは 15 ～ 16 世紀代の土師器・瓦・焼締陶器、また混入とみられ

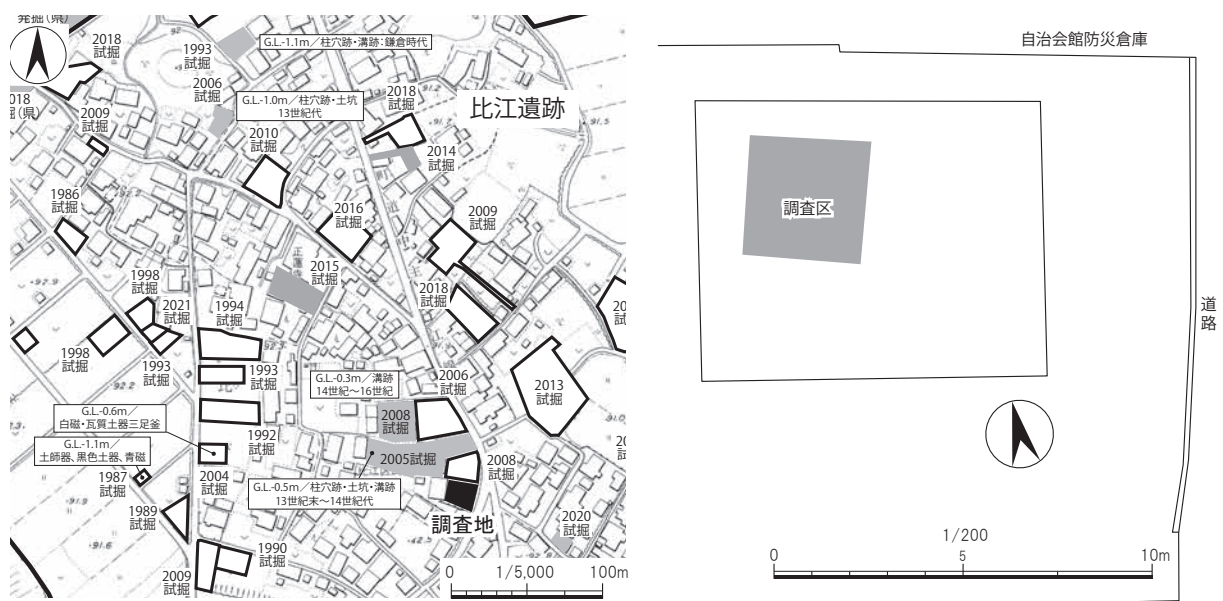


図 1 調査地位置図・調査区配置図

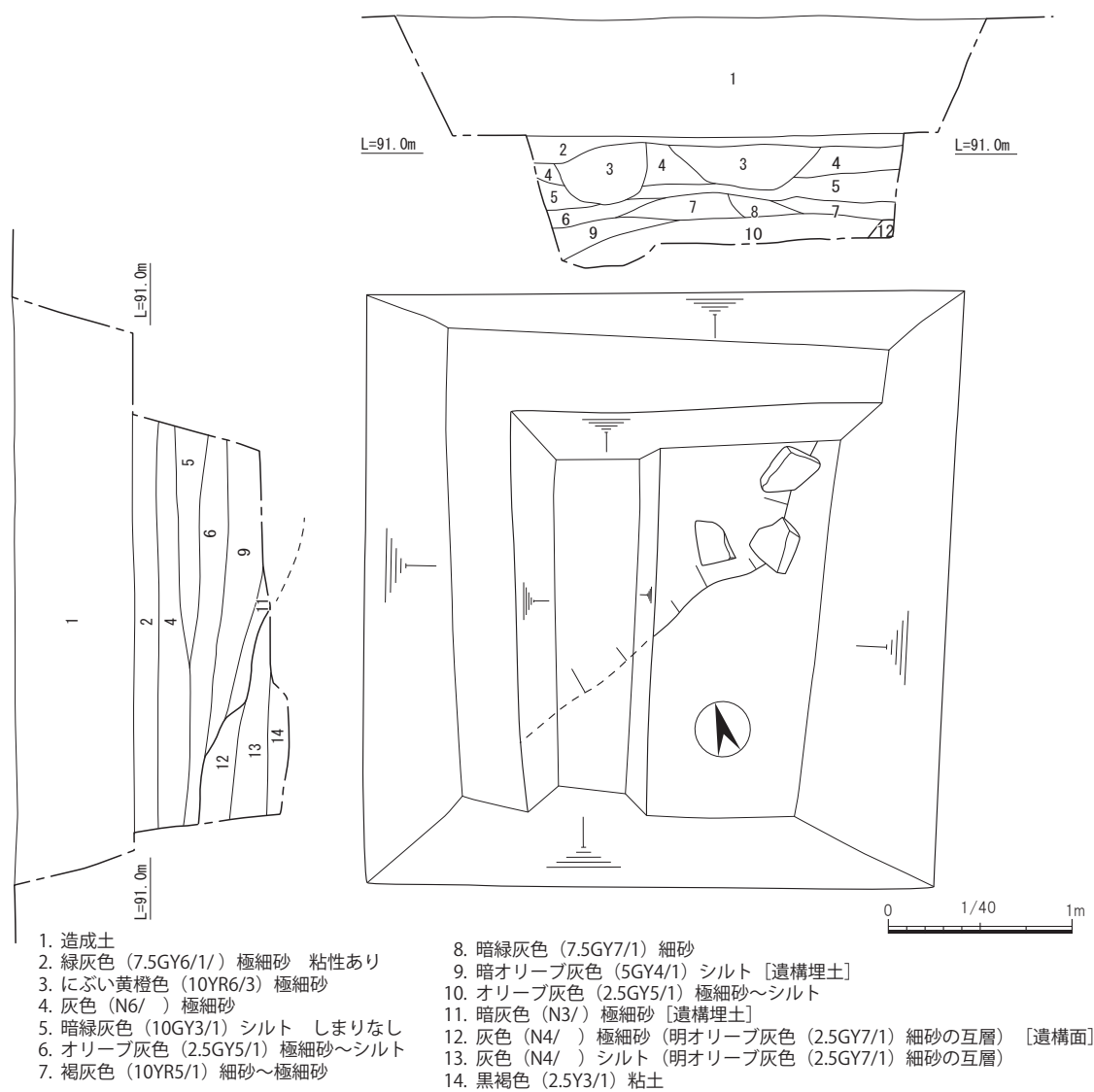


図2 調査区平面・土層断面図

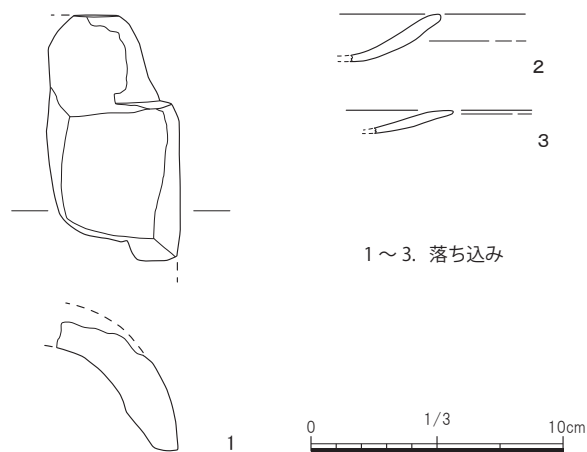


図3 出土遺物

### 35. 比江遺跡

る須恵器が出土した。【図 3-2 ～ 3】は土師器の皿である。2 は器壁が薄い。【図 3-1】は丸瓦で玉縁部が残存する。凹面は摩耗が激しいがかすかに布目痕が残る。

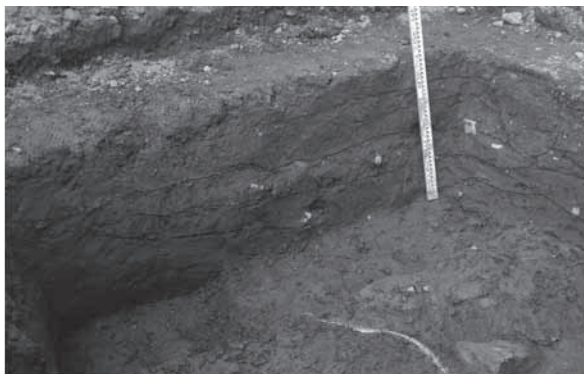
#### 3. まとめ

本調査地では石列と落ち込みを検出した。明治 6 年の比江村地券取調総絵図では当該地周辺に観音堂が所在し、周辺には溝がめぐっていることがわかる。今回検出した落ち込みはその溝と対応する可能性があるが、落ち込みからは近現代の遺物は出土していないことから確定はしない。本調査地から南側約 100 m 地点には市指定文化財である鎌倉時代の石造三重塔をもつ蓮乗寺が存在し、中世段階で当調査地周辺にも関連寺院の存在を伺うことができる。本調査地から南側にかけ約 200 m 範囲では調査例が少なく、さらなる調査例の蓄積が求められる。

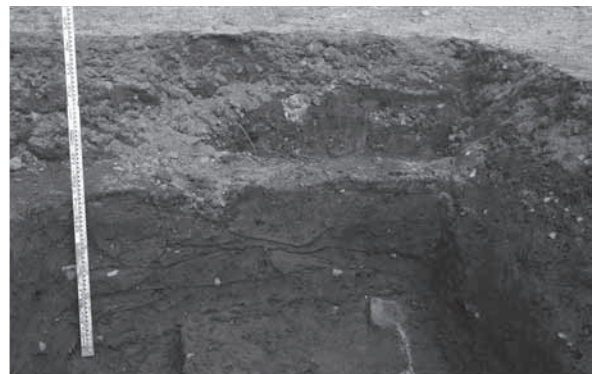
本調査地は比江遺跡の中世集落の一角と想定される。

(渡邊)

(1) 野洲市教育委員会 2006 『平成 17 年度野洲市内遺跡発掘調査年報』



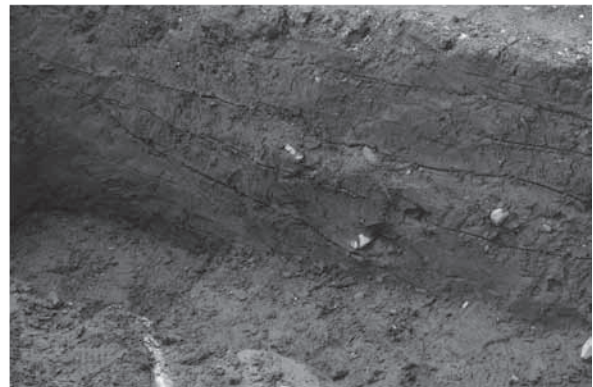
西壁土層断面



北壁土層断面



調査区（南西から）



落ち込み堆積状況



# 令和４年・５年 工事立会一覧

No.	遺跡名	届出地	事業内容	基礎深度	対象面積 (㎡)	届出者	立会日	立会結果
11	光明寺	西河原四丁目 2546番2	個人住宅	5.0m	61.27	個人	20221107	GL-0.8mまで掘り下げ。 遺構・遺物なし。
12	久野部	久野部 266-1	支線柱・追支線の設置	2.6m	1.25	関西電力送配電(株)	20221116	GL-2.6mまで掘り下げ。 遺構・遺物なし。
13	久野部	久野部地先	支柱の設置	1.0m	0.5	関西電力送配電(株)	20221116	GL-1.0mまで掘り下げ。 既存の盛土内の施工。
14	小篠原	栄 37-11	個人住宅	6.0m	61.34	個人	20221121	GL-6.0mまで掘り下げ。 遺構・遺物なし。
15	十八田	浅田 1714番、1715番1、 1715番2、1716番1、 1716番4、1716番6の一部、 1716番8	多目的広場	0.8m	2,291	橋本不動産(株)	20221124	GL-0.8mまで掘り下げ。 遺構面まで到達せず。 遺物なし。
16	木部	木部 1000-2、 1000-9、1000-12、 1000-14、1000-15	電柱の設置	2.8m	2.5	関西電力送配電(株)	20221203	GL-2.8mまで掘り下げ。 遺構・遺物は認められない。
17	小篠原	小篠原 2120-24	電柱の設置	2.6m	0.25	関西電力送配電(株)	20221206	GL-2.9mまで掘り下げ。遺構・ 遺物は認められない。
18	久野部	久野部 331番1	支線柱の設置	2.3m	0.25	関西電力送配電(株)	20230110	GL-1.6mで遺構面とみられる 黄色粘質土検出。 遺構・遺物は確認できない。
19	小篠原	小篠原字志禮 1409番地 25	分譲住宅	1.6m	45.57	(株)フェニックス	20230126・30	GL-1.0mで遺構面とみられる 明褐色土を検出。 遺構・遺物は確認できない。
20	福林寺	小篠原 510番地	地中埋設電線管 工事	1.0m	12	野洲市長	20230202	GL-0.6m以下は花崗岩のぼい らん土が堆積。 遺構・遺物なし。
21	西河原	西河原 886-4、 885-1	電柱・支柱の設置	2.8m	3	関西電力送配電(株)	20230204	GL-2.8mまで掘り下げ。 遺構・遺物は認められない。
22	五条	六条 377番地	地中埋設電線管 工事	1.0m	70	野洲市長	20230213・14	GL-1.0mまで掘り下げ。 遺構・遺物は認められない。
23	小堤	小堤 1102番、1157	電柱の移設	1.6m	1	関西電力送配電(株)	20230222	GL-1.6mまで掘り下げ。 遺構・遺物なし。
24	吉地大寺	吉地 1076	携帯基地局	3.5m	1.44	ソフトバンク(株)	20230301	GL-0.8mで遺構面とおもわれ るにぶい褐色土を検出。 灰色土を埋土とする落ち込みを確認。 遺物は認められない。
1	小篠原	栄字小縄手 1669番 101	分譲住宅	4.75m	53.8	(株)アーバンスペースデザイン	20230421	GL-4.75mまで掘り下げ。 遺構・遺物は認められない。
2	比江	比江 796	電柱・支線の設置	1m	0.75	関西電力送配電(株)	20230508	GL-1.0mまで掘り下げ。 造成土の下には褐灰色の砂質土が堆積。 遺構・遺物は認められない。
3	西河原宮ノ内	西河原 712	小学校の仮設配膳 室・仮設昇降場、 仮設渡り廊下建設	0.7m	250	野洲市長	20230605	GL-0.7mまで掘り下げ。 既存の盛土内の施工。
4	三上	三上字神守田 503番3、 字寺田 503番6	個人住宅	1.1m	146.5	個人	20230714	GL-1.1mまで掘り下げ。 GL-0.8mで黄灰色の遺構面を確認。 遺構・遺物は確認できない。
5	小篠原	小篠原字初田 1932番1の一部	集合住宅	0.3m	219.97	(株)中塚本社	20230724	GL-0.3mまで掘り下げ。 既存の盛土内の施工。
6	小篠原	小篠原 2503	電柱の設置	2.6m	0.75	関西電力送配電(株)	20230801	GL-2.6mまで掘り下げ。 遺構・遺物なし。
7	三上	三上字山寺 601番4	宅地造成	0.5~0.87m	365.34	個人	20230817	GL-0.5mまで掘り下げ。 遺構面まで到達せず。 遺物は認められない。
8	市三宅城	市三宅 1830-6	電柱の設置	2.6m	0.25	関西電力送配電(株)	20230912	GL-2.6mまで掘り下げ。 遺構・遺物は認められない。
9	木部	八夫 627-2	電柱の設置	2.3m	0.75	関西電力送配電(株)	20230918	GL-2.3mまで掘り下げ。 遺構・遺物は認められない。
10	大篠原西	大篠原字針目 3191番1外 19筆	工場建設	2.05~2.91m	5,951.47	(株)テクノスマート	20230926	GL-0.7mまで確認。 遺構・遺物なし。
11	市三宅東	市三宅 800番地	工場建設	3.35m	6,156	京セラ(株)	20231013	GL-5.2mまで掘り下げ。 遺構・遺物は認められない。 なお、令和6年3月1日に2 回目の立会予定。
12	市三宅城	市三宅字堂ノ後 3069	集合住宅	1.06m	116.1	個人	20231030	GL-0.6mまで確認。 地表面下0.5mで礫層に到達。 遺構・遺物は認められない。

報 告 書 抄 録

ふ り が な	れいわごねんど やすしいいせきはつくつちようさねんぼう
書 名	令和5年度 野洲市内遺跡発掘調査年報
シ リ ー ズ 名	
シ リ ー ズ 番 号	
編 集 者 名	教育委員会文化財保護課
編 集 機 関	教育委員会文化財保護課
所 在 地	〒 520-2492 滋賀県野洲市西河原2400番地 北部合同庁舎2階 TEL 077-589-6436
発 行 年 月 日	西暦 2024 年 3 月

ふ り が な		ふ り が な		コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名等		所 在 地		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
1	ながはら くてんあと 永原御殿跡	ながはらあざ ぼ うち 永原字馬場ノ内1031番地		252107	343-029	35° 09' 09"	136° 03' 55"	20220727 ~ 20230322	108.84	史跡の 内容確認
2	よしかわひがし で い せき 吉川東出遺跡	よしかわあざと うち 吉川字里ノ内1314番2		252107	342-044	35° 12' 05"	135° 99' 21"	20221011	10.2	個人住宅
3	こ づ み い せき 小堤遺跡	こ づ み 小堤 500番1外17筆		252107	343-001	35° 07' 69"	136° 04' 89"	20221018 ~ 1019	65	事務所棟 建設
4	や ぶ い せき 八夫遺跡	や ぶ あざと うち 八夫字里ノ内1487番5外2筆		252107	342-030	35° 09' 31"	136° 02' 22"	20221104	4	個人住宅
5	こ づ み い せき 小堤遺跡	こ づ み あざにし で 小堤字西出331番、334番		252107	343-001	35° 07' 79"	136° 05' 11"	20221129	9.0	個人住宅
6	ろくじょう い せき 六条遺跡	ろくじょうあざかわばた 六条字川端322番		252107	342-040	35° 10' 97"	136° 00' 89"	20221130	6.6	個人住宅
7	こ や ま い せき 小山遺跡	いりまちあざ こ や ま 入町字小山247番1外3筆		252107	343-020	35° 08' 96"	136° 07' 26"	20221206	6	個人住宅
8	と ば り が し い せき 富波東遺跡	と ば あざやまぐちおつ 富波字山口乙353番4		252107	343-056	35° 08' 03"	136° 03' 61"	20221208	8	分譲住宅
9	さい かろ い せき 斎ノ神遺跡	みょうこう じ あざにし く ぼ 妙光寺字西ノ久保286番3、290番3		252107	343-108	35° 06' 02"	136° 02' 80"	20221214	8	集合住宅
10	ひ る た い せき 比留田遺跡	ひ る た あざなか で 比留田字中出992番1		252107	342-017	35° 11' 06"	136° 02' 34"	20221216	6	個人住宅
11	じょうらく じ い せき 常楽寺遺跡	と ば あざまち うらこう 富波字町ノ裏甲1001番1の一部		252107	343-050	35° 08' 27"	136° 03' 51"	20221223	9	個人住宅
12	の だ い せき 野田遺跡	の だ あざと うち 野田字里ノ内1950番		252107	342-031	35° 12' 02"	136° 01' 47"	20230119	6	個人住宅
13	た か ぎ い せき 高木遺跡	た か ぎ あざはし うち 高木字橋ノ内704番1、704番4		252107	343-024	35° 10' 07"	136° 05' 53"	20230120	6	個人住宅
14	ひ る た い せき 比留田遺跡	ひ る た あざじけたか 比留田字重高743番5		252107	342-017	35° 10' 82"	136° 01' 90"	202300131	6	個人住宅
15	と ば り が し い せき 富波東遺跡	と ば あざやまぐちおつ 富波字山口乙353番5		252107	343-056	35° 08' 03"	136° 03' 60"	20230215	6	個人住宅

16	こうみょうじいせき 光明寺遺跡	にしがわら 西河原 925番5、921番6	252107	342-014	35°09' 84"	136°01' 08"	20230222	6	個人住宅
17	こしのはらいせき 小篠原遺跡	こしのはらあざはおき 小篠原字朴2221番2	252107	343-102	35°06' 84"	136°02' 43"	20230307～ 0308	13.5	個人住宅
18	とばひがしいせき 富波東遺跡	とばあざやまぐちおつ 富波字山口乙353番6	252107	343-056	35°08' 03"	136°03' 62"	20230314	6	個人住宅
19	とばひがしいせき 富波東遺跡	とばあざやまぐちおつ 富波字山口乙353番3	252107	343-056	35°08' 02"	136°03' 61"	20230315	6	個人住宅
20	にしがわらいせき 西河原遺跡	にしがわらあざろくはんだ 西河原字六反田896番2	252107	342-009	35°10' 12"	136°01' 32"	20230327	4	個人住宅
21	とばひがしいせき 富波東遺跡	とばあざやまぐちおつ 富波字山口乙353番2	252107	343-056	35°08' 02"	136°03' 60"	20230324	6	個人住宅
22	ごじょういせき 五条遺跡	ろくじょうあづじどう 六条字辻堂561番1	252107	342-034	35°11' 20"	136°00' 79"	20230421・ 0424	14	個人住宅
23	むしゅういせき 虫生遺跡	むしゅうあざさと うち 虫生字里ノ内200番の一部	252107	342-027	35°09' 87"	136°03' 02"	20230515～ 0516	15	個人住宅
24	おおしのはらにしいせき 大篠原西遺跡	おおしのはらあざはりめ 大篠原字針目3191番1外19筆	252107	343-004	35°08' 02"	136°05' 47"	20230607～ 0608	40	工場
25	やぶいせき 八夫遺跡	やぶあざさと うち 八夫字里ノ内1559番1	252107	342-030	35°09' 38"	136°02' 41"	20230616	10	個人住宅
26	にしがわらいせき 西河原遺跡	にしがわらあざさと うち 西河原字里ノ内85番3、86番2	252107	342-009	35°10' 41"	136°01' 79"	20230623～ 0626	16	個人住宅
27	ひるたいせき 比留田遺跡	ひるたあざじけたか 比留田字重高964番1、965番1	252107	342-017	35°11' 21"	136°02' 29"	20230801	13.5	個人住宅
28	たかぎいせき 高木遺跡	たかぎあざはし うち 高木字橋ノ内656番10、656番11	252107	343-024	35°10' 02"	136°05' 68"	20230808	10	個人住宅
29	あわじほうこうじいせき 安治放光寺遺跡	あわじあざきただ 安治字北田125番1の一部	252107	342-036	35°11' 77"	136°00' 82"	20230823	12	個人住宅
30	みかみいせき 三上遺跡	みかみあざしんもりでん 三上字神守田491番1	252107	343-062	35°04' 94"	136°02' 92"	20230829	9	個人住宅
31	みかみいせき 三上遺跡	みかみあざしんもりでん 三上字神守田491番1	252107	343-062	35°04' 94"	136°02' 89"	20230829	12	個人住宅
32	きべいせき 木部遺跡	やぶあざば ばおもて 八夫字馬場表627番2	252107	342-024	35°09' 75"	136°02' 58"	20230905	9	個人住宅
33	こしのはらいせき 2011 ことふん 小篠原遺跡・林ノ腰古墳	こしのはらあざはやし こし 小篠原字林ノ腰2500番	252107	343-107 343-102	35°06' 84"	136°03' 17"	20230921～ 20230925	25	個人住宅
34	おちくばいせき 乙窪遺跡	おちくばあざみやまいしはら 乙窪字宮前石原396番	252107	342-005	35°09' 85"	136°00' 85"	20230919	9	個人住宅
35	ひえいせき 比江遺跡	ひえあざさと うち 比江字里ノ内1160番6の一部	252107	342-001	35°08' 87"	136°01' 12"	20230928	9	個人住宅



令和5年度  
野洲市内遺跡発掘調査年報

印刷・発行	令和6年(2024)3月
編集・発行	野洲市教育委員会文化財保護課 滋賀県野洲市西河原2400番地 〒520-2492 TEL 077-589-6436
印刷・製本	奥野印刷株式会社